資料

（平成十七年十月）

第五十回「合宿教室」（伊勢）感想文集

――日本人としての自覚をもとめて――

社団法人　国民文化研究会

合宿教室50回の歩み　累計参加人員　一三、三三二名

回数	年　度	開催地	参加人員	主　要　講　師
1	昭和31年	霧　島	92	広田洋二・日下藤吾・川井修治
2	〃 32年	福　岡	127	竹山道雄・高山岩男・浅野晃
3	〃 33年	佐　賀	72	勝部真長・木下彪・森三十郎
4	〃 34年	阿　蘇	160	花田大五郎・中山優・野口恒雄
5	〃 35年	雲　仙	200	木内信胤・花田大五郎・佐藤慎一郎
6	〃 36年	雲　仙	203	小林秀雄・木内信胤・津下正章
7	〃 37年	阿　蘇	215	福田恆存・木内信胤・黒岩一郎
8	〃 38年	雲　仙	202	竹山道雄・木内信胤・木下広居
9	〃 39年	桜　島	202	小林秀雄・広田洋二・木内信胤
10	〃 40年	大　分	215	岡潔・花見達二・木内信胤・夜久正雄
11	〃 41年	雲　仙	240	福田恆存・木内信胤・戸川尚
12	〃 42年	阿　蘇	336	林房雄・太田耕造・木内信胤
13	〃 43年	霧　島	353	竹山道雄・高谷覚蔵・木内信胤
14	〃 44年	阿　蘇	403	岡潔・木内信胤・木下道雄・奥田克巳
15	〃 45年	雲　仙	491	小林秀雄・木内信胤・桑原暁一
16	〃 46年	霧　島	302	村松剛・木内信胤・戸田義雄
17	〃 47年	阿　蘇	402	木内信胤・山本勝市・胡蘭成
18	〃 48年	雲　仙	433	村松剛・木内信胤・山口宗之
19	〃 49年	霧　島	528	小林秀雄・木内信胤・戸田義雄
20	〃 50年	阿　蘇	435	福田恆存・木内信胤・夜久正雄
21	〃 51年	佐世保	372	長谷川才次・村松剛・木内信胤
22	〃 52年	雲　仙	332	木内信胤・衛藤瀋吉・高木尚一
23	〃 53年	阿　蘇	440	小林秀雄・木内信胤・松本唯一
24	〃 54年	霧　島	268	木内信胤・高山岩男・山田輝彦
25	〃 55年	雲　仙	431	福田恆存・法眼晋作・宝辺正久
26	〃 56年	阿　蘇	353	齋藤忠・村松剛・青砥宏一
27	〃 57年	霧　島	321	齋藤忠・黛敏郎・幡掛正浩
28	〃 58年	雲　仙	327	齋藤忠・小堀桂一郎・長内俊平
29	〃 59年	阿　蘇	302	吉岡一郎・小堀桂一郎・加納祐五
30	〃 60年	阿　蘇	249	市原豊太・高村坂彦・小田村四郎
31	〃 61年	島　原	294	江藤淳・村松剛・小柳陽太郎
32	〃 62年	阿　蘇	269	小堀桂一郎・鈴木一・關正臣
33	〃 63年	島　原	227	児島襄・小堀桂一郎・加納祐五
34	平成元年	島　原	204	村松剛・山田輝彦・国武忠彦
35	〃 2年	阿　蘇	204	黛敏郎・小柳陽太郎・占部賢志
36	〃 3年	厚　木	244	田久保忠衛・国武忠彦・山内健生
37	〃 4年	阿　蘇	257	村松剛・平川祐弘・奥冨修一
38	〃 5年	厚　木	271	村松剛・佐伯彰一・白濱裕
39	〃 6年	阿　蘇	253	徳岡孝夫・小堀桂一郎・絹田洋一
40	〃 7年	厚　木	240	小川三夫・長谷川三千子・東中野修道
41	〃 8年	阿　蘇	171	竹本忠雄・伊藤哲夫・坂口秀俊
42	〃 9年	厚　木	213	西尾幹二・竹本忠雄・酒村總一郎
43	〃 10年	阿　蘇	193	小堀桂一郎・徳岡孝夫・志賀建一郎
44	〃 11年	富　士	178	井尻千男・長谷川三千子・山口秀範
45	〃 12年	阿　蘇	154	小堀桂一郎・東中野修道・布瀬雅義
46	〃 13年	富　士	150	伊藤哲夫・長谷川三千子・小野吉宣
47	〃 14年	江田島	244	中西輝政・山内健生・青山直幸
48	〃 15年	富　士	171	小堀桂一郎・伊藤哲夫・占部賢志
49	〃 16年	阿　蘇	170	中西輝政・小田村四郎
50	〃 17年	伊　勢	219	長谷川三千子・松浦光修

第五十回〝合宿教室（伊勢）〟全参加者の感想文と短歌詠草

とき　平成十七年八月二十六日（金）から二十九日（月）まで三泊四日間

ところ　三重県伊勢市「神宮会館」

参加総数　二一九名

目　次

〝はしがき〟に代へて……理事長　上村和男…2
大学別参加者数・その他の人数の内訳……5
〝合宿教室〟の日程表（三泊四日）……6
第50回〝合宿教室〟のあらまし……7
走り書きの〝感想文〟と第二回目の〝短歌詠草〟……参加者全員…27
短歌詠草……合宿中の創作作品……参加者全員…111
あとがき……131
カメラ・レポート30枚（29ページから87ページの左頁に掲載）

″はしがき″に代へて

本会理事長・東海ゴム工業㈱顧問
上村和男

昭和三十一年の本会創立以来、記念すべき五十年目の節目を迎へての「合宿教室」は、「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ぼう」を合言葉に、全国各地から青年・学生等二百二十名が集ひ、八月下旬三泊四日間、伊勢神宮会館で開催された。開催日には台風の伊勢湾上陸が懸念されたが何事もなく、開会中は好天に恵まれ毎朝清々しい心持ちで玉砂利を踏みしめ、神々しさの中に内宮に参拝するといふ得難い経験をしたことが、この感想文の中にも記されてをる。

参拝を終へ、島路山からの朝の光を背に神路山を仰ぎ、国旗掲揚、国歌「君が代」を斉唱し、ラジオ体操を行つての朝の集ひも伊勢神宮のかもし出す雰囲気の中に充実した一日がはじまるのであつた。

お招きした講師は、第一日目は皇学館大学助教授の松浦光修先生で、日教組の歪んだ教育のあり方に敢然と戦つて教育の正常化に努めてをられる新進気鋭の学者である。

先生は「神国日本―神話と神宮」についてご講義をされた。神話について、世の中には触れることも見ることもできないものが厳然とあり、それは心で見るしかないと、サン・テグジュペリの『星の王子さま』から「なに、なんでもないことだよ。心で見なくちゃ、ものごとは見えないってことさ。かんじんなことは、目に見えないんだよ」を引用され、現在、日本人の中に欠けてゐる心眼を養ふ大切さを指摘された思ひがした。そして、一枚の写真は、他の人にとっては単なる写真でしかないが、その人にとっては、現在と過去を結ぶ個人的な体験であり一つの物語となると。それは暗に神話についても祖先の生き方をその中に見る心を養ひ、祖先が皇室を中心として生きてきた姿を心に思ひ浮かべ、自分が国の為にどう生きるのが正しいかを知つたなら消えかけ滅びかけてゐる日本の道を次の世代に甦へらせませうと力強く結ばれた。

第二日目は埼玉大学教授長谷川三千子先生で、本会の顧問をしていただいてをる。

先生は、「日本人の思想の源」についてご講義され、日本人の思想の源泉は時間的にも空間的にも遠いところにあるのではな

く、皆さんが日常使つてゐる言葉そのものにあることを話され、私たち日本人は日本語を使ふことを当然のこととし、全く意識してないこと、言葉と思想がいかに密接な関係にあるかを説かれ、日本文化の淵源がそこにあり、言葉そのものが祖先から受継がれたものであることが理解できた。また、中国語には「てにをは」に当るものはなく、日本人はそこに日本語との違ひがあることに気づき「てにをは」の規則を研究したのが日本における文法研究の出発点であり、「てにをは」は玉を貫く緒のやうなものであり有限な言葉を無限に働かせる役割を担つてゐることを例を挙げて話された。

日程が進むに従ひ、講義や班別討論、さらに和歌相互批評などによつて、この合宿が目指す「学問を身につけ、心の中に養ふ」といふことが生活実践の中で体験的に把へられていつた。ここでは、年令の差も、学問の深浅も、大学の優劣の差も、上級生下級生の差も先輩後輩の差も、さらに職域の差も、社会経験の差も、要するに社会生活における差別感に価値をおかず、お互ひに一人の人間として〝まごころ〟を披瀝し合ふ経験が積まれていつた。それが顕著に現はれたのが和歌相互批評であつた。お互ひ相手の気持になつて言葉を選びながら歌を直し合ふといふ心の交流によつて、大ぜいの人が心を一つにして生きるといふことが体験的に理解されていつたのである。そして日本民族が世界の平和について寄与する道が、その角度から明るく指向されていつた。

なほ、ここに編したこの「感想文集」は、参加者全員が帰りがけに走り書きで書いてくれたもので、見方によつては大変稚拙なものもあるが、いまの日本のただならぬ行き詰まり状況に当面してゐる中で、精魂を傾け自分の思ひの丈を書きとめてくれたものである。紙面の都合上全文をそのまま載せ得なかつたことは残念だが、なにとぞご容赦いただきたいと存ずる。

全参加者の熱心な姿勢は、今年も、この「合宿教室」を見事に結実させていただいた。併せて合宿運営委員長の山口秀範さんをはじめ運営委員、指揮班の方々の御苦労に感謝申し上げると共に、この文集全体の編集に、十余名の会員（編集後記に記載）が仕事の余暇をさいて取組んでくれたことにも心から感謝いたします。

最後になりましたが、この合宿事業を行ふに当り本年もまた、朝野からお寄せ下さつた得難い御支援の数々に対し、会員一同に代り心から厚く御禮申し上げます。

第50回全国学生青年合宿教室（平成17年８／26～８／29）於「伊勢神宮」

参加者

（学生班　四十大学）（洋数字は参加学生数）

北海道大学２　東北大学１　早稲田大学８　東京大学４　獨協大学４　防衛大学校２
亜細亜大学２　慶應義塾大学２　日本大学２　麗澤大学２　明治大学１　明星大学１
東京理科大学１　東京芸術大学１　一橋大学１　拓殖大学１　成蹊大学１
お茶の水女子大学１　東京純心女子大学１　京都大学１　大阪大学１　同志社大学１
立命館大学１　大阪教育大学１　広島大学１　九州工業大学５　福岡教育大学４
福岡大学３　九州大学３　長崎大学３　佐賀大学２　中村学園大学１
下関市立大学１　九州造形短期大学１　福岡女子大学１　九州女子大学１
西南女学院大学１　崇城大学１　鹿児島大学１　英国国立アストン大学１
高校生１

計　七十四名（うち女子二十六名）

（社会人参加者）　五十六名（うち女子二十一名）

（招聘講師）　二名

（国民文化研究会）　七十五名

（事務局）　五名

（写真）　一名

（見学参加者）　六名

総計　二一九名

㈳国民文化研究会・大学教官有志協議会　主催

第50回（平成17年）全国学生青年“合宿教室”日程表

	8月26日（金）	8月27日（土）	8月28日（日）	8月29日（月）
5:30		（起床）	（起床）	
6:00	（注意）↓ 参加者は、一班七名前後の班に所属します。会場入口受付で、所属する班を確認のこと。	洗面	洗面	
		（6:00）	（6:00）	
7:00		早朝参拝 朝の集ひ 班別散策 （写真撮影）	早朝参拝 朝の集ひ 班別散策	（起床） 洗面
				（7:00）
		（7:30）	（7:30）	朝の集ひ （7:30）
8:00		朝　食	朝　食	朝　食
		（8:30）	（8:30）	（8:30）
9:00		講義 「日本人の思想の源」 埼玉大学教授 長谷川三千子 先生	講義 「日本の国柄 —新旧の不思議な共存—」 拓殖大学客員教授 山内健生 先生	講義 「我らが道統と学問」 太宰府高等学校教諭 占部賢志 先生
10:00		（10:00） 質疑応答	（10:00）	（10:00）
		（10:30）		参加者による 全体感想自由発表
11:00		班別研修	班別研修	（11:00） 地区別懇談
				（11:30）
12:00	随時受付	（12:00）	（12:00）	感想文執筆 第２回短歌創作
	（1:30）	昼　食 休　息	昼　食 休　息	（12:30） 昼　食 （班別懇談）
1:00	開会式 （挨拶）国民文化研究会 会長 小田村四郎氏	（1:00）		（1:30）
	オリエンテーション （合宿趣旨説明） 合宿運営委員長 山口秀範氏 （諸注意伝達） 合宿指揮班長 庭本秀一郎氏	短歌創作導入講義 みずほコーポレート銀行 勤務 小柳志乃夫 先生	（1:30）	閉会式 （挨拶）国民文化研究会 理事長 上村和男氏
2:00		（2:00） 『名歌でたどる日本の心』について 今林賢郁 先生	創作短歌全体批評 「和歌と友情」 国民文化研究会 副会長 長内俊平 先生	（2:00） 解　散
	（2:30）	（2:30）		
3:00	合宿導入講義 「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」 住電エレクトロニクス社長 布瀬雅義 先生	野外研修 （外宮参拝） （神楽奉納）	（3:00）	
4:00	（4:00） 班別研修		班別 短歌相互批評	
5:00		（短歌提出）	（短歌再提出）	
	（5:30）	（5:30）	（5:30）	
6:00	夕　食 入　浴 休　憩	夕　食 入　浴 休　憩	夕　食 入　浴 休　憩	
7:00	（7:00） （神宮のビデオ）		（7:00） 講話 国民文化研究会 副会長 宝辺正久 先生	
	（7:30）	（7:30）	（7:30）	
8:00	講義 「神国日本—神話と神宮—」 皇學館大學助教授 松浦光修 先生	会員発表 防衛大学校教授 太田文雄 氏 富山工業高等学校教諭 岸本　弘 氏	（慰霊祭の説明） 工学博士・元新潟工科大学教授 大岡　弘 先生 慰霊祭 （8:30）	
9:00	（9:00）	（9:00）	班別研修 （9:00）	
10:00	班別研修	班別研修	夜の集ひ	
	（10:30）	（10:30）	（10:30）	
11:00	就　床 （11:00） 消　灯	就　床 （11:00） 消　灯	就　床 （11:00） 消　灯	

第五十回〝合宿教室〟のあらまし

第一日目　（八月二十六日・金曜日）

第五十回全国学生青年合宿教室は、「日本人の心のふるさと伊勢神宮で学ばう」との呼び掛けのもと、三重県伊勢市「神宮会館」にて開催された。ここでの合宿教室開催は初めてである。「神宮会館」は、神路山のふもと伊勢内宮のお膝元に位置し、毎朝の内宮正宮への早朝参拝を日程に組み三泊四日の合宿教室は始まった。北は北海道から、南は鹿児島に至る全国各地から集まつた参加者は、長旅の疲れもものともせず、受付をすませるとただちに開会式に臨んだ。

開会式

亜細亜大学四年佐野宣志君の開会宣言の後、主催者を代表して小田村四郎会長は「記念すべき五十回目の合宿教室を日本人の心の故郷である伊勢の地で開催することができた。昭和三十一年の第一回以来の半世紀、経済復興を成し遂げたが精神面での頽廃は逆に深刻化してゐる。靖国神社の参拝は当然のことであったし自国の歴史を謝罪するなどといふこともなかった。今年は戦後六十年であり日露戦争勝利百年である。この合宿では六十年前、百年前の先人の心組みを真剣に顧みて貰ひたい。一人の国民として年齢や学年の差違を超えて語り合ひ学んで欲しい。そして合宿が終るときには終生の交りを結ぶことのできる心の友とな

るやう努めて戴きたい」と挨拶した。続いて明治大学四年の小柳雄平君が「新たな出会ひを楽しみに伊勢にやってきた。班別の輪読や討論を通して文章を深く読み味はひ意見を交換することで良き友達を作ることができる。今年も一生付き合へる新たな友をつくりたい」と参加学生を代表して合宿に取り組む決意を述べた。

次に、合宿運営委員長・山口秀範氏は「皆さんにとつてこの合宿が、夏休みの一番充実した思ひ出になることを信じます。どうか精一杯合宿に取組んでいつて下さい」と励まされた。

合宿導入講議　「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」

住電エレクトロニクス社長　布瀬雅義先生

先生は「講義内容を覚えてそれだけで頭を一杯にして帰っても意味がない」と学生時代の体験を振り返り、この合宿で学ぶ心構へについてまづ語られた。そして小泉首相の靖国神社参拝を批判する朝日新聞の社説を例示しつつ、「自分の頭で考へる」とは「心のうちにある良識を働かせることであり、事実を自分の目で確かめてみること」だと説かれた。次に「自分の心で感じる」ことについて、支那事変における所謂「百人切り競争」の捏造報道の経緯と、その記事を根拠に処刑された野田・向井両少尉の日華両国の親善を祈念する旨の遺書を紹介し、御遺族の労苦に触れて「皆さんが、お二人やその遺族の立場だったらどのやうに思ひますか」と問はれた。

最後にブラジルの日系人のナタリアさん（十七歳）が江田島や靖国神社を訪れた際の感想文を取り上げ、戦歿者に対し「あなた方の命はむだにはならなかった」「あなたの生命をもらって今生きているよ。本当にありがとうございました」云々と記してゐる文章に触れながら、「自分の言葉で語る」とは自分の気持ちを正確に表す言葉を見つけることであり、班別研修においても友の言葉からその思ひを正確に掴む努力をかさねて貰ひたいと説かれた。

講義終了後、参加者は各班室に戻り、導入講義について班別研修を行つた。まづ皆で講義内容を正確にたどりながら、講師の最も伝へたかつたこと、重要なことは何かを話し合ひ、さらに班員一人一人がどのやうに受け止めたかについて、話し合ひがすすめられた。なほ、この班別研修は、以後の各講義の後にも続けて行はれた。お互ひ初対面のせゐか、初めのうちは緊張して意見も少なく発言も限られてゐたが、お互ひに打ち解けるに従ひ次第に討論も活発となり、時には反論し、時には共感し合ひながら、班員相互の心の交流が深められていつた。

講義　「神国日本―神話と神宮―」

皇学館大学助教授　松浦光修先生

先生は、神話について「世の中には触れることも見ることもできないものが厳然としてあり、それは心で見るしかないのです」と指摘された。須佐の男の命が鬚が生えるまで母を恋慕ひ泣き続け、それから男として立派に成長して櫛名田比売と結婚するに至る物語には、人類共通の英雄体験が語られてをり、さういふ物語を通してしか人は人たり得ないと述べられた。そしてさうした神話が、世界で我が国だけに今も生き続けてゐることを、ポセイドンの廃墟と塩釜神社祭礼との対比、伊勢神宮参拝時のアーノルド・トインビーの感動やアンドレ・マルローの驚嘆を紹介しつつ語られた。次に先生は、『日本書紀』が伝へる「三大神勅」に触れた後、天皇の祈りについて「祈りとは国民の幸福を願ひ、愛を注ぐ行ひです。この皇室がなくなったら、日本の国体はなくなるのです。国体がなくなったら、どんなに暮しが豊かであらうと無意味なのです」と説かれた。

最後に先生は、論語の言葉「人能く道を弘む」を紹介され、この言葉が水戸の弘道館に繋がり、明治維新の思想的発火点となった史実を振り返られ、「自分が国のためにどう生きるのが正しいことなのかを知ったならば、勇気を振るひ口に出して初め

て意味があるのです。どうか皆さん、消えかけた、滅びかけたこの日本の道を次の時代にもう一度美しく甦らせませう」と結ばれた。

第二日目　（八月二十七日・土曜日）

例年合宿の日程は「朝の集ひ」から始まる。ただし本合宿では、それに先立ち早起きし、班単位での内宮早朝参拝から日程が始まった。朝方の清やかな空気を吸ひつつ、玉砂利を踏みしめ一歩一歩神さびし路を進み、内宮に参拝した。その時の感動は普段の生活では滅多に味はへないもののごとく、多くの人がそれを歌にしてゐた。参拝後内宮入口の広場の一角にて、国旗掲揚、体操を行つた。その後学生代表による秀歌紹介がなされた。各朝の紹介者と短歌は左の通りである。

八月二十七日　東京大学　武田　有朋

若山牧水　友を思ふ歌

いま来よと言ひ告げやらば為し難き事をして来む友をしぞおもふ

八月二十八日　早稲田大学　川井　茜

明治天皇御製　歌

まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり

八月二十九日　九州工業大学　瀬木裕太郎

明治天皇御製　をりにふれて

なすことのなくて終らば世に長きよはひをたもつかひやなからむ

講義

「日本人の思想の源」

埼玉大学教授　長谷川　三千子　先生

先生は、まづ日本人の思想の源泉は遠いところにあるのではなく、日本語といふ言葉の中にあることに気づいて欲しいと説かれた。そして、私たち日本人は、日本語を使ふことをまったく意識してゐないことをあげて、言葉と思想がいかに密接な関係にあるかを述べられた。

先生は、ほとんどの民族は言葉の体系をもってゐるが、言葉についての学問をもってゐる民族は、ギリシャ人、インド人、日本人など、非常に少ない。それは異言語にぶつかった経験のある民族であり、日本は漢字と云ふ文字をもった中国語と遭遇したことを指摘された。中国語には日本語の「てにをは」にあたるものが少なく、日本人はそこに日本語との違ひがあることに気づいて、「てにをは」の規則を研究したのが、日本における文法研究の出発点であったと説かれた。また「てにをは」は、玉を貫く緒のやうなものであり、有限な言葉を無限に働かせる役割を担ってゐることを話された。さらに、文法とは無意識の思考の構造を形造ってゐるものであると指摘され、インド・ヨーロッパ語と日本語の構造の違ひを具体例をあげて解説しながら、近年、日本で明治以来日本語をインド・ヨーロッパ語から生れた言語学で理解しようとしてきたことに対する反省が起ってゐるが、これは現代日本人が漸く江戸時代の国学者が到達した時点に戻ったとも云へると述べられた。

最後に先生は、日本人の思想の源泉は、日常使ってゐる言葉そのものにある、そのことに気がつくとき、日本文化の底力に自信が湧いてくるのではないかと御講義を結ばれた。

短歌創作導入講義

みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫　先生

はじめに先生は、短歌とは詠まうといふ気持ちがあれば小学生でも詠めると前置きされ、歌の世界は日本人が古今を通じ色んな思ひを託してきた「広やかな世界」であり、スサノオノミコトの新婚の喜びの歌が最初の短歌であることからも実に楽しい世界であると説かれた。しかし趣味的な歌を詠むのが目的ではないとし副島羊吉郎先生の体験を例に上げ、明治天皇の「薄暮眺望」「山家燈」と題する御製に見られる国民の生活に思ひを馳せられた御歌と、これを誦まれた黒上正一郎先生の声が副島先生に深い感動と人生の転機を与へたお話を紹介して、人生を深く味はふことになるのが短歌創作であると指摘された。作歌の際の心構へについて、理屈は歌にならないことや作歌には真剣に取り組むべきであり、感動を詠むのが基本であると語られた。

作歌上の留意点を指摘した後、戦歿学徒松吉正資さんの遺歌を鑑賞して終へられた。

『名歌でたどる日本の心』紹介

日鉄プラント設計顧問　今林賢郁　先生

先生は、このたび国文研五十周年を記念して出版された草思社刊『名歌でたどる日本の心』は、小柳陽太郎先生を中心に十四名の会員が二年がかりで編んだもので須佐之男命から昭和天皇までの日本歴史を貫く「日本の心」が辿られてをり、是非ともこの本を手にして私達の先祖達の美しい心を感じてほしいと語られた。

野外研修

短歌創作導入講義、新刊紹介の後、班単位でバスに分乗して、豊受大神をお祭り申し上げる伊勢外宮に向つた。外宮でも参加者は班毎に思ひ思ひにあまたあるお宮への参拝を繰り返し、定刻になり神楽殿前に集合した。神楽殿では、奉納神楽の舞を、参加者は正座して鑑賞した。この折りの体験も、足の痛み痺れの記憶と共に、得難いものとして、多くの人が思ひ出深く歌に詠んでゐたところである。神宮会館に戻つた参加者は、夕刻までの時間、指を折りながら短歌創作に余念がなかつた。

会員発表①　「治己、知彼、応変」

防衛大学校教授　太田文雄先生

先生は国家同士の戦ひのみならず、人生万般に適応できる原則は、吉田松陰先生が示した「治己、知彼、応変」に尽きると語られた。「己を治める」とは「正道に随って自分、自国を強める」ことであり、合宿教室で「国の歴史と文化をより深く理解する」ことは自国の素晴らしさを認識し、それが自分の国を正すと云ふことに他ならないとされた。次に「彼を知る」とは「敵情や自己の置かれた環境を知る」ことであり、この合宿で「世界における日本のあり方」を学ぶことに通じてゐるとされた。そして「変に応ず」とは「敵及び味方の情勢の変化に応じて、適切な対策を立てる」ことであり、これは合宿教室で学ぶ「古典や短歌を通じて育まれる豊かな感性」に根ざしてゐると指摘された。また歴史を顧みれば、国家滅亡の真因は外敵の侵入によるといふよりも国内問題にあったことが理解される、即ち国防の根本問題は国内問題であり、国民一人一人に深く根ざしてゐると語られた。

会員発表②

「他と共なる生」を求めて

富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘　先生

先生は、黒上正一郎先生著『聖徳太子の信仰思想と日本文化創業』について小田村寅二郎先生の輪読ご講義録を中心に語られた。そしてご自身の教員生活の中に聖徳太子や太子を仰ぐ黒上先生のお言葉がどのやうに生きてゐるかを、勤務校の金属科の生徒、剣道部の部員との付き合ひの日々を紹介しながら話された。また太子のお言葉、明治天皇の御製に触れながら、「他と共なる生」を願はれた深いお心を偲びつつ、『万葉集』の「防人の歌」、そして『古事記』の伝へる倭建命の物語を声高らかに朗読された。一つの文章に心底から向き合ひ、文章の書き手の真意にせまることの大切さを示してくださった。

第三日目　（八月二十八日・日曜日）

講　義

「日本の国柄―新旧の不思議な共存―」

拓殖大学客員教授　山内健生　先生

先生は、初めに現在の日本の状況について、偏向マス・メディアによる「毒化作用」によって国全体が酩酊状態にあるのではないかと指摘された。以前は全く問題にすらならなかった所謂靖国問題を増幅させてゐるのも朝日新聞などの無責任メディアであり、「相手は時に墓を暴いて死屍を鞭打つ過去否定の文化の持ち主であって、その歴然たる違ひを認識すべきで安易に理解を期待して歩み寄るべきではない。もともと外交のテーブルに載る事柄ではない」と指摘された。次に、日本国憲法についてあく

までも大日本帝国憲法の改正であり、明治時代からの連続性を強調するなかで誕生してゐる事実を抜きにしては憲法の本質は分らないと語られた。

続いて、今上陛下の御即位の折の諸儀式に触れられ、「即位礼や大嘗祭の諸儀のたびに、祖先の神々に奉告されてゐる。また、事後には神代三陵に御奉幣なさってをられる。悠遠な神話の世界につながり、御祖先を大切にされてをられる。これが易姓革命とは異質の万世一系の国柄といふことである」と今上陛下のご姿勢を語られ、この敬神のご精神は皇室の伝統であることを歴代天皇の御製に仰がれた。最後に滞日五十年に及んだトーマス・インモースの「この国の過去の泉は深い」といふ詩と「新旧の不思議な共存」といふ言葉を紹介され、「神宮の式年遷宮はまさにこの言葉の具体的な現れである。太古の建築の形を受け継ぐことは、太古の心を受け継ぐことに他ならない」と語られ締め括られた。

創作短歌全体批評

「和歌と友情」

元電源開発環境立地本部長代理　長内俊平先生

先生は、参加者全員の「歌稿」の中から、各班から一首づつ取り上げて批評を加へながら、「和歌と友情」の世界についてご体験を交へて述べられた。その中で、歌は自分で苦労して一所懸命作ることによって、素晴しい歌が分るやうになる。歌が上手くなるには、例へば友達や恋人に向けて、景色を見て「綺麗だな、これをあの人にも見せてあげたいな」、食事をして「美味しい、これをあの人にも食べさせてあげたいな」と思ふやうなことを詠むことだと言はれた。先生は、同じものを見ても見る人によって違ふ歌になると仰って、明治天皇の「つぎつぎにあがるを見れば雲の上に入りしひばりや友をよぶらむ」といふ御製を紹介され、これは明治天皇様にご友情についての篤いご体験があってこそ生れたものではなから

うかと語られた。

最後に先生は、班での短歌相互批評では、相手の気持ちになって話を聴いて、お互ひに作者の気持ちに即したものとなるやうに直し合ふことで、またとない友達を得て下さいと述べられた。

班別短歌相互批評

全体批評の後、各班に分かれて短歌相互批評が行はれた。歌をつくつたのは初めてといふ参加者が多かつたが、皆、一人一人の歌に心を寄せて、作者の思ひに添ふ正確な表現を求めて心を砕いていつた。人の思ひを正確に受け止めること、自分の気持ちを伝へることが如何に難しいかを実感させられたが、お互ひの心が通ひ合ふひとときであつた。

講話　「書と、人の声 ―み祖のいのちなつかしきかな―」

国民文化研究会副会長　寳邉正久先生

先生は、冒頭に副島蒼海の「まこととまごころが無ければ一切のものは無い」といふ言葉を紹介され、まごころを持って御霊と向き合ふことの意味を示された。そして、まごころについて、人の声のこもった書（ふみ）は人の命の象徴であって、戦時・平時を問はず命を捧げた方々に対して、その人の命と真向ふ事が慰霊祭の柱であると説かれた。そして歴史を貫く筋金は愛惜（あいせき）といふ思ひであって、その愛惜の中に亡くなられた方々の志も命も一つに繋がって行くと話され、終戦直後、天皇陛下に申し訳ないと自刃された同年輩の寺尾博之さんを偲ばれた。終戦の詔書の中に国民のまごころをお信じになる「國體ヲ護持シ得テ」「臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ」といふ箇所があるが、寺尾さんの死は天皇陛下に抱きか

かへられたといふほかはないと語られた。

慰霊祭

慰霊祭の意義と祭の次第、参列の心構へについて、元新潟工科大学教授大岡弘先生によって説明がなされた後、講堂において厳修された。講義室の壇上に設(しつら)へられた祭壇の前に参加者は整列。祓詞(はらへことば)に代へて、長内俊平先生が三井甲之先生詠の「ますらをのかなしきいのちつみかさねつみかさねまもるやまとしまねを」の和歌を朗詠し、磯貝保博副理事長による御製拝誦、山口秀範合宿運営委員長による祭文奏上が行はれた。その後「海ゆかば」を斉唱し、小田村四郎会長が拝礼。上村和男理事長の拝礼に合はせて参加者一同が拝礼した。

左は奏上された「祭文」と拝誦された「御製」である。

祭文

我ら日本人の「心のふるさと」と　古へより仰がれ来し　ここ伊勢皇大神宮のお膝元「神宮会館」に集へる　社団法人国民文化研究会　理事長上村和男を始めとする　我ら二百二十余名は　「第五十回全国学生青年合宿教室」にて研鑽を重ねはや三日目の夜を迎へぬ

今し天つ日は隠ろひ　涼風(すずかぜ)のさやけき今宵　この会館の講義室を齋庭と定めまつりて　とこしへにみ国守りましたる　遠つみ祖たちや　み国のために尊きみ生命を捧げ給ひし　あまたのはらからのみたまを招(を)ぎまつりて　海の幸山の幸種々のためつものを供へ　み祭仕へまつらむとす

顧みれば今より五十年の昔　故小田村寅二郎大人命を始めとする同信の師らみ友らは　戦後の混乱と占領政策の爪痕深刻なりし時代の中で　祖国日本のまことの独立を果たすためには　次代を担ふ学生青年の育成こそ急務と　「合宿教室」開催に立ち上り給ひし　その日よりはや半世紀は過ぎ　この夏第五十回目の記念の集ひも酣とはなりぬ

先の戦に御国敗れしより六十年を閲したる昨今も　我が国の政治　外交　教育　マスコミ各界の　基軸を失ひし混迷は依然として目を覆ふばかりなれど　心ある国民の中より国の生命を甦らせむとする数々の新しき動きの見え初むるは　頼もしき曙光なり

一昨日より開きたるこの集ひにて　長谷川三千子　松浦光修両先生を始めとする御講義に耳を傾け　天皇（すめらみこと）の大みうた記紀万葉の輪読や　はたまた短歌の創作・批評にと　心を傾け力を協せて学び合ひつつ　み祖たちの言霊こもるみ言葉を味はひ　老いも若きももろともに　わが国の良き伝統を身につけ　ともに御国の運命を担ふべき友どちとなり　み祖たちに連なりて　祖国日本をとことはに栄ゆかしめむと誓ひまつらむ

またみ祖たちより承け継ぎ来たりし　「しきしまの道」を今の世にいやさらに伝へ広めむと念じ　我らが会の設立五十周年を祝ひて編める　新しき書「名歌でたどる日本の心」をみ前に捧げて　二年を費せしこの書の上梓を告げまつらむとす

畏（かしこ）かれども　いましみ祖たちのみ霊よ　願はくは麗しきこの大和島根の内外（うちと）に満つる　まがごとどもを打ちそけつつ言霊の幸はひ　皇神の厳しき御国を守らむと努むる　我らが上をみそなはし導きたまへと　参加者一同に代はり　山口秀範

謹み敬ひ　恐（かしこ）み恐みも白す

御製拝誦

明治天皇御製

をりにふれたる　明治三八年

ひさかたのあめにのぼれるここちして五十鈴の宮にまゐるけふかな

をりにふれたる　明治三八年

何ごともなすべき時になさざればおくれをとらむこともこそあれ

教育　明治三九年

いかならむ時にあふとも人はみな誠の道をふめとをしへよ

日　明治四二年

さしのぼる朝日のごとくさはやかにもたまほしきはこころなりけり

をりにふれたる　明治四三年

思ふこといふべき時にいひてこそ人のこころもつらぬきにけれ

昭和天皇御製

朝海　昭和八年

天地の神にぞいのる朝なぎの海のごとくに波たたぬ世を

伊勢神宮に参拝して　昭和二九年

伊勢の宮に詣づる人の日にましてあとをたたぬがうれしかりけり

伊勢神宮参拝　昭和四六年

外国(とつくに)の旅やすらけくあらしめとけふは来ていのる五十鈴の宮に

十一月八日内宮にまゐりて　昭和四九年

冬ながら朝暖かししづかなる五十鈴の宮にまうで来つれば

歌会始御題「祭り」　昭和五十年

わが庭の宮居に祭る神々に世の平らぎをいのる朝々

今上天皇御製

歌会始御題「水」　昭和六一年

外国(とつくに)の旅より帰り日の本の豊けき水の幸を思ひぬ

戦後五十年遺族の上を思ひてよめる　平成八年

國がためあまた逝(ゆ)きしを悼(いた)みつつ平らけき世を願ひあゆまむ

歌会始御題「草」　平成十三年

父母の愛でましし花思ひつつ我妹と那須の草原(くさはら)を行く

入院の日々に　平成十六年

入院の我を気遣ひ訪(と)ひくれし思ひうれしく記帳簿を見る

歌会始御題「歩み」　平成十七年

戦(いくさ)なき世を歩みきて思ひ出(い)づかの難(かた)き日を生きし人々

夜の集ひ

いよいよ三日目の「最後の夜」を迎へた。参加者は全員一堂に会して、しばしの談笑の時間をもった。班ごとに大学ごとに様々な出し物が続いた。フィナーレは「進めこの道」の大合唱となった。

第四日目　（八月二十九日・月曜日）

講議　「我等が道統と学問」

福岡県立太宰府高等学校教諭　占部賢志先生

先生は、ある高校生との面接試問を紹介しながら、現代の我々の心に棲み着いてゐる「自分を時代から切り離して客観視する思考方法」の問題性をまづ指摘された。「さうした生き方の誤りを自覚して、わが心との闘ひを続けてきたのが国民文化研究会の源流である」として、現在の祖国軽視につながると言ってもいい大正期の歪んだ学風と、それと果敢に闘った一高教授沼波瓊音（けいおん）先生の学問と生涯、沼波先生による一高瑞穂会創設の歴史を具体的に語られた。

伝統断絶から来る思想の混迷と道徳の頽廃が顕著になった大正期、その象徴の如くに発生した「虎の門事件」に際会した沼波先生は「あのピストルは摂政宮を害せむものにあらずして小生の怠慢を責めたる一発と」感じ取り、精神の頽廃をただし日本の心とは何かを究明するための「日本精神」といふ講座を東京帝大に創設したことを紹介された。さらにその研究と学生の育成に身命をかけて取り組まれ、「一高瑞穂会」を結成して、「皇国千古一貫の生命たる日本精神の把持」に努められたことを語られた。その瑞穂会において、後に「一高昭信会」を結成することになる黒上正一郎先生との運命の邂逅

が生れ、現在の国民文化研究会へと続いてゐることを述べられた。

最後に「生を終るまで会員相互に刎頸の交りを遂げ各最善を尽くしてこの重任を果さんことを誓ふ」と黒上先生が記した沼波先生追悼文を紹介され、本会道統の源流を回顧され、これを機に小田村寅二郎先生の御著『昭和史に刻む我等が道統』を是非とも一読戴きたいと呼びかけ締め括られた。

参加者による全体感想自由発表

まづ初めに山口秀範合宿運営委員長から「この合宿で感じた皆さんそれぞれの『生の本当の人生の体験』を率直に発表してほしい」との話があった。

このあと学生・社会人参加者が次々に挙手して壇上に上り、胸の内に渦巻く思ひを発表した。

「ここで出会った友は単なる友人ではなく、伝統文化や我が国を思ふ中での友だと思ふ」「合宿での友は全国各地に別れても心が繋がってゐるやうに思ふ」「日本の皇室のすばらしさがわかった」「御製を学び、日本には国の始りから和歌によって繋がってゐる心があるやうに思った」「和歌を通じて日本の言の葉の美しさを学んだ」「短歌は時を超えて心と心を繋ぎ、生きる力を与へるものであると思った」「短歌相互批評で友が自分の思ひを受け止めてくれて、嬉しく楽しく温かさを感じた」「国のことを自分のことと捉へ、自分が国のためにどうあるべきかを考へて周りに伝へていきたい」「日本に生れた喜び、国を思ふ心を子供達に伝へていける教師になりたい」「大学に帰っても友人達と語り合ふ時間を持ちたい」等々の発表が続いた。

閉会式

主催者を代表して上村和男理事長は「五十周年といふ機会に皆さんとお会ひできて第一回合宿教室の参加者として感慨深いも

のを覚える」と述べ、「若い世代が育たなければ国は衰へていく。若い人はもっと前向きに学び国のために働く意欲を燃え立たせて欲しい。言ふべきは言ふ、若者らしく素直にまっとうに進んでいかうではないか」と呼びかけた。

続いて参加学生を代表して九州工業大学三年の林祥人君が「この合宿では多くの先生方、先輩、友人との出会ひがあり、今回もたくさんのことを学んだ。合宿の終りはこれからの生活の始りである。日常の生活に戻ってからも勉強を続けることで合宿で学んだことを生かしていきたい」と今後の勉学の抱負を語り、北海道大学三年の安田陽子さんが閉会宣言を行って第五十回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

助言者の紹介

㈳国民文化研究会　会長	小田村四郎
㈳国民文化研究会　副会長	長内　俊平
㈳国民文化研究会　副会長	寶邉　正久
㈳国民文化研究会　理事長	上村　和男
日鐵プラント設計㈱	今林　賢郁
音羽建物㈱顧問	磯貝　保博
拓殖大学日本文化研究所客員教授	山内　健生
㈱寺子屋モデル	山口　秀範
㈱柴田	柴田　悌輔
元日産自動車㈱	古川　　修
㈳国民文化研究会　事務局長	稲津利比古
小田原市青少年相談センター	岩越　豊雄
東急建設㈱取締役技術本部長	奥冨　修一
元新潟工科大学　教授	大岡　　弘
福岡県立直方高等学校	小野　吉宣
中島法律事務所	中島　繁樹
㈱石村萬盛堂　代表取締役社長	石村　僖悟
伊佐ホームズ㈱	伊佐　　裕
福岡県立太宰府高等学校	占部　賢志
住電エレクトロニクス㈱	布瀬　雅義
㈱みずほコーポレート銀行	小柳志乃夫
日章工業㈱	藤新　成信
新明電材㈱	飯島　隆史
千代田漢方クリニック顧問	桑木　崇秀
元高校教師	末次　祐司
マスターマネジメントコンサルタント	尾関千枝子
元㈱日立製作所	桑木　悦子
	稲田　健二
	日髙　廣人
NPO法人　兵庫県断酒会	島村　善子
	薬丸　保樹
	諏訪田陽山
元キューピー㈱	高村　光紀
品質環境ISO審査員	山本　伸治
㈶全日本交通安全協会	山本　博資
㈲バントレーディング	亀井　孝之
日揮㈱産業プロジェクト本部建設部	森重　忠正
富山県立富山工業高等学校	江口　研治
㈳福岡県中小企業経営者協会	岸本　　弘
公務員	小早川明徳
産経新聞社	小川　揚司
防衛大学校	大内　保治
鹿児島県農業協同組合中央会	太田　文雄
JTBトラベランド三重営業所　所長	定栄　安治
湯亭こんや	松藤　　力
	青砥　誠一

防衛庁
山口県立下松高等学校
大牟田市立勝立中学校
北九州市立医療センター
東京防衛施設局
若築建設㈱
大阪府立南寝屋川高等学校
公務員
㈱フラワーコーポレーション
㈱アルバック
神奈川県立氷取沢高等学校
㈱日本教文社
熊本県立菊池高等学校
平山直樹税理士事務所
ハローワーク福岡南
㈱寺子屋モデル
㈳国民文化研究会　事務局
東洋紡績㈱
日本青年協議会
日本青年協議会
㈱寺子屋モデル
祐誠高等学校
㈱ラック
横浜市なしの木学園

鎹　信弘
宝辺矢太郎
西原　正博
森田　仁士
山根　清
池松　伸典
絹田　洋一
神谷　正一
吉村　浩之
北浜　道
大日方　学
坂本　芳明
久保田　真
北村　公一
古川　広治
三林　浩行
茅野　輝章
庭本秀一郎
外村　聖典
別府　正智
横畑　雄基
小林　国平
髙橋俊太郎
徳田　浩介

飯塚市立鎮西中学校
松尾神社
テレビ西日本
㈱寺子屋モデル

合宿運営本部　山口　秀範・占部　賢志・藤新　成信

指揮班　庭本秀一郎・久保田　真・小林　国平
髙橋俊太郎・徳田　浩介・大津　健志

事務局　稲津利比古・高村　光紀・山本　信治
主婦　庭本和香子
高校一年生　山根　誠一
中学二年生　浅野　祐弥
中学二年生　福野　貴仁
中学一年生　富山　智史

放送・記録班　森田　仁士・亀井　孝之

写真班　國武利貴弥

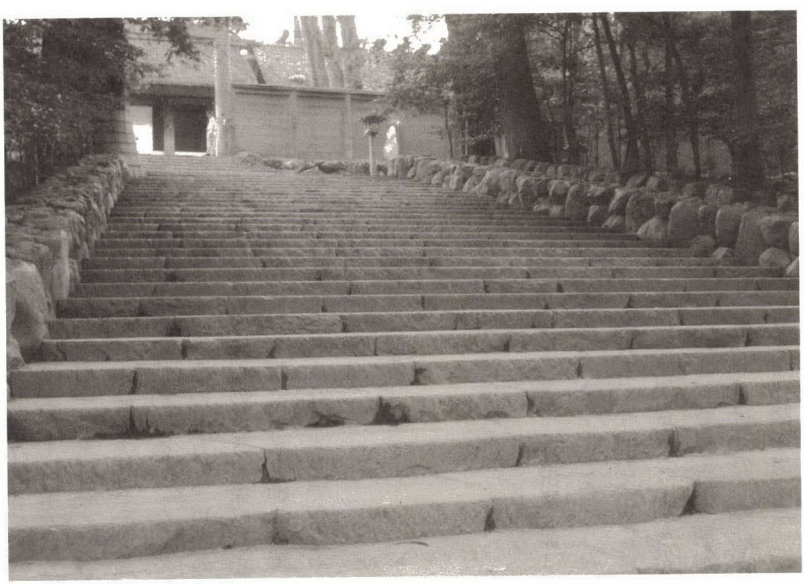
見学者
大阪国際大学　教授　黒柳　稔
黒柳　秀子
奥村　文男
漆原　弘子
青森市こども会連合　福原　仁一
多摩美術大学　三年　小林　紘子

大津　健志
大和　哲司
穴井　宏明
青木　啓昌
黒岩　礼子

走り書きの〝感想文集〟

これは閉会間ぎはの一時間余で参加者全員に、三泊四日間の感想を走り書きで書いてもらったものです。「仮名遣ひ」は原文のままで掲載してあります。

なほ、各人の感想文の末尾に小さい活字で載せられてゐる和歌は、この感想文とともに提出された第二回目のものです。



第一班―男子学生―

楽しく貴重な体験や交友ができた

（明星大学　言語文化　四年　高橋佑太）

今回の夏合宿は二度目の参加となります。合宿に参加すると日頃ボンヤリと暮らしていると気付かないことや見落としてしまうことを、もう一度自分の中で見つめ直せるような気がして、落ちついた気持ちになります。今年も短歌の創作に触れ、自分がどう感じているのかどう思っているのか、改めてよく見つめてみるということをやってみようと思いました。日頃、世の中の事、自分の国の事などを余り考えない僕にとって、先生方のお話はもちろん、班の皆の話はとても勉強になります。今年も楽しく貴重な体験や交友ができたと思っています。この合宿で学んだことを継続して自分の中に留めながら自分の力にしたいと思います。

短歌相互批評

歌に詠む友の心をつかまむと思ひ傾け言葉を探す

日本語の美しさや奥深さに感銘を受けた

（英国国立アストン大学　二年　山田裕介）

僕は以前から読んでいた布瀬雅義先生の〝国際派日本人養成講座〟というメールマガジンを通してこの合宿を知り、今回初めて参加しましたが、二ヶ月という限られた日本での夏休みの中で、この合宿での四日間は、一番充実した有意義な時間となりました。その凝縮された日々の中でも、特に長谷川三千子先生の講義や短歌から感じた日本語の美しさや奥深さは普段英語で生活している僕にとって格別であり、なんて繊細な言語なんだと感銘を受けました。その一方で、短歌の創作・相互批評などを通して自分の国語力の低さを痛感しました。そこで今後はイギリスでもできる限り読書に励み、再びこの合宿に参加する際には、もっと豊かな日本語で短歌や自分の意見を表現したいと考えています。

帰国して初めて気付く日本語のその美しさ奥深さとを

自分の心の動きについて考えさせられた

（東京理科大学　基礎工　二年　前田隆太郎）

非常に充実した四日間であったと思う。まずはどのような所であるかを体験してみる、そんな気持ちで今回の合宿には参加した。来て見ると伊勢という土地に圧倒された。また先生方のご講義で、多く考えさせていただき、さらには短歌創作や相互批評により他の人々の考えを知り、自分の心の動きについても考えさせられた初めての貴重な体験が出来た。

最終日に壇上で決意を表した友人ほどの確信は得られてはいない。だが充実した非日常の体験はすべて役立っていくも

のであると思う。

我が道は未だ定まりなけれども友の声聞き心沸き立つ

大きな示唆を得た合宿教室だった

（東北大学　教　博士三年　大岡一亘）

松浦光修先生は、随筆の中で、「重波（しきなみ）」という言葉に権力や異文化の到来を重ねている。この合宿で私たちが参拝し見学した伊勢神宮は、天照大神の御希望に敢えてこたえた先人たちの純粋な心のたまものであると思う。太田文雄先生の「己を治める」という御言葉を広い意味で受け取るならば、私たちは厳しい状況下で、それでもなお、式年遷宮に象徴される真心を保持しなくてはならない。布瀬雅義先生は合宿初日に「人間同士のつき合い」が日中両国間においておかしくなっているとおっしゃっていた。そのことについて私たちがどう考えるべきかということについて、非常に大きな示唆を得た合宿教室であったと思う。

慰霊祭の折に

思ひ出す限りの御霊の降り来れば首を伝ひて汗の落ちけり

友の顔は本当に充実した顔だった

（九州工業大学　情報工　二年　瀬木裕太郎）

今回の合宿では、和歌というものを通じて人の思いに自ら

カメラ・レポート1

開会式。これから三泊四日の研修が始まる。

の心を寄せるということの難しさ、相手の気持ちが少しでも理解できた時の喜びというものを改めて気づかされました。

短歌相互批評の中で班員が詠んだ歌に心を寄せ相手の気持ちを正確にくみ取るということはとても大変であり、疲れましたが、批評が終わり本当に自分の心を和歌に表現できた時の友の顔は充実した顔であり、私はその友の顔を見たときにたまらないうれしさを感じました。相手にふみこみ、自分をさらけだして、お互いの心を知りあう時、そこに友情というものが生まれるのではないかと思います。また自分の身近な人たちにもこの事は是非伝えていきたいと思います。

短歌相互批評のをりに

批評終へ友の喜ぶ顔見ればうれしき思ひわき出でにけり

先輩方の御努力

（㈱寺子屋モデル　三林浩行）

今思ひ出されるのは、山口秀範運営委員長の慰霊祭における御祭文奏上のお姿である。本部にて丹念に墨書されてゐたお姿を脳裏に浮かべながら、一つ一つの言葉の力を感じてゐた。

偉業といふ言葉があるが、今五十回目の合宿教室を終へるにあたり、五十回も続けてこられた多くの先輩方の御努力は、実にすごい事だと感じてゐる。正に偉業ではなからうか。そんなことを今思ってゐる。

第五十回全国学生青年合宿教室

五十年の長きにわたり営々と続けこられしあまたの先輩（とも）よ

第二班―男子学生―

合宿以降も学問を続けて行こう

（東京大学　法　四年　武田有朋）

第五十回という節目の上、自分にとって学生生活最後の合宿ということで、今回の合宿は格別に思い入れの強いものとなった。今年も多くの新しい友と出会い語りあうことができたのは最高の思い出である。例年に比べて一日短い日程だったにも拘わらず、良き友となれた。

合宿では内宮、外宮の参拝、御神楽の奉納等、理屈抜きの体で感じる経験をできたことがすばらしかった。頭と心を目一杯使うことで、自分自身もさらに磨かれたし、こういった勉強に対してイデオロギー的アレルギーを持った人も、目の洗われるような心地がしたのではないか。松浦光修先生の仰った「心で感じる」学問の大切さを改めて感じとるとともに合宿以降も学問を続けていこうと決意を新たにした合宿であった。

四度なる夏の合宿（いとなみ）振りかへれば多くの友を得て来たるかな

み友らと又の年にも合宿にて必ず会はむと心に決めけり

第五十回夏合宿に参加して

（防衛大学校　理工　四年　森　浩典）

伊勢には何度か行っていましたが、何となく連れられて行っていただけでした。今回の合宿で日本人の原点ともいうべき場所であるということを実感できたのは幸せでした。毎回、合宿では先人の歌であったり、班別の研修であったり、色々な人の「心」とふれあう機会が与えられていることに感謝しています。今回も全日程居ることができませんでしたが、参加させていただき誠にありがとうございました。

国思ふ先輩の声聞きながらいよいよ思ひ堅くなりにし

「目では見えないものを感じる力」と「思い」

（福岡大学　法　四年　長友泰道）

私はこの合宿で「目では見えないものを感じる力」と「思い」について深く考えさせられた。多くの先生方が発表して下さった内容もさることながら、先生方が強い「思い」で「目には見えないものを感じる力」を私に説いて下さり、私自身もそういった力と強い思いを身につけたいと心から思った。

この合宿に誘って下さった先輩や友達の思い、指揮班の方々を始めこの合宿を支えて下さった方々の思い、今私が幸せに生きている日本を築いて下さった歴代の先輩方の思いな

カメラ・レポート2

主催者を代表して㈳国民文化研究会会長　小田村四郎先生が「今年は戦後六十年であり日露戦争勝利百年である。この合宿では六十年前、百年前の先人の心組みを真剣に顧みて貰ひたい。」と挨拶された。

ど、この合宿で数えきれない思いに触れることができた。
この合宿を機会に強い思いとそれを感じる力を磨いておきたいと思った。この合宿に参加して本当によかったと思います。ありがとうございました。

集ひたる思ひの威力を垣間見て我も持ちたしまた伝へたし

自分のものとして考えることが重要

（京都大学　総合人間　四年　中原有輝）

今回の合宿で感じたことは、ものごとと向き合う時には、それを自分のものとして考えるのが重要だ、ということである。政治に関する時事問題にしても、単に知識を吸収するだけではなく、自分ならどうするのがよいと思うか、真剣に考えなければ意味がない。日常の勉強では、知識の習得だけで終わってしまいがちであるが、この合宿はそこから一歩踏み込んで、自分のこととして考えるよい機会であった。

班別研修や懇談の時間には、勉強だけではなく、さまざまな話題について、友人らと語り合うことができた。出身や専攻も違う学生が集まっており、実に変化に富んでいた。日程が進むに連れ、だんだんと打ち解け合っていくと、難しそうなテーマについても本音で語れるものである。

夜の集ひにて

研修の疲れはあまた溜まれども笑ひを取らんと舞台に上がる

真剣な語らい

（北海道大学　文　二年　小林雅典）

私は、今回初めてこの合宿に参加させていただきました。諸事情により全日程を体験することはできませんでしたが、それでも私なりに、大きなことを学ぶことができました。様々な地域から参加した人々の様々な思想に触れ、また自分の考えを述べ討論し合い、非常に充実した日々でした。私の人生でこんなにも真剣に他人の話に耳を傾けたことはありませんでしたし、また同じように、自分の真剣な気持ちも他人にぶつけたことはありませんでした。この合宿は私の淡々とした大学生活におおきな刺激を与えてくれました。最後にこの合宿に参加する機会を私にくださったすべての人々にお礼を申し上げます。ありがとうございました。

合宿にて新たな友と巡り会ひ語らふ夜ぞ疾く過ぎにける

多くの衝撃と熱い感動を覚えた

（東京芸術大学　音楽　一年　武澤陽介）

以前より興味を持っていた研究会の合宿教室に、この度初めて参加して、私は多くの衝撃と熱い感動を覚えた。

普段の生活では触れることの出来ない一流の先生方の思想と情熱の籠もった御講義は驚きの連続であったし、同じ価値観を持つ同世代の人々との新しい出会いと友情は、常に私の

心を熱くさせた。

四日間の合宿で最も感動したのは、歴代天皇がお示しになられた御製との出会いだった。そこに刻まれているのは、ひたすらに民を思い、一方尊い伝統に畏敬の念を持ちながら祈り続けた、飾らぬ誠実な人間の姿だった。常に虚勢を張り、他人の目を気にし、その場の体裁を取り繕うことばかりに気を取られている自分が恥ずかしくなった。

歴代の飾らぬ御製に触れるたび虚勢を張りし我が心恥づかし

合宿に誘ってくれた先輩方に感謝

（九州工業大学　情報工　一年　片峯龍一）

今回初めて合宿に参加して、先輩達が何故この合宿を勧めたかがわかりました。初めて合宿の話を聞いた時は参加しないでおこうと思いましたが今はとても参加してよかったと思っています。また班の人達はとてもいい人ばかりで、すぐに友達になれました。二人が途中で帰ってしまい二人抜けるだけで、とても寂しくなりました。それほど皆と仲良くやっていたのだなと感じました。この合宿は今までの夏休みの行事の中でもかなり上位の思い出になると思ひます。

このような合宿に誘ってくれた先輩方に感謝しています。来年は友達を連れて来たいと思っていますのでよろしくお願いします。

新しい人と出会ひて友になる出会ひをくれた神に感謝を

カメラ・レポート3

明治大学四年　小柳雄平君が「今年も一生付き合へる新たな友をつくりたい。」と参加学生を代表して合宿に取り組む決意を述べた。

第三班―男子学生―

得られたものは本当に多かった

（鹿児島大学　水産　三年　前田隼平）

私は今回が初めての合宿でした。四日間を通して何よりも心に残ったのは伊勢神宮の風景でした。とても落ちついたふんいきを保ちながらも、歩いていると神秘的なものを感じずにはいられない心持ちになっていました。また今回得た友との意見の交換はずっと自分の勉強不足を実感させられてばかりでしたが、得られたものは本当に多かったと思います。

先生たちの御講義は一言一言が重く、家に帰ってからも何度も思い返し、そして自分の頭で考えてみたいと思います。今回の合宿での喜びや驚きは日本人であるがために味わえたものであったと思っています。この感動を忘れずにこれから学ぶ事を継続していきたいです。

伊勢の地で合宿終へし友たちの希望に満ちたる晴れやかな顔

次第に見方が深くなった

（広島大学　教　二年　井上智博）

私はこの合宿に参加するまで、物事の本質の見方は非常に浅かった。しかし、様々な先生の話を聞き、班の友人と議論を重ねるに従い、次第に見方が深くなっていったように感じる。神宮の神秘的な雰囲気に触れ、短歌を詠み、神楽を拝見し、忘れかけていた日本文化の素晴らしさにはっと気付かされた気がする。それだけでなく、単なる一言二言では言い表すことのできない、目には見えない日本の誇りというか魂というか、上手く表現できないが、そのようなものがごくわずかだが、備わった気がする。あたためていきたいと思う。

五十回という記念すべき合宿にて様々な人と出会い、多くのことを学べたことを非常に嬉しく思う。

友どちと話す楽しさ変はらねど近づきにける惜別の時

深夜に短歌の相互批評が終はり、月を見し折

夜半の月眺めてまたも病床の友を憂ひて心苦しき

人としてのありかたを叱られた思ひ

（獨協大学　外国語　四年　藤崎洋平）

自分は去年に続き二度目の合宿参加でありますが、今回も多くのことを考へ、学ぶ事ができたと思ってゐます。今回の合宿で得た最大のものは自分の行動や感動が全て「何となく」である事に気付かされた点であります。

心の働きが緩慢では学問などザルで水を汲むやうなものでありますし、過去を忘れさるといふのは歴史の断絶すなはち松浦光修先生のおっしゃられた「玉の緒」が自分といふミクロな歴史の中でさへ断ち切られてしまってゐるわけなのであ

ります。斯様な根なし草が日本人とは、など今考へれば顔から火の出る思ひであります。まったく恥づかしくてたまりません。今回の合宿で人としてのありかたを叱られたと思ひ、常に自省の気持ちを忘れずにこれからの学問にとり組まうと考へてゐます。貴重な経験を有難うございました。

岸本弘先生の発表をお聴きして

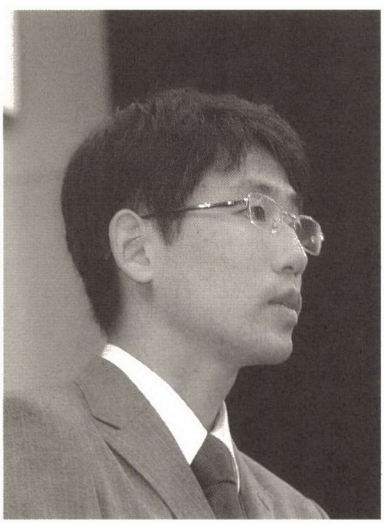
これこそが我が古事記なりと言へる師のその情熱を我ももちたし

皇室の重要性を強く納得できた

（東京大学　理二　一年　藤巻勇輝）

私がこの合宿で一番嬉しかったのは、皇室の重要性という今までになんとなくでしか思ってこなかったことを強く納得できたということです。皇室は現在と過去をつなぐ玉の緒であるというお話は、本当に感動いたしました。もちろんこの合宿では他にも実に様々なことを学びました。講義を聴き終えた後で他の人と意見交換することの重要性、和歌というものの奥深さ、日本語自体の美しさ、そしてこの日本という国に生まれたことに対する喜び、またこれらのことを伊勢という日本人の心の里で学べた事で、何事にもかえがたいすばらしい経験ができたと思います。今回の合宿は私にとって単なる始まりでしかないと思います。私は今までろくに日本のことを考えてきませんでした。しかし、今回の合宿をいい機会として、少しずつですがもっと自分の住むこの日本という国

カメラ・レポート4



オリエンテーション。合宿運営委員長　山口秀範先生（右）から合宿趣旨説明。
指揮班班長　庭本秀一郎氏（左）から諸注意がなされた。

のことを深く考えてみようと思います。今回の合宿でお世話になった皆様方、本当にありがとうございました。

神楽にて雅楽を聞きしその刹那異なる世界の開かるる心地す

国文研の道統を学んだ

（佐賀大学　経　四年　川畑孝志）

今合宿では、記念すべき第五十回の合宿ということで、国文研の道統に連なる生き方を求めて生きたいという思いで参加した。そして二つの点で深まった。一つは瑞穂会趣意書に書かれていた学生がなすべきは、日本精神の正しき把持という点である。二つ目は「同信協力」という言葉である。国文研の先生方は事あるごとに「生涯の友をつくりなさい」と仰っていた。それは国文研の道統であると黒上正一郎先生の「『同信協力』こそ、国民生活に生命をあたへ、我らのわざを全うせしむる力である」という言葉を読んで思った。合宿を通す中で班員の中に生まれた友情、それは伊勢神宮の下で、ともに祖国を想い、国難に真向かい、皇室を敬い、神に祈り、祖国のために殉じられた方々を祭る中で結ばれた友情であると思う。この友情の和を広めていくことこそ、国文研のマンツーマン運動であると思われ、それは、合宿を通す中で私も実感させて頂いた。合宿で出会った友と是非とも今後も共に学び活動していきたい。

祖国想ひ友と語らひゆくにつれ友との距離も近くなりぬる

これからも共に日本の精神を深め把持する道歩みたし

合宿が私の中で大きな糧となる

（防衛大学校　理工　四年　船山尚志）

昨年合宿において、一日目にしてうけた衝撃―これほど腹を割って話し合へるのかといふ―は今でも忘れがたいものです。そして今年も是非、と参加させて頂きました。初対面の人がほとんどの班員であるものの、二回目といふことですぐに打ち解けられました。また、去年の班員と再会できたことは嬉しいものでした。講義を聞き、話し合ひ、寝食を共にし、と非常に有意義な時間を過ごしました。大学の大先輩である太田文雄さんの講義は、輪読会で聞く話とは別の、ご自身のことを聞くことができ、新たに感銘を受けました。早朝参拝では、その太田さんのご好意で一人御垣内に参拝したことは、深く心に残るものでした。加へて前日指名され困惑したことですが、制服（それも普段は着ない儀礼用）で皆さんの前に立ちラジオ体操をしたこともある意味非常に思ひ出深いことです。途中で抜けねばならなかったことは誠に残念ではありましたが、合宿が私の中で大きな糧となるであろうと思います。

合宿をやむをえずして離れるも忘れがたきは友の顔なり

目に見えないものを信ずる世界がある

（九州工業大学　情報工　修士二年　結川高志）

最初自分は伊勢神宮を参拝しても何も感じず、「こんな米蔵みたいな建物のどこがいいのだろう?」と思っていました。しかし、松浦光修先生のご講義のレジュメの「心で見なくちゃ、大切なことは見えないってことさ。かんじんなことは目に見えないんだよ」という言葉にハッとさせられ、目に見える物しか探していなかった自分に気が付きました。大切なことを考えようとする時に、私は知らず知らずのうちに頭で考えようとしていたのだと気付きました。それが分かった時、なぜか涙があふれてきました。目には見えない神様を信じる世界があるのだということが、実感出来たのだと思います。ギリシャでは壺の中でしか残っていないお祭りが、日本では今も町をあげて祝われている。このことにも、何というか温かさを感じました。

短歌を作り、この感動を班員の皆に伝えようとしたのですが、言葉が見つからず、なかなか伝わらないもどかしさも覚えました。人に感動を伝えたいと思いました。

このやうな体験は二度とできぬものと導いてくれし全てに感謝す

カメラ・レポート5

合宿導入講義。住電エレクトロニクス社長　布瀬雅義先生は「自分の言葉で語る」とは自分の気持ちを正確に表す言葉を見つけることであり、班別研修においても友の言葉からその思ひを正確に掴む努力をかさねて貰ひたいと説かれた。

要は平生の志の置き方

（㈱みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫）

第三班の班付として若い学生諸君と話ができてうれしく思ひました。最後の夜の集ひの出し物も成功でした。このつきあひを継続していきたく思ひます。

岸本弘さんのご発表―特に、その細やかなお心配りと音吐朗々たる古事記・万葉の朗読、また、長内俊平先生の「文化とはかほりである」とのお言葉、さらに山口秀範運営委員長の「目に見えないものを信ずる力」―これは奇しくも松浦光修先生のお話につながりましたが―が、心に残ってをります。要は平生の志の置き方、そこからもう一度スタートせねばと思はしめられました。

岸本先輩のご発表をお聴きして

会場をふるはすばかり先輩の清き高き強き言葉響きぬ

三日目朝、防大船山君を送り内宮参拝の折

今し上る朝つ日を受け緑なす神路山映ゆか青の空に

五十鈴川の清き流れのせせらぎを聞きつつあれば小鳥鳴くなり

すがすがしき思ひに若き班友と五十鈴の宮をまうでゆくかも

第四班―男子学生―

切実な体験をしたい

（亜細亜大学　国際関係　四年　本間隆宏）

伊勢神宮の内宮を参拝した折、長内俊平先生の後ろを僕は歩いていた。先生は立ち止まられ大きな杉を見上げたり、撫でたり、ゆっくりとした足取りで正宮へ進んでゆかれた。僕は先生のあのゆるやかに弧を描いたお背中が好きだ。見ていると深いやさしさ、先生の歩んで来られた人生の深さの一端を見る心地がする。参拝が終った帰り道、長内先生と宝辺正久先生が並んで歩いていらっしゃる後ろを歩いていた。お二方にはほとんど会話がなかったが、お二人の深い友情は、その二つの背に現れていた。何と美しい御姿であったろう。何といい友情だろう。短歌全体批評が始まると、長内先生は壇上から独特のお声で一番後ろの座席にいらした宝辺先生に向かって「宝辺君聴こえるかい」と仰ると「聴こえるよ」と返される。何気ないことの様だが、お二人の素晴らしい友情に涙が出た。先生のお言葉には強い力がこもっている。何故か、それは、やはり切実な体験からつかみとられたことしか話されないからであろう。僕にはその切実な体験がないのだ。真剣に生きていないのだ。よく生きること、それがこの合宿で得た僕の課題である。

長内先生と宝辺先生が参道を歩かるる後姿を拝見して
参道を並び歩かるるお二人の背中にも見ゆ厚き友情は

先人の生き方をもっと学びたい

（福岡大学　経　四年　井手良平）

一番「楽しかった」ことは、全国各地の仲間と語り合え、自分の意見をぶつけられたことです。また、「為になった」ことは、布瀬雅義先生が御講義で言われた「心で感じ、頭で考え、自分の言葉で語る」ということでした。自分にとって一番必要なことで、それに気付かせてもらいました。「学ぶきっかけになった」ことは、日本の歴史や天皇、軍人の方々の日本の国に対する思いを知ることができ、自分がどれだけ我が国に対して無知であったかということを知りました。国を支えてこられた先人の生き方をもっと学びたいと思います。また、短歌についても、これほど自分が自分の心の中を分かっていなかったのか、何も感じようとしていなかったのかなど、いろいろなことを思い知らされ、自分の気持ちを探る上でも大変楽しいものと分かりました。

最後に「一つ変われる気がした」ことですが、この合宿教室は自分にとってきっかけであり、福岡に戻って変われなかったら意味がないと思っています。興味の持てたことはさらに勉強し、素晴らしいと思った考え方などは自分の中に取り入れていきたい。学生最後の夏休みにこのような素晴らし

カメラ・レポート6

一日目夜。神話について「世の中には触れることも見ることもできないものが厳然としてあり、それは心で見るしかないのです。」と指摘される皇學館大學助教授　松浦光修先生。

い合宿教室に参加させていただき、ありがとうございました。

目を閉じて素直な心に語りかけ正しき道へと我導かん

実感のこもるお言葉に触れた

（福岡教育大学　教　四年　馬場　健）

「朕ハ茲ニ國體ヲ護持シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ。」今までに何度もこの終戦の詔書を読んできたが、宝辺正久先生のお話を聴くなかで、宝辺先生が共に戦った同志のことを思われるときに、昭和天皇陛下のことを考えられていたことが非常に伝わってきた。正にあれは、宝辺先生にしか語ることができないお言葉である。「寺尾博之さんが陛下に抱きかかえられている」「既に國體は護持されている」ここまで実感のこもったお言葉を六十年前のできごとであっても語ることができることに驚いた。また、和歌を読む中で、言葉と心を一致させ表現することの難しさを知った。明治天皇の御製「まごころをうたひあげたる言の葉はひとたびきけば忘れざりけり」とは、本当に自分の実感のこもったことばで語り合うときには、その言葉は忘れられないものとなるのだと感じた。どういう言葉を自分は使っていくのか、長谷川三千子先生は思想は言葉にあると言われましたが、私自身の日々の言葉からまずこだわっていきたい。

國體は護持されたると言はれ給ふ先生の語調は強く響きぬ

人の心に染み入るまでの言の葉を我も友へと伝へてゆかむ

まごころを短歌に詠みゆきしきしまの道を歩みて己れを鍛へむ

血の通ったやりとりに喜びを感じた

（獨協大学　法　二年　鈴木正樹）

「好い合宿だった。」

感想文を書こうと頭の中でいろいろな言葉を弄したが、結局この一言に行き着くので先ずこれを文頭に置く。

僕は、元来あまり人付き合いが得意ではない。なので合宿教室のような集団生活は苦手だ。そんな僕でもこの合宿で得たことは大きい。諸先生方の熱のこもった御講義に心揺さ振られ、班員たちとの胸襟を開いた血の通ったやりとりに、少なからず喜びを感じた。うまく表現できないが、この合宿にはより本質的な何かがある。だからこそ、合宿教室を終えようとする今、どこか離れがたい気持ちになるのだろう。

国語力、文章力の不足のためだろう、これ以上何か書くと、逆に空想になってしまう。文頭に掲げた言葉こそ、僕の言いたい全てを表わしているのだ。

伊勢の地で初めて会ひたる友どちの血の通ひたる言葉わすれず

大事な考え方を与えられた

（一橋大学　社会　一年　坂田道志）

この合宿教室では、日頃の大学生活では経験できないことを短い期間に濃い密度で体験できたと思う。

何と言っても普段の生活で「日本とは？」「天皇陛下とは？」と考えたり、短歌創作や相互批評をすることはない。また、これだけ心に残っている講義を受けたこともない。大学では、社会科学を主に勉強しているが、現在の社会構造とその分析という科学的に客観的にものごとを捉える方法しか学ばない。それではどうも心に響くものがない。

この合宿の講義では、先生方の様々なお言葉が胸に残っている。長内俊平先生が強調なさった「まごころ」、占部賢志先生がおっしゃった「真念」、そして歴代天皇陛下の御製と防人の歌。どれをとっても私にとても大事な考え方を与えてくれた。

短歌の相互批評はとても骨が折れた。一言を用いるのにこんなに苦心したことはない。しかし、一緒に考え抜いてくれる班員の存在が試行錯誤を手助けしてくれた。あれでもない、これでもないと悩みながら心にピッタリとくる言葉が見つかったときの、心の晴れ晴れとした感じは今まで味わったことがなかった。

始めに述べたが、私はこの合宿で貴重な体験ができた。そして、心に大事なものが残った。それを日常に戻ってからも

朝の集ひ。朝6時から内宮に参拝し、広場で国旗を掲揚して、元気に体操を行ひ、一日の研修が始まる。また、短歌紹介では、学生が「短歌のすすめ」から一首を選び、皆で声を揃えて拝誦した。

大切にしていきたい。

短歌相互批評の折に

吾が為にともに苦心する友どちのその一言のありがたきかな

感動する経験を積み重ね、感受性を養ひたい

（都立武蔵野北高校　一年　山中利郎）

昨年靖国神社で行はれた第十六回国民文化講座に参加し、この合宿教室を知りました。第五十回は伊勢で行はれるといふことで、伊勢神宮に日本人ならば一度はいくべきであると父に勧められて参加することにしました。

伊勢に着き、まずは内宮を参拝しましたが、正宮では畏れ多いほど温かい懐かしさを覚えました。

合宿教室では、導入講義で布瀬雅義先生の語られた「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」といふことが、いかに難しいかを実感しました。ただ納得しただけで、どのやうに自分が感じたかも分からず、何を話してよいのか分からないこともしばしばで、班の方々と腹を割り、本気で話すことができませんでした。感動するやうな経験を積み重ねて、感受性を養ひたいと思ひました。講義のほとんどが、短歌の話だつたやうな気がするほど合宿中に多くの短歌を読み、国民を思ふ天皇の御製が簡潔で格調高くまとめられてゐることに感動を覚え、つい技巧的に作らうとする自分が情けなくなりました。

また、班の皆が自分の心の底を述べる言葉に心を動かされたり、共感することがあり、とても有意義な班別研修でした。作つた短歌を互ひに批評したときも、説明不足を補つてくれたり、思ひを汲みとらうとしてくれてとても嬉しかつたです。

高校生といふこともあり、至らぬことばかりでしたが、これからも日本について学びたいといふ思ひが深まりました。また皆さんと会へる日を楽しみにし、勉学に励みたいと思ひます。

我が詠めるつたなき歌を真剣に直しくださるる友の嬉しき

我が国をひもときみれば美しき歌の調べの多きことかな

すがすがしい気持ちで合宿に臨めた

（神奈川県立氷取沢高校　大日方　学）

記念すべき第五十回の合宿教室が、伊勢神宮のもとで開催されたことは、本当に有り難いことでした。毎朝内宮を参拝し、身も心も清められ、すがすがしい気持ちで日程に望むことができました。

四班での班別研修は、当初は言葉も少なく、あまり活発ではありませんでしたが、班長の本間君や井手君、鈴木君が忌憚のない意見を班員にぶつけ、徐々に皆の心が開かれていき、一人一人の思ひが開陳されるやうになりました。そして、短歌の相互批評では、皆が歌を詠んだ班員の思ひを汲み取り、

必死に短歌を良くしようと夜更けまで熱心に取り組みました。その皆のひたむきな姿に心打たれました。また、仕事の忙しい中、合宿に駆け付け、四班に入り、アドバイスしてくれた穴井宏明兄にもお礼を言ひたいと思ひます。

御講義では、占部賢志先生の「我らが道統と学問」に非常に感銘を受けました。大正時代が思想的に混迷を極めた大変な時代であったこと。そして沼波瓊音先生がそのただ中にあって、時代の弊害を客観視せず、正面から我が事として受け止められ、「皇国千古一貫の生命たる日本精神」を把持せむと「一高瑞穂会」を起こされたといふお話に心揺さぶられる思ひがいたしました。時間がなく、小田村寅二郎先生のお話を聴くことができなかったことが残念でした。

占部先生の御講義で沼波瓊音先生のお話をお聴きして

極貧の生活の中幾年も図書館に通ひ学ばれしとふ
妻にまた一男八女の子ら抱へ内職しつつも学ばれしとふ
失せし子を偲びて詠まるる先生のみ歌悲しく涙溢れく
悲しみの癒ゆる間もなく先生は「瑞穂会」を立ち上げ給ふも

カメラ・レポート8

二日目午前。埼玉大学教授　長谷川三千子先生は、「日本人の思想の源泉は、日常使ってゐる言葉そのものにある、そのことに気がつくとき、日本文化の底力に自信が湧いてくるのではないか」と御講義を結ばれた。

第五班―男子学生―

実に多くの言をノートに書いた合宿であった

（中村学園大学　人間発達　三年　松堂琢磨）

今回の合宿は、仲間にも師にも恵まれた故、懇親会の麦酒は格別の味がした。

ただ、小生、浅学不才の故、師の話を解すことが出来なかったこともあった。そのためか、実に多くの言をノートに書き記した。家に帰宅したならば、すぐにでも開くことにしたい。

今、隣の席に梅原君が座ってゐる。彼もまた、学びが多かったと昨日言ってゐた。一人一人の思ひが実となり、この先も伝はってゆくことを祈念して私の文を締めくくりたいと思ふ。

我ここに日本男児と生まれなば大和島根の未来明るし

四年越しに先生のお話を聞いて感じることができたこと

（早稲田大学　法　五年　濱﨑史嘉）

私は四年前初めて長谷川三千子先生のご講義をお聞きしたのですが、その時は「日本の思想」などというものにあまり興味がわきませんでした。しかし、四年間勉強をした後、今回のご講義を聞いて、少しは先生のご講義から「日本の思想」を感じることができたように思います。「てにをは」などの文法から日本思想の源を感じるまでには至っていませんが、日本の思想は私たちの回りに満ち溢れているものだと思いました。そして、物事にまじめに取り組み、日々の生活を律していくことこそ、日本思想を生きることであり、重要なことだと感じました。

心からまじめに取り組む姿勢こそ日々の生活に大事なことなり

本物の「思ひ」を強く持ち勉強・行動していきたい

（日本大学　経　四年　梅原　洸）

私は、今回初めての合宿であり、驚いたのは開会式での国歌斉唱でした。こんなにも大きな声で、そして逞しくそして、大勢の方が歌っているということは衝撃的でした。そして、国歌を二度歌うことにも驚かされました。「国歌は歌」であることを知り意味がわかりました。

今回、たくさんの知識を得ることができましたが、知識で終わるのではなく、本当の「思ひ」というものを強く持ち、日本のためだけでなく世界人類の為に尽くすのが、先祖の皆様が求めていることだと思い、勉強、行動していきたいと思います。

別れゆく伊勢で出会ひし御友らと優勝逃し再会誓ふ

友との「同信協力」のあり方を求めて

（長崎大学　工　三年　山本真矢）

今回は、「同信協力」という言葉が残りました。長内俊平先生の「若き友らに呼びかける言葉」を読んで、合宿に参加し、同志を得たいと思っておりました。先生のご講義での「〝生を終わるまで〟という同志関係を築くまでに至らなければ真実ではない」との言葉は衝撃的でした。

そのような同志関係を作るためには書が大切だと思われました。この合宿で終わるのではなく、常に相手のことを知り、自分のことを伝える「これからの関係」こそ考えなければならないと思いました。

をちこちに別れゆくとも同信の友らと共に励みゆきたし

心の汚れを取るための営み「和歌相互批評」

（早稲田大学　社会科学　修士一年　野村　亮）

私は最近、御製や秀歌も少しづつ親しみはじめておりますが、相互批評がなぜ短歌にとって必要なのか、厳しく必要であるのか、この気持ちに応える言葉が見つかりませんでした。然し、長内俊平先生が講義の中で「短歌は自分の心に鏡をうつしたもので、このうつしたものの汚れをとらないといけない」と言われました。この言葉は私の心を打ちました。人の私利私欲といった汚い所は目に付きますが、自分のことは気

講義の一コマ。先生の御講義を熱心に聞く学生達。

づきません。相手の友の気持ちに立つことと、私自身の見えないところを教えてくれる友の言葉を信じ行うことは、深く関係があると感じます。引き続きこの学問に励み、自己を鍛えていきたく思います。

前の班の出し物に会場が大笑している舞台裏で
全力を尽くすぞと誓ひ皆が手をかさねて「やるぞ」と気持ち一つに
成功を収め席に戻りし後
輪を囲みやり遂げしことを讃へ合ふ腹の底から楽しかりけり

古事記に籠もる民族の記憶を、先生の御姿に感じて

（拓殖大学　政経　二年　大河内恩人）

今回の合宿では、古事記、日本書紀の大切さを学ぶことが出来ればという気持ちで参加させてもらいました。一日目の松浦光修先生のご講義では「古事記は一言で言えば心だ。一枚の写真にはその人にとっての格別な思いが籠もっているように、神話には民族の記憶が籠められている。」との言葉が心に残りました。古事記を、古文研究などのような現実とかけ離れたものとして捕らえていましたが、先生の一言で考え方が変わり、親近感が沸いてきました。先生の心の内に息づいている書物としての古事記の価値を学んだ合宿でした。

我もゆかんあまたの人の歩まれし敷島の道を極むる道を

「向陵を清むるは即ち日本國を清むる所以」とのご決意に連なりて

（日本青年協議会　外村聖典）

大正時代に起った〝虎ノ門事件〟において沼波瓊音先生は「小生の怠慢を責めたる一発と感じ候」と受け止められ、日本精神の開明に人生を捧げられるご決意を打ち立てられた。この時代に起る思想の混迷は〝軍国主義〟という言葉が作り出されたことに象徴されるが、沼波先生は〝日本精神〟という言葉を持って立ち向かおうとされていたことに、そのお心が偲ばれてくる。

そして、そのような近代思想を押し返すだけの力を、一高瑞穂会の学問の力に求めようとされたことに我々の源流があるのだと感じた。瑞穂会の趣意書に「我等今深く反省して既往の怠慢を悔ゆ。抑向陵（一高）を清むるは即ち日本國を清むる所以なり、向陵を強大ならしむるは日本國を強大ならしむる所以なり」との言葉は、大学に日本精神を甦らせる並々ならぬご決意が伺われる。小田村寅二郎先生が東大の改革に生涯思いを馳せられたことは、沼波先生のご決意に連なっていることに深く同統の重みを感じた五十回目の記念すべき合宿であった。

沼波瓊音先生のご生涯を学びて
虎ノ門の責を己の怠慢と師は学問を省みらるる
日の本の混迷防ぐ一点を学風改革に定めたまひぬ

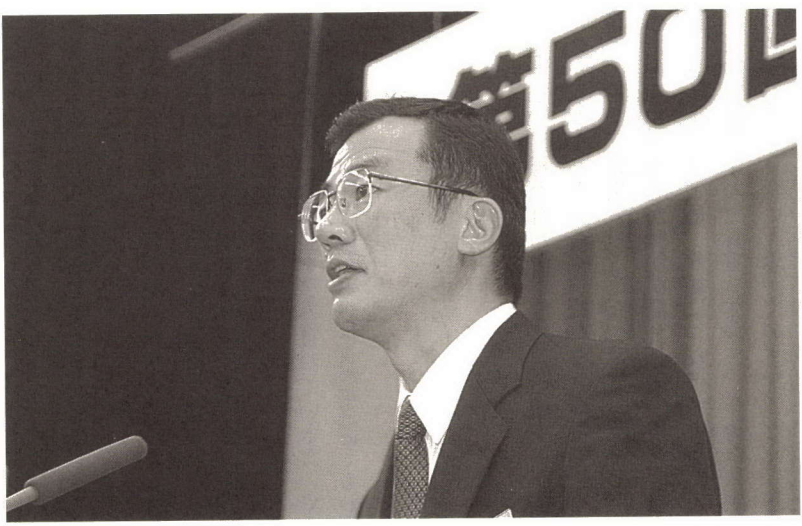
ご遷宮のごと〝新しき命〟を育む合宿となる

（福岡県立直方高校　小野吉宣）

「他と共なる生」といふ教へが改めて、痛感させられた第五十回合宿教室でありました。一人一人が自分の役割をまごころこめてやった、そのお陰で節目を飾るにふさはしい実り多く、感銘したこと、有難きことの刻々に体験できた合宿教室でした。山口秀範大兄の「『神宮』で合宿せむと定まりて一年は経りけふを迎へつ」言葉にこもる思ひが十分に伝わってきます。有難うございました。五十一回の運営委員長は藤新成信大兄の「来る年もまた重ねなむ新しき命育むご遷宮のごと」と詠んでゐます。伊勢神宮の御垣内参拝の折に自分の重い役割を「来る年もまた重ねなむ新しき命育む」ことだと受け止められた。古き生命は新しき命が育まれ相続されて行く。私のつとめも二人の学兄と同じ思ひで受け止め「他と共なる生」を厳粛に生きて行きたいと念じます。

朝鮮から伝はりし久米の舞、本国では滅び去ったとききて
いにしへのせうしちりきに若きみこ合はせ舞ひたるおごそかにして
目に見えぬ神楽します「久米の舞」今に息づき奉納されをり
朝鮮の王に捧ぐる「久米の舞」王朝滅び舞も滅びぬ
「新しき生命育む遷宮に」友しらと心一つに励まざらめや

カメラ・レポート10



短歌創作導入講義。みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫先生は、人生を深く味はふことになるのが短歌創作であると指摘された。

第六班―男子学生―

貴重な体験ができた

（下関市立大学　経　一年　横手健太郎）

私は初めての参加でした。昔この合宿に参加した事のある父に勧められての参加でした。年上の方ばかりで、班別研修の時は難しい話について行けないのではないかという不安がありましたが、みんなとも打ち解け、すぐに輪の中に入ることが出来ました。講義は先生方の熱意がひしひしと伝わってきて、班別研修にも力が入りました。また、五十回の節目の年に参加できたこと、そして伊勢の地に来ることが出来たことに深く感動しました。特に、朝早く起きることは辛かったですが、朝の新鮮な空気を吸いながら神宮の木々の下を班員と歩んだ事は何とも言えないすがすがしい気持ちになりました。本当に貴重な経験をさせていただき有り難うございました。

見知らぬ地仲間と共に歩んだ地皆（みんな）と触れた日本の心

日本語の美しさを再確認できた

（九州大学　工　二年　馬場章央）

今回の合宿で強く感じたことは「言葉」です。言葉は思想を伝えるものであると共に言葉のつながった美しさそのものを感じ、味わうものであることを教わりました。「てにをは」という単なる助詞と考えられているものが、言葉一つ一つを玉の緒のようにつなぐ美しさに感動しました。人はそれぞれいろんな言葉を持っています。僕は宝辺正久先生の太い声から出る言葉や、長内俊平先生の津軽弁の言葉が大好きです。こういった言葉も「てにをは」によって一つのお話となり、聞く人に感動を与えるのだと感じました。僕はこれからも一つ一つの言葉、それをつなぐ「てにをは」を大切にし、日本人として、日本語を積み重ねていきたいです。

和歌（やまとうた）を班員（とも）らと共に詠みあへば夜の更けゆくもわからざりけり

合宿体験を生活に生かしたい

（福岡大学　経　四年　精松直哉）

なかなか日程が合わず、全日程参加することが出来なかったのが大変もったいなく、残念な気持ちでいっぱいです。各講義の中で、先生方の貴重なお言葉の数々をいただき、今はまだ頭の中で整理が付かず混乱しています。帰ってからしっかりノートにまとめ、今後につなげていきたいと思います。

この合宿で学んだ貴重な体験を、今後の私生活・学校生活に生かしていきたいと思っています。どうも有り難うございました。

後輩に伝えていきたい

（東京大学　文　四年　石村善之亮）

第五十回という記念すべき年に参加することが出来、大変うれしく思います。大学一年の時以来五回目の参加なのですが、参加したこと自体が自分にとって大きな意味を持つに到っていると思いました。それは「終生の友」となるような人たちと出会い、そして語ることが出来たことです。また、日常生活では得られない、目に見えないものに触れ、素直に感動できる経験も、この「合宿教室」が与えてくれました。たくさんの友らと講義を拝聴し、班別討論し、短歌を作る、こうした経験を通じて目に見えないものの存在を感じる訓練をすることが出来たと思います。こうした合宿教室を五十年にもわたって続けてこられた先輩方の志を、後輩に継いでゆく橋渡しの役になりたいと思います。

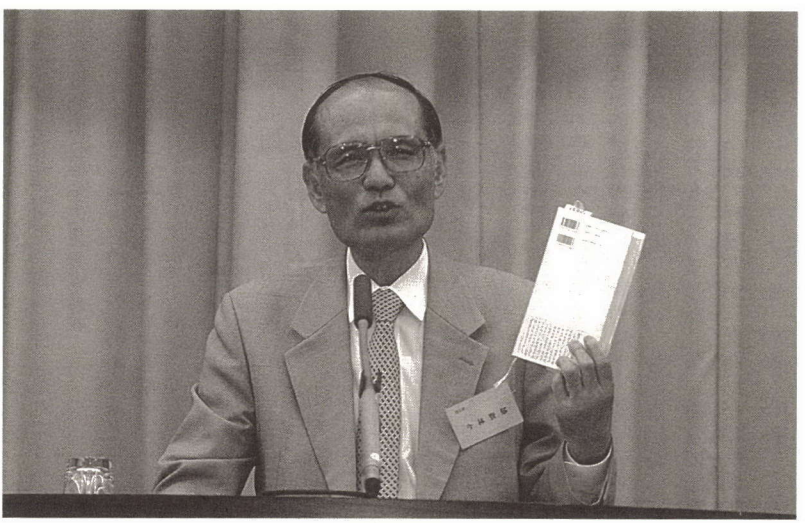
み友らと共に学びし四日間終生忘れぬ日々となりけり

気づいたことを今後につなげていきたい

（九州工業大学　情報工　三年　林　祥人）

これまでの参加との一番大きな違いは班長を任せていただいたことです。過去二回は、講義の内容をまとめ、自分の意見を考えることで手一杯でしたから、今回は班長として班員をまとめられるか不安でした。しかし、最初に意識して臨む

カメラ・レポート11



「名歌でたどる日本の心」紹介。日鉄プラント設計顧問　今林賢郁先生は草思社刊「名歌でたどる日本の心」は、日本の歴史を貫く「日本の心」が辿られてをり、是非ともこの本を手にして私達の祖先達の美しい心を感じてほしいと語られた。

ことが出来たので、先生方の講義や班員の言葉一言一言が、何を伝えようとしているのかと考えながら聞くことが出来たので、今までとはより深い班別討論が出来たと思います。

内宮・外宮の参拝を通じ、千数百年にわたる日本精神のつながりというものを感じることが出来たことは、この合宿での「気付き」の一つでした。この合宿で終わりなのではなく、日頃の輪読や勉強に、今回の合宿で学んだことや気づいたことをつなげていくことが今後の目標であると思いました。

合宿を終へて

合宿で伝へてもらひし精神を今後の学びにつなげてゆきたし

気づいたことを今後につなげていきたい

（㈱寺子屋モデル　横畑雄基）

今回は、伊勢神宮への早朝参拝や神楽奉納など、実際に自分たちで体験し、感じ取る事が出来る日程が多く組まれてゐた。そしてその都度大きな感動を得ることが出来た。かうした感動体験を、班別研修の場で「言葉」に出して具体的に表現する事が、合宿の大きな意義ではないかと思ふ。長谷川三千子先生も、「日本語の中に思想が生きてゐる」と語ってをられた。普段何気なく使ふ言葉（日本語）でも、班別研修で班員の言葉を聞いてゐると、より具体的に語ってほしいとか、より端的に表現できないか、と感じる事が多いことに気づかされた。改めて、短歌相互批評の本来の意味を考へることが出来た。日常生活でも、感動を言葉にあらはし、友に語ることで、自分の言葉（日本語）に磨きをかけたいと思った。

み友らと共にすごせし一時を言葉にあらはす事ぞ難し

長谷川三千子先生の御講義

何気なく語る言葉も日の本の言の葉なりと師は語ります

班討で班員（とも）らが語る感動は素直な言葉のしらべなりけり

第七班―男子学生―

班員の皆に支えられたなと心から思う

（亜細亜大学　法　四年　佐野宜志）

今回班長と決まった時、不安で逃げ出したい気分でした。でも今思い返すと、僕は班員の皆に支えられたなと心から思うのです。皆積極的に自分の言葉で発言してくれる人ばかりで、輪読の時は本当にすがすがしい気分になれました。忘れられないのは夜の集いの練習です。短い練習時間で、どう笑わせようかと発想を出し合い、特に古川君には皆が涙が出るくらい笑わせてもらいました。久しぶりにあんなに笑ったのです。感想発表で秋田君が「真面目な時は真面目に、ふざける時はふざける、オン・オフの激しい班でした。」と言った通りでした。この合宿で僕はとても貴重な体験をしました。班長をして、自分はまだまだ人の話を聴く力が足りないこと

に気付き、努力しなければいけないと思いました。班員の皆様、支えていただきありがとうございました。皆友と呼びあえる仲間になりました。ずっと付き合っていきましょう。

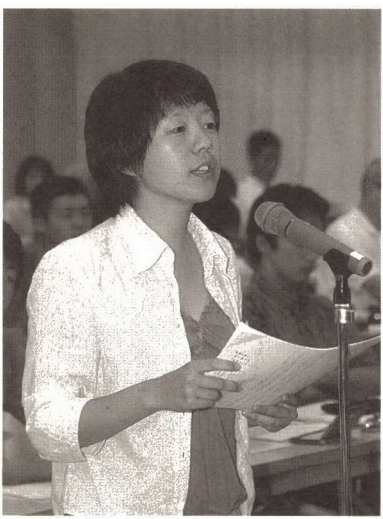
班員の古川君がバイクにて帰京の折に
東京へ帰りゆく友を見送らむと握手を交はし感極まりぬ

目に見えない神を信じるということが体でわかった

（早稲田大学　法　五年　高木雅史）

今回は五度目の合宿参加で、学生として最後の合宿でした。大学一年の時友人に強引に誘われ合宿に参加したのが、国文研との出会いでした。それから毎年合宿に参加し続けたのは、一つはよき友、先輩方との出会いがあったからですが、国文研での勉強に何か私を強く惹きつけるものがあったからです。今まではそれが何かはっきりとわかりませんでしたし、特に明確にしようと考えてみたことがありませんでした。しかし今回の伊勢の合宿ではっきりとわかりました。目に見えない神を信じているか、という点だったように思います。伊勢という土地での合宿、そして松浦光修先生の御講義で、頭で理解するのではなく、体でわかった気がします。慰霊祭では毎年「海ゆかば」を歌っていますが、今年の「海ゆかば」は今までと全く違う体験でした。

神代より伝はりきたる我が国の神に祈るは素晴らしきかな



先生の御講義に真剣に質問を発する学生達。

和服の道を通して伝統文化を受け継いでいきたい

（獨協大学　経　四年　菊間　翔）

私は伊勢へ来たのは三回目です。獨協大学名誉教授の中村燦先生の伊勢ゼミ合宿に二回参加したのですが、伊勢は何度来ても良い所だと心から思ひます。私は念願の和服会社に就職が決まりましたので、天照皇大神に決意表明を申し上げました。私は和服を皆様にもつと知つて頂き、着て頂きたいと思ひます。私達が伊勢で学んだ伝統や文化を、後世に生かされてゐる私達が受け継ぎ、子供や孫に伝へて行くべきだと思ふのです。私はこの日本を建て直したいと思ひ、大好きな和服の道を選びました。日本文化について、まず和服から知つて頂き、歴史や伝統について私の持つてゐる多少の知識や考へを広め、私の大好きな日本に少しでもご奉公させて頂きたいと考へてゐます。義理人情溢れる本来の日本の姿になつて欲しいと願ふのみです。

伊勢神宮参拝の折、決意表明
今の世に和服文化を伝へたしわが人生を賭ける覚悟で

子供らに日本精神を伝えていきたい

（大阪教育大学　教　三年　吉田明令）

私がこの合宿に参加した動機は、長内俊平先生の講演録を読んだことでした。先生が仰ることは大切な「こころことば」だと感じましたが、自分はなかなか実感がなく、何とかその実感を得たいと思い、参加しました。この合宿で先生のお話を聴き、最も実感したのは、今自分が学ぶことができるのは、ここへ導いて下さった友人や、この合宿で真剣に和歌や言葉を考え合った友のおかげだということでした。学問を修める上で人とのつながりがいかに尊いかを感じずにはおられませんでした。さらに伊勢の地で学ぶことができ、日本になつかしさを覚え、自分が日本人であるという自覚を持てた気がします。日常に帰っても日本精神を探求し、生涯をかけて子供らにそれを伝えられる人となるような学問を続けていきます。

心から感ずる言葉積み重ね国を支へる人とならなむ

仲間を得た

（九州工業大学　情報工　二年　秋田崇文）

初めて合宿教室に参加しましたが、私が一番に驚いたことは、日本の現状を憂い、これからの日本の役に立ってゆきたいと思っている仲間がたくさんいたことです。講義の後の班別研修では各自が学んだことをみんなで共有しあいました。一人一人が違った角度からの意見でしたが、その中でも「先人に感謝し、日本の生きている歴史を後の世代にも伝えてゆきたい」という思いは一緒でした。また短歌相互批評では自分の胸の内をさらけ出し、その気持ちを一番近い言葉で表現

できるように皆で悩みました。仲間のことを思い、真剣に考える機会は、日常生活において多くはないと思います。しかしそれが真心というものであり、人に対して優しい気持ちになれ、心が豊かになることだと思います。そのことは表面上だけで付き合おうとする現代の私たち日本人にとってはとても大切なことだと思います。

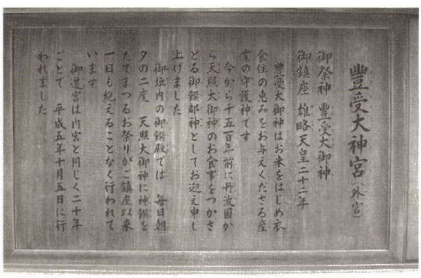
来年も是非、素敵な仲間達に出会えるように、期待してこの合宿に来たいと思います。有難うございました。

合宿最後の夜ふんどしをまいて記念撮影する
ますらをがふんどし巻きて写真撮る裸のつきあひになりにけるかな

日本人の真の歓び

（早稲田大学　社会科学　三年　古川悠哉）

私は、合宿教室に参加するまで、一つの大きな疑問を抱えていました。それは、日教組に代表される戦後日本の唯物思想的な物の考え方、人生や生命の捉え方に、自分がどう対峙し生きていくべきなのか、ということでした。今の世の中は、常に実利だけを追求していくことに人生の楽しみ、歓びがあるのだという思想が蔓延しているような気がしてなりません。しかし、今回の合宿で、講師の方々のお話を聞くことで、私は、人間、特に日本人においては、目に見えないもの、個々の精神の質的な豊かさを追求することが日本人の真の歓びに通ずるのだと確信することができました。さらに古来より真



野外研修。外宮に参拝する。

の日本人の心を伝承されてきた歴代天皇の方々が詠まれてきた歌を詠み、学び、そして感じることで私も生命や日本人の心を実感できるのではないかと思いました。

合宿教室に参加しなければ決して出会うことのなかったであろう多くの同志達と、これからも共に語らい、共に考え、共に支え合いながら、真の日本人の心を探求していこうと思いました。

御友らと共に語らひ学ぶこと胸に刻みて帰路へ発つかな

『古事記』を声に出して読みたい

（㈱アルバック　北浜（くだり）道）

岸本弘先生が、『古事記』の、倭建命の御最期の件を、朗々と読み上げられたお声が、今も耳に付いて離れない。先生は、文章の解説は特にされず、読み上げられただけであるが、そのお声から、命（みこと）を悼まれる先生のかなしみが伝はつてきて、心揺さぶられる思ひがしたのである。先生はまた御講義の中で、学校の教へ子との、或は合宿教室の班員との心の交流につき話されたが、古典を通して先人を偲ぶことと現実人生で出会つた人の心を偲びつきあつてゆくこととが、先生においてはごく普通にひとつとなつてゐることが感じられた。

私もまづ『古事記』を声に出して読むところから始めたいと思つた。

七班の皆へ

出し物は未完なれども力合せ取り組みたるは尊かりけり

えにし得て同じ班にて学びたる幸を信じて共に学ばん

徹底した謙虚さ

（大阪府立南寝屋川高校　絹田洋一）

山内健生さんが御講義で、中国の『易姓革命』の考へ方は「過去を否定することによつて自分の正当性を主張する傲慢な考へ方」であり、これに対して我が国の『万世一系』は、「過去を否定せず、先人のおかげと感謝する謙虚な考へ方」であると言はれた。確かに歴代天皇の御製の中には、「愚かなる身も」「おろかなる心ながらに」「おろかにたらぬ身を」といつた表現が多い。「共に是れ凡夫のみ」と言はれた聖徳太子、「愚禿鸞」と自称した親鸞にも通じる徹底した謙虚さが、歴代天皇の御心中に一貫して受け継がれて来たといふ事実に、改めて驚きと有難さを感じた。また、共産党独裁体制を正当化するために我が国に対して執拗な非難を続ける現在の中国の外交手法も、伝統的な『易姓革命』的な考へ方の延長線上にあるのではないかと思はれた。

三日目の朝の集ひで川井茜さんの御製拝誦を聞きて

まごころをうたはむとせしもなかなかにうたひあげたることは難しと

我もまた一首なりともまごころをうたひあげたしとふ言の葉すがしき

第八班―男子学生―

自分の気持ちを言葉に表す難しさを痛感した

（成蹊大学　法　一年　亀澤矢汐）

この合宿で一番に痛感したのは言葉の大切さです。班別討論の折に自分の意見が班員の皆さんになかなか伝わらず、その時に「もっと自分の気持ちを素直にあらわしたらどうだ、」との指摘を受けました。次の班別討論でなるべくそのように心がけて発言すると前回より分かっていただけました。その後、班付の先生から、「知識が先立って意見を分かりにくくしている節があるから、自分が感じたことをそのまま言った方が良い」、との御助言をいただきました。そこで自分は知ったかぶりをしていて、言葉に中身が伴っていないことを痛感しました。これが自分がこの合宿で得た一番の教訓であり、これから心を磨くように学問に励みたいと思いました。

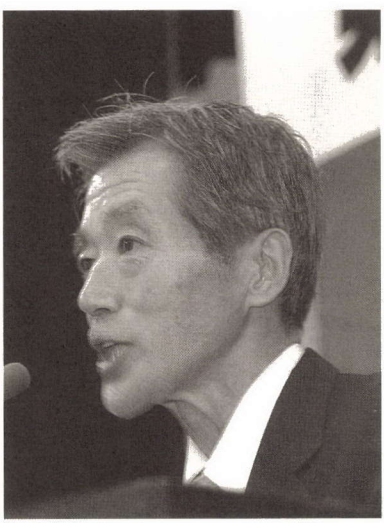
ありがたや伊勢の宮居は御先祖の祈りの心とともにつづきし

日本の歴史は生き続けてゐる

（九州大学　工　二年　清水貫太郎）

戦後、多くの日本人が、それまでの日本を捨て新しい国づ

カメラ・レポート14



会員発表。防衛大学校教授　太田文雄先生は、国防の根本問題は国内問題であり、国民一人一人に深く根ざしてゐると語られ、富山県立富山工業高校教諭　岸本　弘先生は、一つの文章に心底から向き合ひ、文章の書き手の真意にせまることの大切さを示された。

くりをしようとしました。私にとっても戦争の歴史は異なる世界のことのやうにしか思ってをらず、自国のことであるといふ意識がほとんど持てずにゐました。

しかし今回の合宿教室で日本の歴史や先人の心、魂は、皇統や太古からの神々と共に生き続けてゐるのだといふことを強く感じました。

学校の友人達と首相の靖国神社参拝の是非などについて話をすると、日本の過去を真っ向から否定するやうな考へを述べる人がとても多く大変悲しく思ひます。

私はこの合宿教室で日本の先人達に対する強い敬意の念を抱くことができました。

伊勢の地に学びて我らがこの命の歴史の上にある事を知る

目に見えないものを見てみたい

（東京大学　法　四年　池田朝彦）

一、新聞各紙の論調の違い、教職員組合との意見の対立などが聞けたが、これを足がかりに、自分が信じるもの、自分としての意見を持っていきたい。

二、〝日本国の象徴は天皇〟という意味が分かった気がする。何千年も続き、その時その歴史が記録として残っている。それだけでもすごいことだが、さらに何か実体験として天皇の御存在のすばらしさを経験できたら、と思った。目に見えないものを見てみたい。

三、短歌作りは奥が深い。何か一つ心が動いた場面を表す。観念的、概括的なものは他人が読んでも共感がわかない。相互批評で自分のつたない表現・思いが徐々に引き出され、三十一文字となっていくのに感動した。

参加してよかったと思う。自分にとって今現在大事なことを今後も考えていきたい。

我が人生かけて尽くさむ日本の天皇の御姿垣間見えけり

身近な所から言動を大切に

（獨協大学　経　四年　吉田和正）

今回の講義の中で特に強い印象を持ったのは長内俊平先生の話です。先生の大きい瞳、温かいお国言葉、若者に対しても誠の心を持って話をされる姿勢など、とにかくすべてが私にとっては感動の対象でした。先生から学んだことは、身近な所から言動を大切にして生きていくということです。また、国文研の諸先輩方と接していると己の弛緩している心に気付き、もっとがんばらなくてはと感じます。今回の伊勢合宿でも特別なことを学んだというよりは当たり前の事を当たり前に実行していくことの大切さを再度教えていただきました。ありがとうございます。

慰霊祭にて

国愛すはらからと歌ふ「海ゆかば」に鳥肌たちて感動しにけり

「日本」というものを知らなさすぎた

（日本大学　経　四年　横山知之）

伊勢の地（宇治山田駅）に降り立った時から街全体が聖なる領域に包まれていると感じ、合宿に対する期待と共に心引き締まる思いにかられました。今まで日本に生きながら、またこれからも生きるにもかかわらず〝日本〟というものを知らなさすぎたのではと合宿にて痛感し、従来の凝り固まった価値観を再び柔軟にしていただけたと思っております。今後も一日本人、一人の人間として、より善い行動がとれるよう、常に自問自答、熟考を重ね日々精進していこうと思います。

古きよき日本の伝統に触れながら我の心は清められけり

美しい文や歌は人の心を結びつける

（明治大学　理工　四年　小柳雄平）

今回も多くの美しく力強い言葉を新しく発見させて頂くことができた。岸本弘先生が紹介してくださった、倭建命が崩（かむあが）りたまう場面の一節である。以前から音読して実に気持ちの良い一節ではあったが、岸本先生の読まれるのを聞いてとても驚いた。腹の底から朗々と心をこめて読まれる声は、実に澄んでおり力強かった。私も好きな古典がいくつかある。先生が言われたように好きな古典とともに生きていけるよう古典にもっと触れていきたい。

三日目午前。拓殖大学客員教授　山内健生先生は、トーマス・インモースの詩と「新旧の不思議な共存」といふ言葉を紹介され、「神宮の式年遷宮はまさに、この言葉の具体的な現れである。太古の建築を受け継ぐことは、太古の心を受け継ぐことに他ならない」と語られた。

美しい文、歌は人の心を結びつけてくれるような気がする。皆で大きな声で読むと実にすがすがしい。そのような経験を通してよい友を作ることができるのであろう。これからもっと付き合って話していきたい友を得ることができた。実に嬉しい。

清水貫太郎君が途中で帰りし折に

班員の一人一人とかたく手を握り交はして別れ告ぐる友

福岡で再び会はうと約束しバスに乗り込む友を見送る

良き友と会ひ得しよろこびのあふれきて手を振りながら涙こみあぐ

一つでも心に残るものを

（平山直樹税理士事務所　北村公一）

初めて班付をさせていただいた。班員の皆さんと存分に語り合ふことができ有難く思ふ。

最年少ながら積極的に話をし短歌相互批評をしてくれた亀澤君、自分の言葉で素朴な疑問をいつも投げかけてくれた清水君、ひた向きに意見を述べてくれた横山君、知的な喜びも違和感も正直に話してくれた池田君、ムードメーカーで班員皆の心に直に迫ってゆく吉田君、班をまとめ班員の心を掴んでくれた班長の小柳君。私も得がたい経験をさせていただいた。

班付としてなるべく「しゃべり過ぎない」やう努めたが、その結果足りない部分もあったかと思ふ。何か一つでも心に残るものを持って帰っていただければと願ひます。

第四日目早朝、独り参拝す

日の本に生まれしことのひたすらに有難く思へて目の潤み来ぬ

第十一班―女子学生―

皇室こそ日本の生命

（㈱寺子屋モデル　黒岩礼子）

今回の合宿では、心に響いた言葉がたくさんあり、これからの、生の中心軸にしたい言葉を見つけることができました。それは、「皇室こそ日本の生命である」という言葉です。

今年で合宿参加は四度目となります。参加のたびに、数多くの天皇陛下の御製にふれてきました。その度に、天皇陛下の美しい御心に感動し、陛下の尊さ、偉大さを感じてきました。しかし、「なぜ天皇陛下なのか」と、ずっと胸につかえていたのも事実でした。ところが、今回その胸のつかえが解消しました。それが先にあげた「皇室こそ日本の生命」という言葉です。「日本の生命」だからこそ、天皇陛下の御製にふれ、御心を偲ぶことは、私たち日本人にとって大切なのだ！と、すっと思うことができました。

しかし、胸のつかえがすっきりなくなったわけではありません。我が国の歴史の中心には常に皇室があったのだと、い

うことを、自分の心でしっかりつかまなければ胸のつかえはとれません。

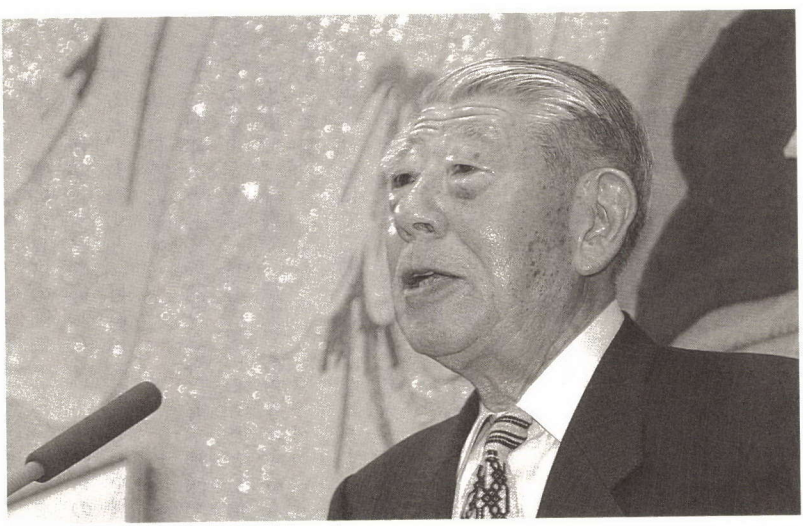
「皇室こそ日本の生命である」ことを実感するために、日本の歴史を学び、日本の生命を守るために自分ができることは何かを見つけて生きたいと思います。

みやしろを囲むがごとく立つ木々の尊く見ゆるを不思議に思ふ
天皇をまもることこそ日の本の生命を守ると我は知りたり

この日本をいかなることがあろうと守っていきたい

（佐賀大学　教　二年　梶山雅代）

今回の合宿で最も心に残ったのは、占部賢志先生のご講義だった。この国文研の源がどのようにして生まれたか、そこに沼波武夫先生の並々ならぬご決意があったのだということを知り、強い衝撃を受けた。また、大正という時代がどれほど混迷していたかも今回はじめて知った。そのような時代の中で、先生がジャーナリストとしての道をやめ、「今こそ日本精神の研究を！」と、ご自身の全てを懸けていかれる姿が胸を打った。そしてそこには、収入を断ち、子供がノートを買えないという苦労や、七女の死など様々な苦しみがあった。しかし、沼波先生は「回天の壮志、沸々禁ずる能はず。」というご決意で、日本精神を守り抜く瑞穂会をつくられた。そしてこのような決意のもとで生まれた本合宿に参加させていただいたことを本当に有難く思う。最後に、黒上正一郎先生



三日目午後。創作短歌全体批評。元電源開発環境立地本部長代理　長内俊平先生は、「班での短歌相互批評では、相手の気持ちになって話を聴いて、お互ひに作者の気持ちに即したものとなるやうに直し合ふことで、またとない友達を得て下さい」と述べられた。

の「追悼文」の次の箇所を心に刻み、この合宿を終えていきたい。

「日本國を思ひ、日本精神を体現して共に濁乱の世に歩まんとする一片の誠意を欠くならば、それはいまだ究極の意義あるものではない。研究も苦労も信念に統一されて、み國のために協力して立たねばならぬ。」

先人たちが守り続けてきた日本、この日本をいかなることがあろうと守って生きたい。そして、今回の合宿を胸に刻み、思い返し、くじけそうになっても決して諦めぬ精神で挑んでいきたい。

沼波先生の七女の死について詠まれた歌にふれて

愛ほしき娘を失ひし悲しみの溢るゝみ歌胸に迫りく

目に見えないものを信じる力

（福岡女子大学　文　四年　馬場智茶）

今回の合宿は三度目の参加で、学生としては最後になります。思い返してみると、初めての合宿は、ついていくので精一杯で、新しい知識や意見を必死で聞くことに重点を置いていました。

今回の合宿では、これまで学んできたことに照らし合わせながら、先生の御講義を聞くことができたり、友達の意見を聞いて「そうだそうだ」と自分の思いを確認することもできました。

日本人としての誇りや思想というものは、まさに「目に見えないもの」であり、それを得ることは難しいように見えます。しかし、実際に日本の国柄、文化、先人などについて勉強したり、伊勢神宮に参拝したり、古代からの儀式を体験したりすると、おのずと「目に見えないものを信じる力」が身につくように感じます。

また、日本人としての誇り以外にも、神様や祖先に見守られていること、友情、真心、思いやりなども信じていると、もっと素直で、謙虚で、誠実であろうとする人になれるような気がします。

私は来年社会にでて働くようになりますが、この合宿で学んだことを忘れずに、自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の言葉で語ることを肝に銘じていきたいと思います。

四日間心一つに学びこしあまたの友のありがたきかな

忘れてはならない日本の心

（早稲田大学　第一文　二年　原川　翠）

今年も国文研合宿に参加させていただき感謝しております。日本人の精神的な問題についてたくさん気付かされ、真剣に考える機会を与えていただきました。また、日本を大切に思っている同志たちと語り合うことができ嬉しく思っています。

松浦光修先生のご講義にあった、目に見えないものを大切

にするという精神や山内健生先生のご講義にあった古いものを尊敬する精神などは、忘れてはならない日本人の心であると思いました。

この合宿では、日本人としての誇りを持つ大切さを知ることができると同時に、日本の歴史、文化を学び、そのすばらしさに気付けるという二ステップがあってすごいと思います。更にステップを重ねられるように努力していきたいです。

それぞれに信ずるものは違へどもほほゑみ交はしともに生きたし

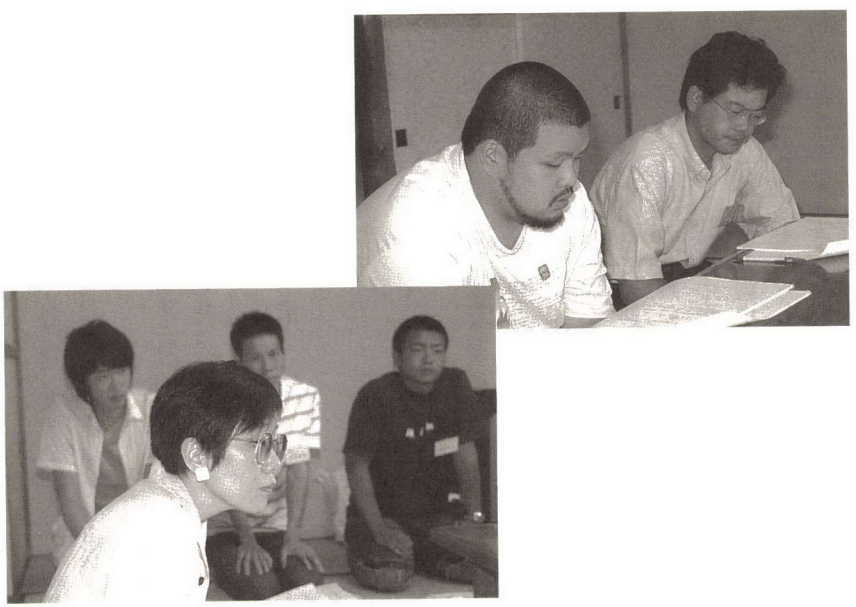
「知レ己、知レ彼、応レ変」

（崇城大学　芸術　一年　折田宇代）

今回、第五十回合宿教室に参加して、私は太田文雄先生の講義の中の「知レ己、知レ彼、応レ変」という吉田松陰の言葉がとても印象に残っています。私は高等学校から芸術を学んできましたが、これらの言葉は私の作品に対する考えや、制作に通じるところがあり、自分にその言葉が自然に入ってくるような感覚を受けました。

班別研修で、友達の感想を聞いて、この言葉が日常生活に大変密接していることに気付かされ、これまでよりももっと具体的な私の目標になりました。

この四日間を一日一日思い出すと何だかとても忙しく、内容の大変濃い日々でありました。普段の生活速度の二倍速で生活していたような、そんな気さえします。しかし、その中



御講義後、班別研修にて感想を述べ合ふ。班室に見えた長谷川三千子先生。

で学んだことは他の何にも変えられないものであり、今年の夏の最高の思い出になりました。

班員をはじめたくさんの良き先輩方、先生方にお会いできた事をとてもうれしく思います。

四日間共に過ごせしみ先輩らのやさしき笑顔姉のごとくも

「日本について、短歌についてもっと知りたい」

（多摩美術大学　造形表現　三年　小林紘子）

今回の合宿は三日目の午後からの参加だったので、あっという間の閉会式でした。しかし、たった一晩でも学生の皆とそれぞれ作った短歌について、お互いの気持ちに近づこうと話し合え、また、長内俊平先生のお話や寳邉正久先生のお話、慰霊祭と参加できて本当にうれしかったです。

今回は三回目の合宿参加ですが、毎回参加する前に、友達にこの合宿教室がどういう合宿かを上手に説明できず、もどかしさを感じていました。「学生と短歌を作ったり、日本の国の事、歴史について話し合う」と言ってもなかなか理解されず、誤解されるのではないかと心配で、この合宿に参加した時の素直で温かい気持ちと身が引き締まる思いを、どう説明したらわかってくれるのかと毎回四苦八苦してきました。

今回はたった二日間の参加でしたが、国文研について、日本について、短歌についてもっと知りたいという気持ちがどんどん出てきて、家に帰ってからもしっかり勉強したいと思いました。

次回また合宿に参加する時は、友達や知人にこの合宿をしっかりと自分の言葉で自信を持って説明できる様、一年間頑張りたいと思います。

わづかなる時間なれども友達と語り合へしはうれしかりけり

壇上に上がりて語る祖父見れば思ひあふれて涙流るゝ

第十二班―女子学生―

素晴らしい友と出会えた

（西南女学院大学　保健福祉　三年　櫻井愛弓）

今まで、短歌や日本の歴史にほとんど触れる事のなかった私にとって、この合宿は新しい発見と知識の宝庫でいっぱいでした。失礼ながらご講義をされた先生方のお名前やお顔、著書も全く知らず、全てが初心者でしたが、知識が全くない私にとって先生方の有難いお話は、長内俊平先生がおっしゃったように（「頭の中がカラッポのほうが色んな事を吸収できる」）存分に頭と胸中に積め込む事ができました。

また、この合宿で素晴らしい友と出会うことができた事は私の一番の宝となりました。班長の安田さん、太田さん、三荻さん、影島さんは、年が同じか一つしか違わないのに実に多くの事を勉強しておられて、わからない所は親切に教えて

下さいました。まだ一年生の岩見さんはまた来年も参加したいとおっしゃっていました。私も太田文雄先生がおっしゃった「継続は力なり」という言葉を実行して少しづつ短歌に親しんでいきたいと思っています。

伊勢に来て見えないものが見えけりと伊勢の大神に感謝しまつらむ

私達の心に真直ぐに語りかけて下さった

（北海道大学　法　三年　安田陽子）

第五十回という節目の合宿に参加できたことが本当に嬉しく感動的でした。不可思議の縁に結ばれて同じ班になれた皆と班付の宝辺正久先生と共に過ごした三泊四日はあっという間でした。伊勢神宮は思っていた以上に美しく、木々の末端まで命が宿っているような気がしました。正宮の前に立つと胸がいっぱいで何とも言えない心持になり、「神さまがましますのだなあ」とこみ上げるような思いがありました。

この合宿での講義は大学のそれとはどうしてこんなに違うのか不思議で仕方なかったのですが「心」が「思い」が本当に込められた日本語で、また私達の「心」に真直ぐに語りかけて下さるからなのだと、宝辺正久、長内俊平両先生がご学友のお話をされるのを聴きながら思いました。

十二班は先に一人帰ってしまったのですが、その友がメールで短歌を送ってくれ、それが本当に嬉しくて、また胸がいっぱいになりました。

三日目夜。国民文化研究会副会長　賓邉正久先生は、まごころを持って御霊と向き合ふことの意味を示された。

一日早く帰ってしまった班員よりメールで送られた短歌への返し

新しき縁に結ばるるみ友より思ひ込めたるみ歌届きぬ

真直ぐに思ひをつづる言の葉は我の心に熱く響けり

伝へたしと思ひたることは多かれど先づは伝へし感謝の思ひを

一から友情を築くことは新鮮でした

（早稲田大学　第一文　四年　影島由佳）

新しい友人が出来たことが、今合宿で得た貴重な経験だったと思います。大学入学以来、サークルや東京近郊の人たちとの交流だけだったため、全国各地から集まった価値観の異なる人と、一から友情を築くことは新鮮でした。また、高校時代、政治に対する姿勢が家と学校では異なるという悩みを持っていた人に出会えたことも少し嬉しかったです。

ただ正直、この合宿の雰囲気が閉鎖的で息苦しかったです。反論を許さない、ありえない空気を感じました。

偏屈なる父にも友のをりたると実感できたる最後の夏なり

得難い友との出会い

（同志社大学　法　四年　太田和子）

この度の合宿では普段の生活ではまず体験できないような物を多く得ることができた。

それは、各先生方からの多岐に渡るトピックの講演や、神社に皆で参ったことを含むが、最も忘れ難い財産は、合宿参加者と知り合うことが出来たことである。それぞれ大学も専攻も異なるのに、私は初日からなんの違和感もなく皆さんとお話することができたし、講義後の討論に置いても感動を共有することができ、合宿中の全ての時間を有意義に過ごすことが出来た。どの方もおどろくくらい純粋で真面目であり、忘れていた日本古来の魂を感じるのにこれ以上の環境はなかった。互いに学び合い、知識を補い合い、互いを高めあったメンバーたちのことは一生涯忘れることはなく、引き続き自分を啓発するきっかけであり続けるだろう。

世代超え魂繋ぐ伊勢の地へ再び参らう次は我が子と

日本人としての生を実感した

（長崎大学　教　三年　三荻　祥）

第五十回という記念すべき合宿に参加できたことを大変嬉しく思います。松浦光修先生が「このままでは式年遷宮もままならない」と言われたこと、長谷川三千子先生が「日本語を喋っていることを自覚してほしい」と言われたこと、そして宝辺正久先生が日本の為に命をかけられた寺尾博之命、吉田房雄命等の話をされたこと等、大変心に残りました。この合宿では、たくさんの御講義や友との触れ合いを通し、自らの日本人としての生を強く実感した気がします。そして占部賢志先生の御講義をお聞きし、より日本人としての生を求め

て闘っておられたのが、沼波武夫先生を始めとする瑞穂会や昭信会、国文研の先生方であられたことを知りました。祖国日本にとっての自分は如何にあるべきかを問い続けていきたいと思いました。

「瑞穂会」趣意書を読みて

大正の乱れし時を正さむと師は学生に檄をくださる

目に見えないものを信じる心をもちたい

（福岡教育大学　教　一年　岩見智世）

今回初めて参加して分からないことばかりで難しいなあと感じる時がたくさんありましたが、自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の言葉で語っていきたいという情熱がこの四日間を通してこみあげてきました。

今まで神話には全くといってもいいほど興味がありませんでした。しかし自分も含めて日本の子供達には、神話を信じる心を通して、尊いものを敬う心が今失われているのではないかという危機感を感じました。目に見えないものを信じる心を持ち、ものごとを心で見ることができて初めて祖先とのつながりや日本の文化、歴史を、空想の世界ではなく、実感として味わうことができるのだと思います。

目に見えぬものを信じる心には尊き神話の世界映るらむ

カメラ・レポート19

慰霊祭に先立ち、元新潟工科大学教授　大岡　弘先生から慰霊祭の意義と祭の次第、心構へについて説明がなされた。

すがすがしかった早朝の参拝

（山口県立下松高校　宝辺矢太郎）

一、安田班長の明るく元気なリードにより、班員の持味あふれた発言を促し、有意義な班別研修がもてたと思ふ。講義中も眠ることなく各自しっかりメモをとりながら聴いてゐた態度は驚くばかりであった。緊張の持続によく耐えたものと感謝の念あるばかり。

一、参加者二百五十名。早朝の参拝は各班一列に並んで拍手を打ち、思ひ思ひの散策、森厳なる霊気に包まれた記念すべき第五十回の合宿であった。

一、食事もおいしく、会館の皆様のあたゝかいもてなしに、さすがお伊勢さまのお膝下と心より御礼申し上げます。

外宮参拝の折、杉の巨木を仰ぐ
太き幹に身をゆだねて抱きつけば木の香に包まれ冷気の身にしむ
乙女らも手に手をつなぎ太き幹にぐるりを囲みてさんざめくかも

第十三班―女子学生―

自分を飾らずさらけ出すということ

（早稲田大学　社会科学　四年　川井　茜）

昨年に続き今年も合宿に参加いたしましたが、思いもよらず班長という大役を任せられ非常に不安でした。しかし班員の優しさ、素直さに支えられ何とか役目を終えつつあります。

合宿初日に、『見えないものを信じる気持ち』『自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう』というお話をお聞きし、私は常にこの二つを忘れずに取り組んで参りました。自分を飾らずさらけ出すということは、私にとって非常に勇気がいることと感じました。また自分の心を伝えること、また友の言葉に耳をかたむけることなど、共に想いを映し出している言葉を見つけることが難しいもどかしさを切々と感じ、日本の文化、思想を伝えるすべの大きな一つである『言葉』を、今後も深く学んでゆきたいと思います。

我が想ひを伝へる言葉求めむと友らも共に悩みくれたり

和歌は目に見えないものを形にするもの

（長崎大学　教　四年　平山恵理）

今回、日本文化とは何かを深めようと参加しました。その中で心に残っているのは友に贈る和歌です。長内俊平先生の創作短歌全体批評では、折々に友に和歌を贈ること。友や先生を大切にすることを訴えておられるように感じられ、和歌を詠む姿勢を改めさせられました。宝辺正久先生のご講義では戦死された友への思いを和歌として心に刻んでおられるのだと思いました。戦死の日、場所をそらんじられるお姿も強く印象に残っています。

友への思い、先人の方々への思いは目には見えません。しかしその目には見えないものを形にするのが和歌なのだと歴代天皇陛下の御製に思います。今思うのは、目には見えないものを心を通して何らかの形として継承してきたのが日本だったのではないかということです。それは和歌であり、式年遷宮が守り続けてきたものでもあるのでしょう。

長内先生の短歌全体批評をお聞きして

友を思ひ和歌詠むことを幾度も熱く語られしことぞ残れり

しきしまの道はともらのみこころをつなぎゆくものと改めて思ふ

大学の後輩次々和歌読まれ吾の班のページ繰る手もこはばる

班別研修

日を重ね研修で交はす言の葉のしげりゆくこそ楽しかりけり

ともどもと語り合ふときたちまちに過ぎゆく時の惜しまるるかな

日本をもっと愛せる人になりたい

（九州大学　医　二年　穴井裕子）

兄の誘いということで軽い気持ちで合宿に来ました。正直な気持ちを述べさせて頂きますと、非常に驚きの連続でショックを受けていました。今まで私は日本人でありながら、日本の国、歴史、将来に対して関心を持っておらず、非常に恥ずかしく感じました。そして班別研修において、同じ世代の友達がこんなにも真剣に色々なことを考えてきており、自分の考えをもっていることに驚きました。初めての経験でし

慰霊祭。戦時平時を問はず祖国日本の為に尊い命を捧げられた方々の御霊を参加者一同心をこめてお慰めした。

た。今感じているのは、たくさんの本を読んでみたいということです。そして日本をもっと愛せる人になりたいです。

また、今回の合宿に来て一番良かったと思えるのは、友との出会いです。こんな素敵な友と出会えたつながりがずっと続いてゆくことを切望します。

我が心に沁みゆく言葉友の声うれしさのあまり涙あふる、

本音で語り合える仲間と出会えた

（慶應義塾大学　文　一年　金谷智慧子）

まず、伊勢。この合宿で伊勢に来なければ一生来なかったかもしれない。でも初めて「神様がここにいる」という実感を持てました。伊勢神宮は本当に美しくてすがすがしくて、なぜか分からないけど私は好きになりました。それから和歌。私ははっきり言って和歌を詠む意義が分からなかった。それでも天皇様の御製には感動したし、普通に感想を聞くより、和歌にして聞くと、人の心が動いているなというのは感じる。

また私は大学での講義などの内容と、国文研で教わる内容の間で迷っているし、葛藤だらけです。もうわけが分からなくなって、頭が混乱しています。でも班長の川井さんが一つ一つ丁寧に答えてくれました。本音で語り合える仲間と出会えたなと感じています。

神宮の神ありがたう伊勢の地で本音で語れる友と出会へて

自分の言葉で語るという目標を持って

（九州造形短期大学　デザイン　一年　諫山仁美）

私は今回初めてこの国文研の合宿に参加しました。参加した理由は自分の和歌に対する不満足さからでした。また特に楽しみにしていた小柳陽太郎先生が、今回体調をくずされ参加されないと聞いたときは正直おちこみました。しかし合宿導入講義で布瀬雅義先生の「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」という言葉を聞いて、自分の言葉で語るという目標を持って合宿に臨むことができました。

朝の参拝などを通して、日本に受け継がれてきた精神の偉大さを感じましたし、しきしまの道の厳しさも今回の合宿で心にきざまれました。まず自分自身がすばらしい日本人になれるよう、和歌や日本神話、歴史を学び、今の学生生活を精一杯がんばってゆきたいと思っています。

日の本に受け継がれ来し精神を語り受け継ぐ我になりたし
合宿で学びしことを忘れずに日々学問に励みゆきたし
伊勢の地で共に学びし友達をこの先決して忘れはしない
来年もきっと会はうと約したる友の笑顔がうれしかりけり
慕ひこし小柳先生無理されず早く元気になりませと祈る

貴重な合宿の一こまをいただいて

（富山県立富山工業高校　岸本　弘）

大切な節目の第五十回の合宿教室に参加させていただけたことを心から有難く思ってゐます。また合宿の貴重な時間の一こまをいただいてお話する時間を与へていただきましたことも誠に嬉しく申し訳なく思ってゐます。その中で、今は亡き小田村寅二郎先生のことを思ひ浮かべながら話をすることができました。私の拙い話の一言でも、何か若い方々の心に止まるものがあればよいがと念じてゐます。班付として、班の動き（流れ）を振り返りますと、合宿が進んでゆく内に、一人一人の心の動きがしみじみと伝ってくるやうに感じられることは何よりも嬉しいことでありました。

今日からまた来年の合宿に向けて、出来ることから一つ一つ積み上げてゆきたいと思ひます。

会員発表（故小田村先生をしのびまつりて）

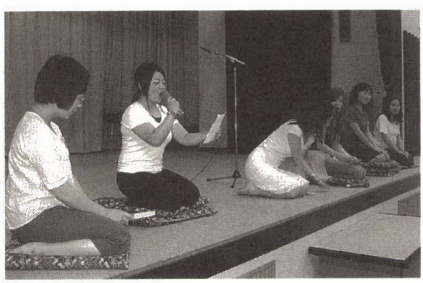
合宿の流れの中に身を置きて太子のことも語りゆきけり

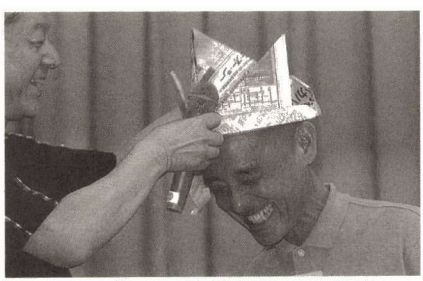
師の文を幾度となく読み返し語らむことを求めこし日々

若き日に師より聞きたる古事記（ふることぶみ）を今壇上に語りゆく我は

（廣瀬誠先生をしのびつゝ）

カメラ・レポート21





夜の集ひ。研修中の緊張感とはうってかわって、にぎやかに、班別・大学別に思ひ思ひの出し物が出された。

第十四班―女子学生―

自分の頭で考える人がこんなにもいたのか

（麗澤大学　外国語　四年　黒川英恵）

始まる前は、友達ができるだろうか、短歌をきちんと作れるだろうか、話について行けるだろうかと心配ばかりしていましたが、いざ始まってみると、班員と自然に打ち溶け合い、班別研修の回を重ねるごとに刺激を受け考えさせられました。自分の頭で考え、自分の声でしっかりと意見を述べられる人達が日本にこんなにもいたのかと嬉しく思いました。

どの講義も内容が濃く、頭がパンクしそうになった時、班に来られた長内俊平先生が「自分の心に一番、響いたところを大切に宝物のように胸に抱いて帰ればいい」とおっしゃってくださり、気持が楽になりました。一度に全部を理解しようと欲張らずに、わからなかったところはまた繰り返し繰り返し勉強していけばいい。「継続は力なり」の言葉の通りで、そうすることで、自分の中に根付いていくと思うようになりました。

この四日間、講義を通して、参拝を通して、また友との触れ合いを通して、たくさんの目に見えない大事なものを学びました。この合宿がこれからも長く百回、二百回と続くことを願っています。

目に見えぬ大事なものを胸に抱き足取り軽く家路に着かん

心の通い合う人間関係を大事にしたい

（早稲田大学　教　四年　小林由香利）

最も心に残ったことは「こころと体」で一所懸命に他者と付き合うことの楽しさです。班別研修の時、長内俊平先生がいらして、正座すると女性はさらに美しくなるとおっしゃって、素直にそれを実行しました。足がしびれてつらかったのですが、頭がすっきりして心がからっぽになるような感じがしました。

どの講義も内容が濃く、正直いって難しかったのですが、「虚心に耳を傾けて心に残ったことを大事にしていけばいいのですよ」との長内先生のお言葉に気持ちがとても楽になりました。班員の話にも率直に耳を傾けるように努めましたが、今まで気付かなかったことに多く気が付きました。相手の立場に立って思いやる気持ちを持つことが「日本の心」だと学びました。心の通い合う人間関係を、これからも大事にしていくように努めたいと思います。

ともどもと心の通ふつながりをこれから後も大事にしたし

「日本と日本人」を自分の目と心で感じた

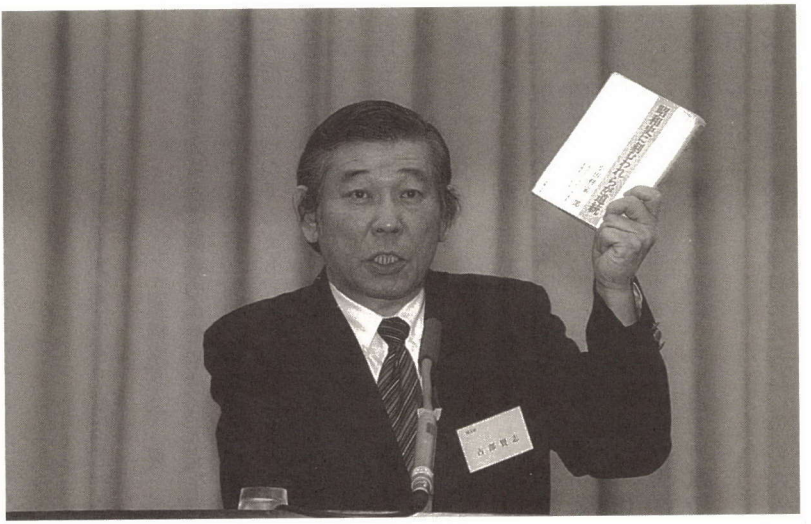
（九州女子大学　文　四年　城　朋子）

本当に多くのことを学ばせていただき、自分が求めていたものを発見することができて大変嬉しく思っています。一番印象的だったことは伊勢神宮参拝です。講義の中で、日本を深く学ぼうと集った皆様と、「日本」という国家、「日本人」という国民を我が目と心でしっかりと感じることができたことも強く印象に残りました。この合宿で、あらためて自分は日本人であったと再認識しました。今までしっかりと見定めることができなかった「日本」の地盤を固めることができて感動しています。

長谷川三千子先生の御講義で、万葉の時代から今も変わらず用いられている「て、に、を、は」が日本語の言葉同士をつなぐ玉の緒の役目を担っていることを教わりましたが、この合宿で学んだことやこれから後に学ぶことが玉の緒となって、私の心の中で強く息づいていくことを心から願っております。

内宮早朝参拝にて

み社の太古に変らぬ様式に息づく日本を感じて嬉し



四日目午前。福岡県立太宰府高校教諭　占部賢志先生は、まづ、現代のわれわれの心に住み着いてゐる「自分を時代から切り離して客観視する思考方法」の問題性を指摘された。

代々の先人から承けついだ血の熱さを感じた

（慶應義塾大学　文　二年　西村亜貴子）

初日にお聴きした「目に見えないものを信じる力」というお言葉は、合宿中ずうっと頭の隅にあって、非常に衝撃を受けたことばでした。これは「科学」に浸りきっている今の日本人にとって最も必要とされる大切なことではなかろうか、これこそ万物を貫く「玉の緒」ではないかと思いました。

神話のお話や外宮での神楽奉納など、伊勢で日本の魂ともいうべきものに触れることができ、その度に背筋がピンと張る思いがして深く感じるものがありました。日本についてのきちんとした事実を知ることによって、私の体内を流れる代々の先人から承けついだ血の熱さを感じずにはいられず、同時に自分がここに存在するという儚くも尊い事実に感謝の気持を覚えました。私が存在するということは、何千何万もの先祖の歴史も背負って生きることだと思います。だから私達は日本人として生きるために、日本の文化を伝えるために、何を為してどう生きるかを常に自分に問い正していかねばならないと思いました。

ここ伊勢の地で出会えた素晴らしい仲間、そして御講義、私をここまで導き、魂を震えさせてくれた全てに心から感謝したいと思います。

筆を執り別れを前にふと思ふ明日からの日々を未来の自分を
伊勢の地に誘ひたまひし師の君に感謝の思ひ胸にあふるる
肩を組み共に歌ひしあの歌をわが旅先の光とすべし
共に語り共に笑ひし友の背にまた会はむとぞ誓ひわかるる

諸先生方に「あふるるような信念」を感じた

（福岡教育大学　教　三年　山口瑛美）

占部賢志先生がご講義の中で沼波武夫先生の「今の世に、学者の事業がよし内容が如何に精微であり又取扱方法が精神史の研究に適つてゐても、そこに、日本國を思ひ、日本精神を体現して共にこの濁乱の世に歩まんとする一片の誠意を欠くならば、それは未だ究極の意義あるものではない。研究も労作も信念に統一されて、み國のために協力して立たねばならぬ」というお言葉を紹介して下さいましたが、今の自分に必要なものを示していただいた心地がしました。また聖徳太子について「激動の時代を客観視なさらなかつた」という黒上正一郎先生のお言葉もお聴きしました。まさに太子が誠心誠意、国政にあたられたことが心に強く残りました。沼波先生も小田村寅二郎先生も、まごころを持って国を思っておられたこと、そして班に回って来られた長内俊平先生や桑木崇秀先生のお話に先生方の胸のうちにある力強いあふれるような信念を感じました。

国のために、両親や家族のために、友のために、同志のために、子供達のために、何かをしたい、何かができるようになりたい、喜ばせたいと思うばかりで、行動がともなってい

ないことが多かったとあらためて気づかされました。そんな自分がくやしいと思うにつけても、先生方のように自信を持って生きる自分になりたいとの思いを強くしました。四日間、一緒に生活した班員とたくさんの思いを包み隠さず話せたことをうれしく思います。班の皆さんに本当に感謝しています。

まごころを言の葉に詠むしきしまの道ふみ分けて生きて行きたし
　　み友らと共に過せし合宿のことども記して胸に刻まむとす
四日間あまりに多くのことありて思ひのあふれ時間の足らず

第十五班―女子学生―

国を愛する心は否定できない

（大阪大学　法　三年　金澤仁子）

国を愛する心はやはり否定できないものでした。私は幼い頃は愛国心の強い子供でしたが、中学の先生が左翼だったので、保守も革新も受け入れられなくなってしまいました。合宿の初日は、「またパニックを起こして、帰りたくなるのでは」と不安で、何度も自分に「もう強くなったはず。大丈夫」と言い聞かせていました。そして開会式で君が代を斉唱した時、驚くべきことが起こりました。胸がつまって涙が出てきたのです。その後、講義と班別研修の積み重ねで、私は

四日目午前。地区別懇談。各地区毎に集まり、合宿以降の活動について話し合ひの交流を深めた。

国の文化や歴史を尊ぶ思想を受け入れ、日本のことを愛しく思う気持ちを認めることができるようになりました。班員のみんなと先生方、合宿運営の皆様に心から感謝申し上げます。

班員の心合はせて知恵しぼる言の葉咲きて笑顔の花咲く

やりとげて成長した私

（東京純心女子大学　現代英語　三年　青砥順子）

私は今回初めてこの合宿に参加しました。父親に二年前から参加を勧められていたのですが、「勉強会」という言葉が重くて、拒み続けていました。今年思い切って参加してみて、私は変わった気がします。それは二日目の夜に気付きました。自分の言葉使いが所々良くなっていたのです。ふと自分の口から出た自分の言葉で一人静かに驚いていました。同時に自分の思いを素直に言えている自分がいました。何事もよく知っておられる皆さんを前に何も言えなかった自分が思いを伝えられた時、私はこの合宿できちんと学んでいたんだと実感でき、とても良い時間を過ごせた満足感で一杯になりました。逃げず、一生懸命にやりとげた成長した私がここにいます。

初合宿感じ考え疲れたが残っているのは満足感

文化と歴史の上に自分の存在がある

（お茶の水女子大学　生活科学　一年　青木理江）

私は、母親に勧められて今回の合宿に参加致しました。ご講義を聴き、班別研修で意見を交わして考える時、班員はみな真剣に取り組み時間はあっという間に過ぎていきました。

伊勢神宮の早朝参拝は本当にすがすがしく、早起きの生活が素晴らしいものだと再認識いたしました。合宿中、短歌の創作がありました。今までほとんど詠んだことがないので自信がありませんでしたが、相互批評の時間に友に助けられ、なんとかそれらしい歌になりました。自分の感動を短い言葉で表す難しさと語彙力の無さがよくわかりました。自分一人でも「うたひはらす」ことができるようになりたいと思いました。

今回の合宿は自分を見つめなおす良い機会となりました。ご先祖様から今日まで受け継がれてきた文化と歴史の上に自分の存在があるのだとしみじみと思い返し、日本は素晴らしい国であると素直に感じることができました。

この国に動かざるものあると聞き我の心は晴れゆきたるかな

相手と心が一つになれた

（立命館大学　経　四年　前田多恵子）

私が心に残ったのは、長内俊平先生のお姿と短歌相互批評

です。長内先生の「美しいものを美しいと思う心をこの合宿で磨いてほしい」とのお言葉や、お父様のネクタイとお母様の風呂敷を持っておられるお姿から、父母を心から大切に思うお心を感じ感動しました。また短歌相互批評では、一人一人が詠み手の気持ちを偲んでいくことで、相手と心が一つになれた気がしてとても嬉しく思いました。なかなかしっくりくる言葉が出ずに苦しみ、何度も言葉を出しあって和歌が完成した時の喜びは本当にひとしおでした。明治天皇様の「思ふこと思ふがままにいひてみむ歌のしらべになりもならずも」との御製のようにこれからも歌を詠んでいきたいと感じました。

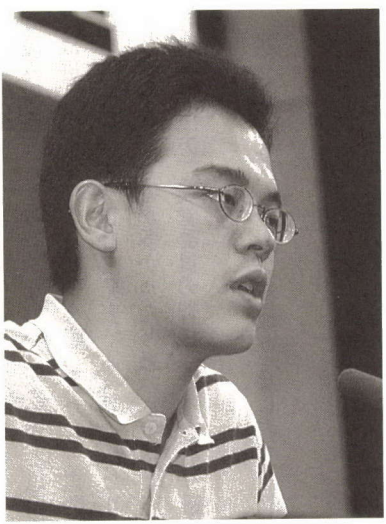
友達と心通ひしひと時を胸に刻みて合宿終はらむ

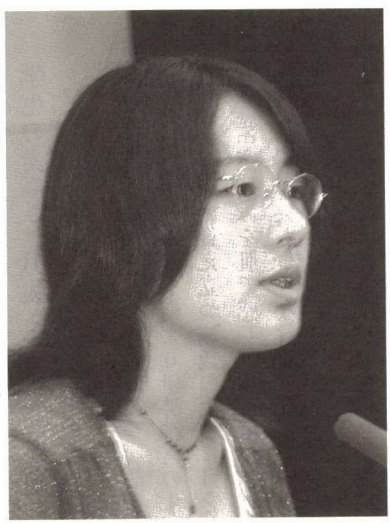
先祖とのつながりは本来みんなが持っているもの

（福岡教育大学　教　二年　平賀初枝）

伊勢神宮がなくなるのは嫌だと強く思ったことが心の中に残っています。二十年ごとに必ず建て替え、先祖とのつながりを感じます。これは私だけが持っている感情や求めている感情ではなく、本来みんなが持っているものなのだという確信があります。しかし、みんな本当は求めていても、日本の美しさが伝わっていないから素直に求められないのだと感じました。

私はこの合宿教室に、大学後期の具体的な目標を求めてき





参加者による全体感想自由発表。本合宿で得られた思ひを皆の前で次々に語る参加者達。

ました。合宿に来て、聖徳太子がみんなと共にあろうとされたこと、小柳志乃夫先生の「共感」という言葉、岸本弘先生の「他と共なる生を求めて」というタイトルをお聴きして、私も日本みんなで一つになりたいと思っているのだということに気付きました。日本の美しさを私が伝えて共感してもらいたい、友の思いを共感できるまで偲びたい、そうしてみんなと共にありたいです。そういうあたたかい日本にしたいです。そのためにこれからはもっと日本の古典に触れ、日本の美しさをもっと吸い込みたいです。そして和歌（短歌）を詠み続け、友に伝わりやすい言葉、自分の思いそのままの言葉を持てるようになりたいです。私は本を読むのがあまり好きではなかったのですが、日本の美しさをもっと吸収し、友に感動を語ることができるように、一日最低三十分時間を見つけて本を読みます。

美しき日本の心を染み込ませ己に満たせて伝へゆきたし

相手を思いやり汲み取ろうとする心を体感した

（牧　美和子）

四度目の参加で学生班の班長に任命され全く新しい合宿を体験することになりました。今までは「まず自分自身の力をつける」ことを念頭に合宿に臨んでいたのですが、今回は「班のみんなはどう感じただろうか。深く学んでもらうにはどうしたらいいか」ということばかり考えていました。こういう心がけこそ私達日本人が受け継いできた「相手を思いやり汲み取ろうとする心」なのではないかと思います。最終的には班友の皆さんから和歌を贈られたり、短歌相互批評の喜びを班友が全体感想自由発表で述べてくれたりして、私の方が与えられたものが多かったと思います。十五班の麗しき皆さん、先生方、運営委員の皆様、どうも有り難うございました。

まごころを与へむとして受け取りて皆に感謝す新しき夏

第二十一班―男子社会人―

学生の素直さ、力強さ、信念に感動した

（日本植生㈱　日笠　健）

合宿で体験したすばらしい感動を二つ。講義の内容がすばらしい事は勿論でしたが、何より伊勢神宮のすばらしさに感動しました。境内に聳え立つ無数の大木に目を奪われ、その幹に触り歴史の深みを肌で感じ、御正宮の神々しさに見とれ、心の故郷に帰って来たような言葉にならないすばらしい感動を受けました。

そしてもう一つは、若き学生のすばらしさ。直に接する機会はなかったのですが、擦れ違い様に気持ち良く挨拶してくれたり、他人のスリッパを綺麗に並べたり、最後の感想発表

では思わず涙が出そうになる程の素直さ、力強さ、信念に感動を受けました。自分もこの若き学生達に負けないよう、初心に戻り、力強い信念を持ち続け精進して行こうと改めて思いました。有難うございました。

学生の若き想（ちから）に感動し初心に返り精神（しせい）を正す

私の財産となりました

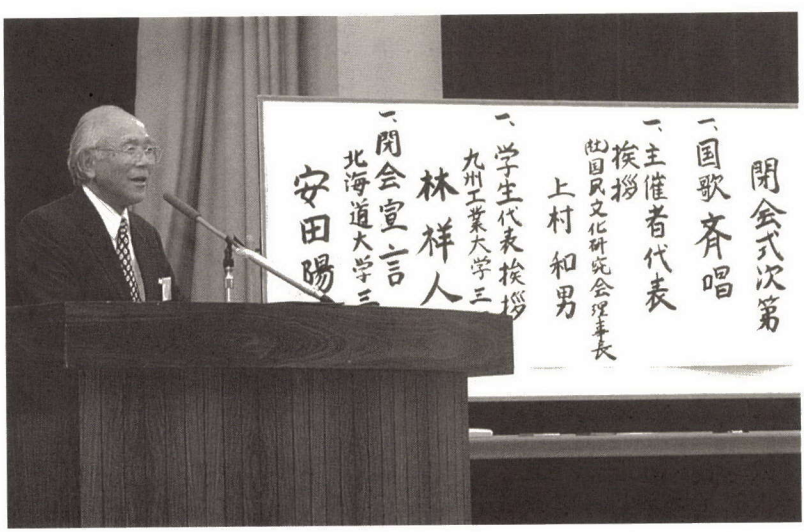
（㈶中村学園　岡本健人）

第五十回合宿教室へ参加させていただき感謝の気持ちでいっぱいです。私は社会人一年目で班も社会人の班に入れていただき講義の先生のお話を聞いて学んだことはもちろんのこと、班別研修をはじめとする日常生活においても同じ班の社会人の先輩方といろいろなお話ができ、また、私の疑問点や普段の仕事の相談にものっていただき、大変充実した四日間となりました。

また、日本について、皇室・天皇陛下の事を深く考える機会に出逢い、また、今の自分の考えがわかったことが今の私の財産となりました。日本の中心とも言える伊勢の地に来られたこと、何よりこの雰囲気を味わえた事がこれからの人生において大きな出来事になったと思います。

伊勢の地へ私の心おいていきまたいつの日かこの地へ参る

カメラ・レポート25



閉会式。主催者を代表して㈳国民文化研究会理事長　上村和男先生は「若い世代が育たなければ国は滅びていく。若い人はもっと前向きに学び国のために働く意欲を燃え立たせて欲しい。言ふべきは言ふ、若者らしく素直にまっとうに進んでいかうではないか」と呼びかけられた。

自分の確かな意見を持たなければ

（㈳福岡県中小企業経営者協会　浦脇慶祐）

合宿教室については、勤務先の紹介により参加をさせて頂きましたが、「日本」について知らないことが多く良い勉強の機会となりました。五十回を数える由緒ある合宿を終える今、更に知識を深め（日本を知り）、自分で考え、自分の確かな意見を持たなければと強く感じます。

今回初めて伊勢神宮を参拝致しましたが、悠久の歴史を重ねて来たその姿はこれまで受けたことがない神々しさを感じるものでありました。

今後、人生の中で多くのことを経験し、自分自身を高めたうえで、いつの日か、伊勢の地を再び訪れたいと思っております。

このような場を与えて頂き、ありがとうございました。

合宿教室の最後に
全て終へ学びし事を糧にして心新たに明日を歩かむ

私にも神話が受け継がれてゐることを実感

（㈱ステイタス　竹入雄二）

私がこの合宿に参加した動機は、ひとへに短歌を学びたい其れのみでした。故に思想や宗教、其れ以上のものに就いてはあまり関心はありませんでした。ところが、最終日の占部賢志先生の講義等により少し考へが変はりました。短歌等の文化、文学と日本の歴史は切り離せないものだと、そして日本は良くも悪くも神道が連綿と歴史や伝統を紡ぎ、今の日本人を創り上げたからです。私の政治的スタンスはもう二十年以上「中道右より」故に其のスタンスが大きく変はることは考へにくいですが、日本人の根底に神話といふアイデンティティーが横たはり、私にも其れが受け継がれてゐるといふのは凄く実感しました。バランス感覚をもって神道を学び、文学と歴史と宗教を踏まへたものを次代に伝へようと改めて感じてをります。また数年後には、もう一度参加するのも良いかと思ひました。

伊勢の地を離れる時ぞ今まさにくいなき想ひ出しきらむかな

新たな一歩を踏み出そう

（㈱ワイドレジャー　押川　真）

合宿教室に参加させて頂き学んだ事は、もっと母国日本について勉強する必要があるという点です。合宿で体験した事、又学んだ事殆どが知らなかった事で、為になるなと思う反面恥しい思い、自分はなんて無知なんだという思いもありました。

合宿が終っても勉強を続け、心豊かな日本人になれればと思います。現代社会にどっぷりとつかってしまった自分自身を救いたいです。

又、年代世代を超えた新たな友を得る事ができました。この合宿で得た事は何事にも替え難いものです。人生において新たな一歩を踏み出す事ができました。合宿に関られた人、全てに感謝の気持ちでいっぱいです。

お伊勢から新たな一歩踏み出せば先に見ゆるは日本の心

今後の自分の心の持ち様だ

（㈳福岡県中小企業経営者協会　古屋憲一）

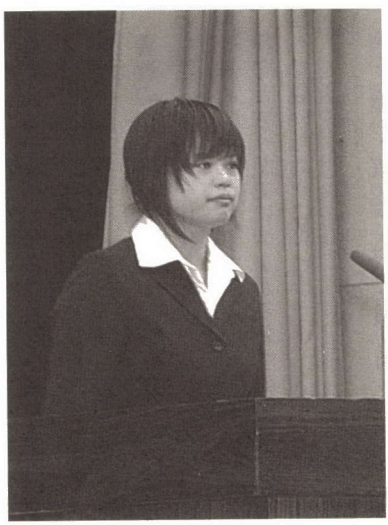
第五十回目の記念すべき合宿教室に参加させていただきありがとうございました。

「理解できた事、できなかった事」「思いを感じられた事、感じられなかった事」等々色々な事を体験させて頂き、非常に有意義な日々が送れたように思います。

果して自分が今後「美しい日本語」を話す事ができるか、「目に見えないもの」を感じる事ができるかは、今後の自分の心の持ち様だと思いますが、少なくとも合宿に来る前より一歩前に進めたように思われますので、これを二歩、三歩と足が運べるように日々勉強を重ねたいと思います。

思ひとは造るのではなく湧きいづるもの短歌の心少し触れたり

カメラ・レポート26



学生を代表して、九州工業大学三年　林祥人君が「日常の生活に戻ってからも勉強を続けることで合宿で学んだことを生かしていきたい」と今後の勉学の抱負を語り、北海道大学三年　安田陽子さんが閉会宣言を行って、第五十回全国学生青年合宿教室の全日程を終了した。

人の思ひに触れる学問を

（ハローワーク福岡南　古川広治）

班長を拝命しましたが、皆のお役に立てず申し訳なく思ひます。

学問をすると言ふことは、思想や歴史を学ぶ、世のため、国のためにだけするものではないと思ひます。自分の家庭や仕事の問題を解決するために、より良く生きるために学ぶものでもあると思ひます。私は、まづは自分のために学んでゐる者です。心を開いて、人の思ひに触れる学問をして参りませう。

合宿で学んだことを手帳に書いて、忘れないやうに、今後の生活に生かして参りたいと思ひます。

運営に携われたすべての方々に感謝いたします。本当にありがたうございました。

御手洗場にて手を清めをればかたはらに寺尾さんがゐるやうに思へうれしき

伊勢神宮の御存在、日本の素晴らしさに感謝

（伊佐ホームズ㈱　伊佐　裕）

今年の合宿は、学生の参加者の増加とともに、講義に向う姿勢に活気が感ぜられ、主催者の思いが伝わって行くように思えました。又、御高齢の方々の御熱心さには励まされる思いでした。

伊勢神宮の早朝参拝は、心身が清められ、本当にこの聖地が存在する日本の素晴らしさに感謝します。遠き祖先と出会うようであり、私の心の奥にあるものに触れるようでもありました。

講義の中では、合宿導入講義を担当の布瀬雅義先生の日常の生活と学問が一体化した中からのお話は、学生の方々に理解出来たことと思います。

伊勢と言う歴史につながる地での開催は大きな力を我々に与えて戴いたように思います。

一ヶ月の入院生活を経て参加せし友人の話を聞きて
病おし集ひし友の御心はいかばかりかと胸痛みぬる

第二十二班―男子社会人―

様々な出会いに感謝します

（㈱ビッグ・エー　菊地隆昭）

私は今回の合宿教室で初めて伊勢にきました。合宿での講義の中で、現在の日本は見えるもののみに目を向け、見えないものをなしとする唯物思想が強く、目に見えない信仰が衰退してしまっているとお聞きしましたが、正直な所目に見えない信仰というものがよく分かっていませんでした。

しかし実際に伊勢神宮に参拝してみますと、それまでもっ

ていた大きくて古い建物がある場所という想像が全くの偽りであり、本物は二十年ごとに全く同じ建物を建て直すといった長い歴史に支えられた心の聖域であると感じました。

また今回の合宿教室では班別行動ということで、普段はお話をできないような方々と行動を共にし語り合うことによって、自分の視野や考え方が広がったと思います。

この合宿での様々な出会いに感謝します。

新しく出会ひし友との語らひが自分自身の糧となりえき

やり直す力が湧いてきました

（北九州市立飛幡中学校　森山秀孝）

記念すべき第五十回合宿教室、しかも神聖なる伊勢の地での開催、誠に慶賀に耐えません。私にとりましては、悲願の初参加の成就ということで感慨も一入です。実は大学を卒業し教職に就いたのが昭和五十一年です。当時八幡の地では岳父（当時は我が師）が「八幡師友会（全国師友協会）」の世話人をしており、その関係で、安岡先生を始め、山田輝彦先生や小柳陽太郎先生に直接指導を受けることが度々ありました。その過程でこの合宿のことも知りました。しかし当初は学生のみの合宿と早合点してしまい、社会人も参加できると知ったのはかなり経ってからです。後悔しています。それ以来何とか参加をと考えましたが、今回まで都合がつきませんでした。大変残念なことでした。しかも娘が昨年参加致しま

1班

2班

3班

班別集合写真。1～3班

して、もうたまらない思いにかられました。今はただただ満足の思いで一杯です。これ程真剣に勉強したのは、全国師友協会の教学研修大会（於日光田母澤会館）以来です。今回この合宿を了え、感じたことは、これまで勉強してきたこと（実践）は間違いではなかったと確信はできました。しかし、私の勉強は実に薄っぺらなものであることがよくわかりました。原点回帰で臨んだ合宿です。またやり直す力が湧いてきました。すべてに感謝申し上げます。

講義受け胸の打たるることばかり意を強くして更に励まむ

日の本の精神伝ふる国民は短歌の道を深くきはめむ

我が想ひ直に語れる友に会ひ晴れ晴れとして帰路につくなり

日本語の奥深さを実感した

（㈳福岡県中小企業経営者協会　廣末好信）

正直な所、自ら積極的に合宿へ参加した訳ではなかったが、三泊四日という長いようで短い期間に数多くの事を勉強する事が出来、自分にとっては非常に有意義な合宿となった。特に初めて合う職種や年齢の異なる班員の方達にはお世話になり、班別研修等で様々な意見交換が出来、楽しかった。今後共親交を深めて行ければと思う。

先生方の講義で一番心に残ったのは、長谷川三千子先生の「日本人の思想の源」である。日本語の「ことば」の持つ奥深さ、大切さを実感させられた。私は自分自身の思想の源は「ふるさと熊本」であり、三十数年育ててくれた両親の教えに在ると思う。私には一歳一ヶ月の息子がおり、我が家の「宝物」である。彼に正しい日本語で語りかけ、私が両親から受けた愛情以上に、一緒に笑い、泣き、考えて生きたい。

最後にこの合宿に参加させて下さいました当協会小早川会長と運営して頂いた国文研事務局の皆様にお礼を述べたいと思います。本当にありがとうございました。

初めての知りえし友と語り合ふ楽しく時を忘れるほどに

充実した日々

（公務員　村山健司）

「充実した日々」まさにこの言葉が相応しい合宿教室の日々だった。昨年上司の進めで見学者として一泊二日という短い期間参加し、「是非来年は全部参加するぞ」と思ったものの、勤務の都合により残り一日を残し帰路につくのは悔しい限りである。しかしながら、今後自らが努力研鑽しなければならないこと、例えば正しい歴史認識や世界の中での日本のあり方などを痛烈に感じた。そして班別研修で語り合った内容は必ずや自分の宝になると確信している。また日本人の心のふるさとである伊勢神宮を参拝でき、改めて日本の歴史の凛凛とした、そして厳かな空間をこの身で感じることができ、この思いを誰かに伝え教えることも私が今後やらねばならない一つであると考えている。最後に「己を治め、彼を知

り、変に応ず」吉田松陰先生の言葉を噛みくだき教えて下さった太田文雄先生の講義を胸に刻み一所懸命頑張る所存である。

自衛官として故郷福岡県北九州市戸畑祇園提灯大山笠を思ひて

夏の夜に美しく灯る提灯大山笠故郷の思ひ一層積もる

この祭りこの国を守るため今こそ立てよ燃える魂

愛娘を思ひて

健やかな娘の成長を妻と願ふ花の明きと優しき心のやうに

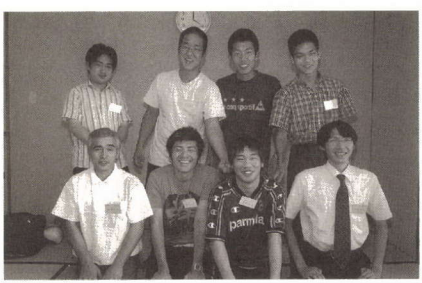
筋の通った真実を知ることができた

（㈱振興産業　山内健司）

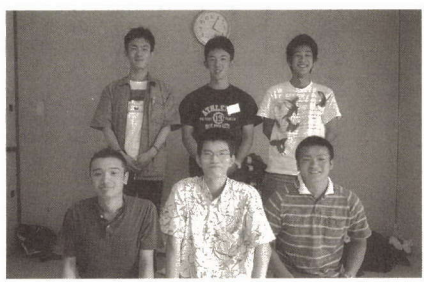
今回初めて合宿に参加させていただき、今まで報道等で聞いていた「教科書問題」や「靖国参拝」等について、筋の通った真実と言うものを知る事ができた。また、日本の歴史や考え方のすばらしさにも感動をおぼえた。この四日間で先生方から教えていただいた様々な事を、今後も勉強していき、昔のすばらしい日本人の心に近付けるよう努力したいと思います。

夜ふけて共に学びし友どちの熱き語りに眠気も忘るる

4班



5班



6班

班別集合写真。4～6班

勉強していきたい

（兵庫医科大学病院　末永浩一）

今回合宿に参加させて頂いて先生方の貴重なお話や班のメンバーとの交流ができ、本当によかったと思います。普段日本の文化や伝統に触れる機会が少なくなった上に、就職した後物事を深く考える事も少なくなり、視野もせまくなってきたと感じていました。そのような中で、良い機会だと思い応募させていただきました。社会で問題になっている様々な事に触れるたびに共感をもったり、逆に違和感を感じたりする事はありましたが、それは今考えると日本の歴史や伝統に照らし合わせ、無意識のうちに合致するのか、相容れないものなのかを判断した結果であったのかも知れないと思います。そうであれば、社会で起こる諸問題を考えるにあたり、日本の文化、歴史に対する教養を深める事は不可欠であり、正しい国柄、伝統に対する認識なき所に正しい判断はない、という事になります。社会の物事に対する評価は教養の結果であり、今回のこの合宿を機に少しずつ勉強して行きたいと思います。

友らとの別れが近づき合宿のまだ終はるなと心に叫ぶ

新たなる力を得た

（住電エレクトロニクス㈱　布瀬雅義）

三日間班付をさせていただき、班別研修でじっくり話しをしたり、実に久しぶりに黒上正一郎先生の御本の輪読ができて、やはり一人ではできない学問がこの合宿ではできると実感した。

また伊勢神宮の早朝参拝はすがすがしく心が洗はれる思ひであった。今回の合宿で得た新たなる力で、またこの一年頑張っていきたい。

合宿準備、運営に尽力いただいた方々、まことにありがたうございました。班の友人たちも、今回の合宿で学んだ事を、よく実生活の中で血肉としていっていただきたい。

大御歌よみまつりゆけばみ友らの心ひとつにすべられていく

代代を経て民のさいはひ祈りたまふすめろぎをあふぐ御国貴し

第二十三班―男子社会人―

和歌の美しさに初めてふれました

（伊佐ホームズ㈱　米屋方貴）

私は、今回初めて合宿に参加させて頂きました。私にとっては、この様な講義合宿は、学生時代をノンポリとして過ご

したせいか初めての経験です。多くの学生諸君が参加しているのを見て感慨深く思いました。

名講義を受け、私にとって特に印象深く感じたものを挙げますと、初日の導入講義における布瀬雅義先生の「自分の頭で考へ、自分の心で感じ、自分の言葉で語らう」、又、太田文雄先生の「治己、知彼、応変」、及び、山内健生先生の「日本の国柄」です。他の講義も、この研究会の底流に流れているものが何かを感じさせられ、日本人の源流を見直すと云う意味で、非常に有意義な時間を過ごさせて頂きました。又、私は技術屋で古典関係が苦手でいましたが、今回、和歌の美しさ、又、読み方によるその響きの美しさに初めてふれました。

何かまだ書きたりない様な気もしますが、この合宿は自分にとって、「日本人」を感じさせてくれた期間でした。

伝統を守りて研ぎし匠の技古式を伝へる式年遷宮

時代の流れの真中に身を置くこと

（㈳福岡県中小企業経営者協会　吉田　博）

第五十回という記念すべき合宿に、また、伊勢という地において参加できた事をありがたく思います。

最後の講義であったこともありますが、占部賢志先生の言葉「物事を客観視することにより判った錯覚に陥りやすい。時代の流れの真中に身を置くこと」に感銘を受けました。こ

7班

8班

11班

12班

班別集合写真。7、8、11、12班

れは私のこれまでの人生「私になにが出来る」を反省すると共に「私がやらなければ」という気付きを起こさせました。

また私が「素直に講義が頭に入らない」時に、助けて下さった班長を始め班員の方々に感謝いたしております。この研修の前に聴いていた三林浩行先生の寺子屋での言葉「信じる事」、まさに班員の方々の気持ちを信じ、その助けに身を投じる事により後半の講義の受け止め方に変化が生まれました。

今後も益々国文研合宿が盛会になります事を祈念いたします。ありがとうございました。

機会得て感銘受けし師の言葉活かすも放るも己が選ぶ道

「玉の緒」をつないでいきたい

（同朋天神保育園　武重大輔）

昨年から二回目の合宿参加させて頂きました。

今回学ばせて頂いたのは、「玉の緒」です。日本にとっては「皇室」が、「日本語」にとっては「てにをは」が「玉の緒」だと教えて下さいました。

私は昼は保育園で、夜は塾講師として働いております。そういった環境で子供達を見つめていると、何かが違っていると思う事があります。「玉の緒」は「皇室」と「てにをは」だけではなく、我々の成長としての「玉」もあると考えるなら、やはり教育者として、その「玉」をしっかりつないでいかなければならない、もし学校でできないなら、なおさら塾でやっていく必要があると思えてなりません。

最後に、合宿において貴重な御講話下さいました諸先生方、志同じくする方々、そしてそういった方々の「玉の緒」であるこの合宿を運営された方々、また、これまで運営されてきた方々に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

古来より伝へられこし玉の緒をはたつなぎゆけ合宿教室

すばらしい日本を再認識させてくれた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　渕上勇輝）

今回、第五十回という記念すべき年に、「日本人の心のふるさと」伊勢神宮での合宿に参加することができ、本当に良かったと思う。それぞれの先生方の講義を通じての日本に対する熱き想いに触れ、歴史・文化を学ぶことにより、自分の日本に対する想い、愛国心を強く感じることができた。また、毎朝内宮参拝をしたが、一日一日感じるものが違い、想いは強くなるばかりであった。

この貴重な経験をここで終わらせることなく、これからも研鑽を重ね、もっと深く自国のことを知っていきたいと思う。そしてそれを自分の中にとどめず、少しでも多くの人に伝えたい。

最後に、「素晴らしい国日本」を改めて認識させてくれたこの合宿に感謝したい。

一番心に残ったのは短歌の創作でした

（㈱ビッグ・エー　篠本和哉）

この合宿では多くの諸先生方のありがたい講義をいただき、自己の知識を増やすことができ、また、今まで経験したことのない短歌を詠むということもさせていただきました。日本人の心のふるさと伊勢の地で、記念すべき五十回目の合宿教室に参加できたことをうれしく思います。

この合宿教室で、一番心に残ったのが、短歌の創作でした。今まで全く経験もなく、非常に不安でしたが、伊勢神宮を参拝した時のことを素直に歌に詠んでみると、思っていたより簡単に完成しました。班別相互批評で、いろいろなアドバイスをいただき、よりよいものができあがりました。

諸先生方の講義を拝聴して感じたことは、今の日本には多くの問題点があるということです。すべての原点は教育であると思います。今の学校教育を変えていかなくてはいけないと改めて感じました。教えるべきことを教えていないのです。これでは、日本の国際競争力も下がる一方になってしまいます。

この三泊四日は、とても有意義なものとなりました。これからも多くの若い日本人にこの合宿教室に参加して、学んでいただきたいと思います。ありがとうございました。

13班

14班

15班

班別集合写真。13～15班

早朝参拝をして
五十鈴川清き流れは美しく手を入れてみて暑さ忘るる

神宮の言い表す事のできないすばらしさ

（㈱ワイドレジャー　阿比留治郎）

今回初めて全国学生青年合宿教室に参加させて頂きました。社会人二年目の未だ何の知識も無い私は、当初期待感というよりは不安感で一杯でした。しかし、神宮会館へ到着し、学生達の挨拶でそんな不安感は消しさられました。希望に満ちた顔つきや、社会に入り忘れていた何かを合宿が始まる前から教えられたのです。

合宿においての様々な講義・講話は勉強になったというよりは、自分の無知さを知らされたという方が正直な感想です。日本人である事、言葉の重要性、短歌の心など、今までの人生で考えもしなかった事を考えさせられた気がします。又、伊勢という初めての地にも感動し、神宮の言い表す事の出来ないすばらしさなど、全てにおいて初体験でありました。これからこの合宿で得たものをいかし、少しでも知識を持った上で、またこの伊勢に参りたいと思っております。今回は誠にありがとうございました。

早朝参拝にて
朝日射す並木参道歩きゆき心に響く玉砂利の音

日本のいのちに触れた思ひがした

（㈱日本教文社　坂本芳明）

今回の合宿教室では、伊勢神宮の歴史を学び、又、何度も参拝をさせていただき、日本のいのちの核心に触れたやうな思ひがしました。今もこの伊勢の地には、日本のいのちが漲っており、現代の日本人も、このいのちに触れさへすれば、必ず本来の日本人に帰ることができると思ひました。

又、この伊勢の式年遷宮をはじめとして、日本には、先人たちの祈りの蓄積ともいふべき、様々な伝統文化が満ちており、それを大切にすることによって、現代の日本人も末永く幸せに生きることができるのだと思ひました。

皇室を中心にいただいて、営々と地道な努力を積み重ねてきた祖先の生き方に学ばねばならぬと思ひました。

最後に、班員の皆様、ありがとうございました。

神代よりつながるいのち湧きいづる伊勢の宮居に参るよろこび

第二十四班―男子社会人―

三種の神器について勉強したい

（元新潟工科大学教授　大岡　弘）

今回の合宿は、「三種の神器」の意味を考へる上でよい契

機となった。本居宣長は、三種の神器のうちで最も尊いものは、天照大御神の御霊代の宝鏡であると述べてゐる。その宝鏡が奉斎され、毎日、丁重にお祀りがなされてゐるここ神宮の内宮に、朝二度、班友とお参りすることが出来た。

宮中では、この宝鏡の分け御霊が御鎮座する賢所を中央に、西に皇霊殿、東に神殿が配され、天皇陛下が御親ら、皇室祭儀を御厳修になられてゐると聞く。

皇統の正統性を保障する「三種の神器」と「皇室祭祀」について、今後勉強してゆきたい。

新たなる力湧きくも皇国のみまつりの道学びてゆかむ

更に見識を深めていきたい

（㈳福岡県中小企業経営者協会　行弘賢治）

私が、今回この合宿に参加させていただいた動機の一つは、「我が国日本についてみつめ直す」ということでしたが、多くの講演、並びに短歌創作、批評を通し、充分目標達成が出来ました。本当にありがとうございました。いかに自分が「日本」について知らないかを、改めて実感しましたし、また、今後、更に見識を深めていきたいと強く感じました。この合宿に参加しなければ、この様な思いは抱くことがなかったと思います。今の自分は、大きな困難なくこの国で生きているのですが、先人の方々の多くの苦労の上にこの生活があるということも、改めて確認出来、今迄以上に感謝の気持ちを持って日々精一杯精進していかなければいけないと思いました。

伊勢の地で祖国と友の大切さを感じけるかな班友と学びて

歴史・伝統・文化の根源に触れた

（筑紫野光が丘郵便局　森田邦義）

国文研五十回合宿教室に参加して、今迄封印されていた日本の歴史、伝統、文化の根源に触れることができました。一歩一歩自分の足で深めたいと存じます。

この合宿で頂いたこの感動の輪を広げて自立した日本をめざす同志を……と心に強く誓うものです。講師の皆様、運営委員の皆様、厚く御礼申し上げます。

伊勢の地に集ふ若人らと御製読み心かよひてうれしかりけり

「一葉落ちて……」、印象に残った言葉

（㈱ワイドレジャー　石丸友和）

講師の先生の大変勉強になるお話もさる事ながら、班別研修での班員の皆様の意見をお伺いすることができ、多くの知識を得、又、自分の知識のなさを痛感致しました。

短歌創作に至っては、中学の国語の授業以来の事で不安に満ちておりました。しかし、初めて訪れた伊勢神宮で創作意欲もかきたてられ、私としては納得するものができ、又、宝

辺先生より御指導頂きまして、より良い歌となりました。
印象に残りました言葉は、太田文雄先生のお話の中に御座いました「一葉落ちて天下の秋を知る」であり、この様な感性と能力は私の勤めている業界で必要とされます。この一文を胸に秘め、今後仕事に取り組んでいきたいと思っております。

合宿の歌稿手に取りみ友らの心の内に共感したり

「己れを治める」ことの大事さ

（㈱ビッグ・エー　及川　洋）

短歌創作という初めての経験、伊勢神宮参拝、講義等を通し、日頃仕事に追われて、自己を磨くことがおろそかになっていたことに気づかされました。防衛大学校教授・太田文雄先生の講義の題にありました、「治レ己、知レ彼、応レ変」の「己れを治める」ことの大事さを、今更ながら身に沁みて感じ、とても有意義な合宿でした。今後は、寸暇を見つけ自己を研鑽し、「一日本人」として役に立てるような人間になれるよう頑張るつもりです。また、この志を継続する意志を持って生活していきます。

意志持ちて研鑽しゆくことこそが己れ治むる出発点なり

短歌の美しさを学んだ

（ウェブテクノロジー㈱　松江正幸）

前回の参加の時は知識の吸収がほとんどでしたが、今回は短歌などを通じて、言の葉と日本の国の美しさを知りました。又、神楽やその後のお話等を通じて、神職様の御心に深く感じるものがありました。明治天皇の御製「よきをとりあしきをすてて外国（とつくに）におとらぬ国となすよしもがな」の「よきをとりあしきをすてて」の部分を大切にしてゆこうと思いました。

伊勢神宮は三回目ですが、駅を出た時の町全体の神々しさは感じられても、出雲大社などのように鳥居をくぐったあとのすさまじい神々しさがなく、物足りない感じがしていました。松浦光修先生の御講義をお聞きして、日教組による「天の岩戸」状態だというお言葉に、「なるほど」と納得した次第です。

古ゆ伝はり来たる言の葉を受け継ぎ我も歌詠みゆかむ

第二十五班―男子社会人―

先生方の気概に胸を打たれた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　横野一郎）

初めて参加した合宿であるが、非常に勉強になり、又、多

くの感銘を受けた四日間であった。日本という国を知る上で、一度は伊勢神宮に行ってみたいと常々思っていたので、良い機会に恵まれた。講師の先生方は、どなたもエネルギーに満ち溢れた方ばかりで、観客ではなくプレイヤーとして現実社会と格闘されている様子が、立居振舞や言葉の一つ一つに感じとられて、その気概に胸を打たれた。特に岸本弘先生のお話ぶりには、本当に「好きな事を伝えたい」という気持がにじみ出ていて、こんな先生から習うことのできる生徒は幸せだなと思った。又、先生が紹介された「『太子の御本』輪読の手引き」での維摩経義疏（序説）の「國家の事業を煩となす。」という部分には、太子のポピュリズムに堕すことなく政治の本質を極めようとする態度が表れている様に思えた。

感銘を受けて過ごせし四日間仕事の悩みも全て忘れて

自らの頭で答えを見つけていきたい

（日本植生㈱　清板大輔）

今回私は、会社の研修の一環として参加させて頂きました。具体的内容すら把握せぬ状況での参加であり、道中不安を感じておりましたが、良い班員に恵まれ楽しい時間を過ごせたことを幸福に思います。

内宮への早朝参拝、外宮での奉納神楽の見学、短歌の創作及び相互批評等、普段なかなか出来ない貴重な体験を初め、合宿で学んだ多くの事は、未だ自分の血肉にはなっていないかもしれませんが、今後の人生に必ず役に立つものだと感じております。今後は、合宿で得た知識を整理し、自らの頭でしっかり考えて、答えを一つ一つ見つけていきたい。それでも壁にぶつかった時には、改めて、自発的に合宿の門をたたきたい。

四日間多くのことを学びけり身にはならねど指標を得たり

自分の中の殻が少し割れた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　二宮裕一郎）

この合宿に参加し、プログラムをこなしていく内に、高校、大学と生活を共にした仲間の顔が、次々に浮かんできた。その頃の情熱を思い出させてくれた先生方の話、そして、それは学生のひたむきに学ぼうとする姿勢によるものであった。社会人になり二年が経とうとしているが、この「情熱」や「ひたむきさ」などが薄れてきているように感じていた。それは、どこかに大人という理想像を間違えていたのだと思う。背伸びをして話をしたり、人の真似ばかりしていた。しかし今回の合宿で、自分の中の殻が少し割れ、「自分の頭で考え、自分の心で感じ、自分の言葉で語ろう」という人間に近づけるような気がした。第五十回という記念すべき合宿に参加できたことを、本当に良かったと思う。

伝へたき己が思ひを「短歌」にて歌にはすれど言の葉足らず

班友と過ごしし日々の財産は明日の己の糧となるらむ

確実に成長している事を実感できた

（福岡県警　川下継範）

前回の阿蘇と今回の伊勢とで、計二回合宿に参加させて頂きました。この合宿では数多くのことを学び、そしてこれから色々な事を学んで行きたいという想いを抱かせて頂きました。しかし、その数の多さに今までは、どこから手をつけてよいかわからない状態でしたが、岸本弘先生のお話から、自分の好きな所から勉強を始めればよいことを教えられました。班別研修では、物事を考える際に、ただ考えるのではなく、その当事者になったつもりで考えなければならないことを教えて頂きました。当然の事かもしれませんが、当事者になって考えることの大切さ、又、それがこれから生きていく上でとても大切であることを知ることが出来、嬉しく思います。一歩一歩確実に自分が成長していることを実感できました。

合宿に来るたび思ふ合宿こそが我が成長出来る場所なりと

今後一層学びを深めていきたい

（三共㈱　武井紀英）

合宿教室との縁は、布瀬雅義先生が発行されている「国際派日本人養成講座」というメールマガジンでの案内であった。八月上旬、内容を見て即座に参加を決定し、この日を楽しみにしてきた。そもそも私が、日本人の伝統や誇り、歴史に着目し勉強し始めたキッカケは、国内・海外での多くの異文化との触れ合いに端を発する。一言で言えば、「今の日本人は、なめられている。」ことへの危機感であった。自虐史観、自発的・積極的な精神的植民地国家への邁進が、今の日本人の自信のなさに深く起因していることを知り始めたときに、疑問が浮かんだ。日本人の持つ伝統文化は、他民族のそれに比較して、誇り得るに十分なものなのだろうか。

本合宿は、この疑問に対して多面的な観点から十分過ぎるほど答えて下さったと思う。特に、日本人のアイデンティティーとしての誇りの原点が、決して明治維新以降の近代国家辺りから生じてきたものではなくて、実に神話の時代から連綿と、皇室と共に受け継がれてきたことへの気付き、又千三百年も前から現在まで伝えられている日本人の心のふるさとであるこの伊勢の地に来られたことに対し、又講師陣の熱弁に先生や同志と共に学べたことに対し、非常に感激すると同時に、心より頭の下がる思いです。今後一層学びを深めることをここに誓います。

各講師のお話を聞きて
会場にみなぎる緊張ここちよく熱弁聞きて血潮湧き立つ

新しい友との交流を深めていきたい

（元日産自動車㈱　古川　修）

最終日の占部賢志先生の講義に、改めて、心うたれた。昨

今の我が国の状況が、「大正デモクラシー」と言はれた大正から昭和への混迷の時代に酷似してゐる様な思ひがして、氏の指摘する〝課題〟が痛い程、心に迫ってくるのを覚えた。

沼波武夫先生から黒上正一郎先生へと継承されていった学問の道統に、少しでも連なることができればと、己が身を振り返り、決意を新たにするのみである。先づ、己自身の学問に対する姿勢を、更に更に高め、合宿で出逢った新しい友どちとの交流を深めていきたい。

沼波先生の遺歌を読みて

ノート買ふ銭無き子らをかかへつも道求め生きしまごころかしこし

國思ふまことのこころの迫り来て師の言の葉のかなしかりけり

第二十六班―男子社会人―

自分のこととして考え感じ語ること

（日本植生㈱　川田大輔）

この合宿に参加するまで自分は日本という国に対する漠然とした不安を抱えていました。モラルの低下や犯罪の増加、ニートの増加、人工の減少、外国人労働者の増加などがそれです。また、中国、韓国との歴史問題、靖国参拝について是か非かなどの議論が世論でさかんに行われる中で、何が良いのかについて自分の考えがでてきませんでした。これは社会人として非常に恥ずかしい事だと感じました。まさに、布瀬雅義先生の言われた、「自分の頭で（自分の事として）考え、自分の心で感じ、（自分の事として）自分の言葉で語る」ことができていなかったのです。国を想う、歴史を考える、外国との関係を考えるなどあらゆる事を考える時に、布瀬先生の教えを思い出し実践していきたいです。

神宮に神の息吹が満ち満ちて我が魂も清められたり

短歌の素晴しさに感動した

（㈱ビジネスコンサルタント　北島治樹）

私は和歌を人生の中心に据えていきたいと思い再度この合宿に参加させて頂きました。この美しい伊勢の地で歌を詠み、班員の方々と相互批評を行い、講義を拝聴し、歌の素晴しさに改めて感動しました。家に戻ってからも「しきしまの道」を歩んでいくことをとにかく「実践」することで、日本人としての生き方を確立していきます。

しきしまの道を継がむとこころざし言の葉つむぎ生をうたひあぐ

同じ思いの方々と語り合えた

（㈳福岡県中小企業経営者協会　篠原寛治）

学生に交じっての研修は、自分の学生時代を思い出し、とても懐かしく感じると共に、新鮮な気持ちで勉強できました。

この機会を得たことにも感謝しています。社会人としての立場では「企業論」「企業人論」等も少しお聴きしたかった感も有りますが、神話の大切さや天皇の存在意義、沼波瓊音氏のお話は、これからの私の人生観、職業観に大きな影響を与えるものでした。また、昨今の日本の政治、企業の乱れ、青少年の犯罪の凶悪化、外国人犯罪の増加、学級崩壊などなど、言われ続けて久しくなりますが、そんな日本の現状を憂い、将来に不安を感じ、それでも非力ながらも良くしていきたい、そんな自分の気持ちと同じ想いを持った方々と語り合えたことは何よりも収穫でした。

寝食を共に過ごした仲間らとこれから先も交友深めむ
若人の熱き志がたのもしく共に創らん日本の将来
玉砂利を皆踏む音に呼応して杜の蝉がかしましく鳴く

勇気をもって正しいことを伝えていきたい

（㈱東京白ゆり会　堤　祐一郎）

早朝、伊勢神宮を参拝し、ゴミ一つない鎮守の社、清らかな五十鈴川、風にはためく日の丸の国旗を見た時に本当にこの国に生まれて有り難いと思いました。同時にこの神聖なる地をもつこの国を守っていかなくてはならないと再認識しました。日本の危機的状況の中で、どのように日本の未来を守っていくかが重要な課題です。私の班ではそれぞれ職業は違いますが同じ志をもった方々で様々な情報交換をし、大変有り難い環境でありました。松浦光修先生の講義の中で印象に残ったのですが、「自分の国のために何ができるか、正しいと思って正しいことができるか」という言葉がございました。自分も勇気をもって正しいことを伝えていくことを実践し、微力ながらも国益につながっていければと思っております。

伊勢の同志と寝食共に過ごしたれば大和を守る武士となり

学問的・人生直結的な研修であつた

（中島法律事務所　中島繁樹）

多数の参加者を得て、充実した三泊四日の合宿を実施することができたことを大変うれしく思ひます。八月下旬に三泊四日で合宿を行ったことは成功でした。

世間には日本思想の勉強を目的とする研修合宿はいくつも存在するやうですが、この国文研合宿は学問的であること、人生直結的であることにおいて、他にぬきんでてゐると思ひます。国文研合宿の継続が強く望まれます。

松浦光修先生は論旨明快で力のこもった講義をされました。占部賢志先生は正確に史実を指摘しつつ感動的な話をされました。早朝起床といふ強行日程も結果としては問題なしでした。参加者の多くが生き生きと早朝参拝に出向いてゐたことは素晴らしいことでした。

優れたる歌は生まれぬ班友が心ひとつに知恵出し行けば

同じ思いの仲間に出会った

（公務員　村上秀喜）

今回、この合宿に初めて参加させて戴き今まで知ることのなかった大切なお話しを数々拝聴し体験できたことを大変幸せに思います。当初この合宿に参加するまでは不安でいっぱいでしたが、班員をはじめとする周りの仲間が同じ思いを有していたことに強い喜びを覚え、すぐにうちとけることができ大変有意義な合宿とすることができました。

本合宿では恥ずべき程の無知さと信念のなさを痛感致しました。これからはそれらの足りない部分を補うべく日々精進していきたいと思います。また、この神宮会館は合宿での唯一の楽しみとも言える食事もおいしく、風呂もきれいで、そして何より全館クーラー完備で毎日の勉学に専念できる環境であったことに感謝しております。

合宿に参加して
この伊勢に素晴らしき同志に出逢ひたるこの良き縁（えにし）をありがたく思ふ
伊勢神宮で神棚を購入して
この伊勢で正しき心学びたり明日より妻子と神に拝まむ

第二十七班―男子社会人―

伊勢における五十回節目の合宿の意義を思う

（公務員　小川揚司）

第一夜、神話と神宮に関する松浦光修先生の講義を聴き、朝日の内宮、穏陽（おだひ）の外宮に参拝し、そして、日本の国柄に関する山内健生先生の講義で、歴代天皇の御敬神の御製の数々を拝し、最も純粋に神祇を敬信し祈りを深めてこられた日本人は上御一人に他ならないと云うことに思い至り、感慨一入（ひとしお）であった。

また、学生青年諸君が、屈託無く素直な表情で、実に様々な事柄に啓発され、各も各も感銘を語る言葉に耳を傾けながら、その瑞々（みずみず）しい感性を眩（まぶ）しく感じ、頼もしさを深くした。

黒上正一郎先生、小田村寅二郎先生達、諸先生・先輩が築き来られた道統に、この五十回の節目の伊勢での合宿で、皇祖神達、目に見えぬ祖国の神々の御啓導の下で生まれた新たな道標を加え、合宿が百回までも続くことを 頓（ひたぶる）に祈念するものである。

各も各も受けし感銘をひたすらに語る若きらの姿眩しく
五十度（いそたび）を経（ふ）る道統に神宮の加護被（かがふ）りぬ進めこの道

日本の心

（NPO法人観照会　河上　明）

日本の心を把握する方法として、御製を拝する。心に確と受け止める工夫を実行したい。この工夫こそが工夫の仕所と考える。

日本の心の源、みえない心、様々な申し様があるが、皇祖の心に摂せん。

三日月は正に天空星雲近し風日祈宮（かぜひのみのみや）吾れも鎮もる

所感二題

（マスターマネジメントコンサルタント　稲田健二）

伊勢合宿について

我が国の国柄の軸は天皇様のご存在であるが、皇祖天照大御神をお祭りする伊勢の地で、国文研第五十回合宿が行われたことは大変意義深いことであった。つまり、伊勢神宮は式年遷宮によって御社・御装束・神宝も太古のままを今に伝え、我が民族の生命の源泉であり、伝統文化の中心であることを実感できたからである。そして又、減少傾向にあるという「神宮大麻」の頒布数の回復に私もお役に立ちたい、と思った。

我が班について

なんと最高齢者は九十五歳。高齢化社会を象徴する班であったが、九十五歳の河上様―毎朝二時間の座禅を組まれ、ご自分に厳しい方であった―も全日程を通して、全員と行動を共にされたことに感服した。そして又、合宿の主旨に賛同する仲間であったので、高齢にも拘らず若い時と同じように、お互い心を開いて話し合うことができて、素晴らしい出会いを持ったことに感謝している。

宇治橋をわたりて玉砂利ふみゆけば霊気あらたか身のひきしまる

『自分の言葉で語る』ことの大切さ

（元㈱日立製作所　日髙廣人）

伊勢神宮、朝の陽の光に映える緑の森、五十鈴川の清流、そして杉の大木の立つ参道の玉砂利を蹈みつつ行けば、その奥に鎮まれる神殿の、質素ではあるがまぶしく感じたこの氣持ちは、胸の奥にたたみ込んで歸りたい。

合宿教室で講義をされた諸先生方のほとばしる情熱、これまた、頭の中だけでなく、胸の奥底にドンと入り込む。變らずに訴へ續けて來られた「日本の傳統・文化」の素晴らしさと、それを受けて次代へ傳へてゆく努力の大切さが、参加の回數を重ねる毎にひしひしと迫って來る。

ご講義の内容だけでなく、日頃流れる情報を『自分の頭で考へ、自分の心で感じ、そして自分の言葉で語る』ことの大切さを強調された「導入講義」は、絶えず念頭に置きたい。

伊勢神宮參拜の希望叶ひて
かねてよりお參りしたしと念じたる思ひ叶ひて心晴れたり
みどり深き伊勢の御社をろがみて國の源を見し思ひせり
「導入講義」をお聽きして
まごころと熱のこもれる思ひをば我が言の葉に載せて傳へん
寳邉正久先生のご講話をお聽きして
殘されしひとの書（ふみ）とはその人の聲と聽くべし心と知るべし

四十年ぶりに合宿に参加して

（㈲バントレーディング　森重忠正）

社会人になって始めての参加でした。寝食をともにしたことですっかり気持ちが落ち着き、学生時代の国文研の雰囲気を思い出しました。短歌の作成も大変負担になりました。ただ、言葉の一字一句を大切にすることの重要さを再認識しました。正しく使うかどうかで自分が思っていることと、人の受け取り方がまったく違ってくるのですから。それに気づかされたのは、長谷川三千子先生の紹介された「手爾葉大概抄」です。

玉砂利を踏んでお参りした、朝の参拝もすがすがしいものでした。千三百年前からの式年遷宮という儀式が執り行われてきたという伝統。それが今も続いているという歴史の連続性。面白いですね。少し突っ込んで勉強し、発言すればすぐ「お前は右翼か」で片付けようとし、そこで思考がストップする一部の風潮に負けてはいけない。

第二十八班―男子社会人―

異なる言語との遭遇

（㈱柴田　柴田悌輔）

長谷川三千子先生の講義に、深い感銘をうけました。思想といふものを表現するには、言語が必要であるといふ、餘りにも簡明な事實に、今更ながら氣がつきました。漢字といふ異國の文字を、日本人が共有出來る、文字體系（かなを含む）に變換させ、日本語を創り出した祖先の偉業に、改めて感謝したいと思ひます。意思、即ち思想を傳へる爲に、日本人は獨自な助詞（てにをは）といふものの活用を考へたといふ先生の指摘に、多くの示唆を與へられました。

ことの葉の玉のよそひはた、此ぬきつらぬるてにをはからなん

今、宣長の「詞の玉の緒」を改めて、讀みかへしてみたいと思ってゐます。

朝の集ひの折に

流れゆく雲はらふがごとく日の丸が空のたかみにはためきてあり
青空に翻りゆく日の丸の赤がひときは眼にしるく見ゆ

占部賢志先生の講義の続きを聞きたい

（産経新聞社　大内保治）

合宿教室への参加は今年で四回になります。従来は社会人短縮コースで二泊三日の参加でしたが、今回は全日程参加の為少々草臥れました。今後又短縮コースを復活させてください。長谷川先生を初めとする、講義の充実ぶりに感激しました。特に占部先生の講義は先生の熱情が、聞く者の心に響く様で、感激しました。後半の「東大法学部の歴史」については、国民文化講座ででも、続きを聞きたいと思います。

選挙告示を目前に控へ、西村眞悟、東祥三両先生に

いかならむ世にならうとてきみの務めは皇国の為にぞ励みあれかし

実際に聞く講義は迫力があった

（薬丸保樹）

私の人生観に大きな影響を与えてくれたのが、国文研です。会社を退職して以来、今まで頂いた国文研の書籍を読む事を日課としていましたが、実際に講義を聴くと、書物で読むのとは迫力が違いました。毎年「日本への回帰」を読み、講義の内容を理解したつもりでいましたが、やはり実際に聴かないと実感が湧かないものです。大阪に帰りましたら、合宿での資料の整理を楽しみながら致します。「名歌でたどる日本の心」も早く読みたいと思います。

集ひにて学びしことの多かりき帰りてのちもきはめゆかなむ

若きらの感想発表元気よく国のゆくすゑたのもしく思ふ

「勤勉」「愚直」「誠実」の言葉を大切にしたい

（日揮㈱　江口研治）

合宿教室へは大学卒業以来、数十年ぶりの参加です。学生時代に参加した時と同じ様にどきどきしました。還暦という節目の年齢で参加し、改めて自分の考え方の基礎を見直す契機になったと思います。海外での仕事が多く、日本語を使う事が少ないせいもあって、長谷川三千子先生の講義には深く考えさせられました。布瀬雅義先生の講義で使われた「勤勉」「愚直」「誠実」の三つの言葉に感銘しました。これからの私の人生で、最も大切にしたい言葉です。

班別研修の折に

班長のかたりかけくる言の葉で日毎に友への親しみも増す

和歌を創る楽しみを覚えた

（中越友三郎）

この合宿教室へは知人の代役として、参加しました。自発的ではない為、当初は不安な気持ちが強かったのですが、合宿を終えた今は大変嬉しい気持ちで一杯です。特に私は和歌を創るという事に、大変面白さを覚えています。まず一首

創った事が、大きかった様です。最初に創った一首を班別研修で、皆さんに一人前に扱って頂いたのに感激しました。班の人たちの批評で私の詠んだ和歌が、格段に趣のあるものになったのには、びっくりしました。今後も和歌を詠む事を続けていきたいと思います。

歌を詠む楽しみが吾にうまれけり伊勢の集ひの友のおかげで

心が洗われるような感激にひたった

（㈳福岡県中小企業経営者協会　小早川明徳）

八月二十八日午後の部からの受講でした。着席して最初に手にしたのが「歌稿」で、受講者一人一人の短歌を拝読していく中で、合宿に真剣に向き合う参加者の姿が迫ってくるのを強く感じさせられ、受講の心構えができました。

長内俊平先生の短歌の講評と班別相互批評では、合宿前半二日間の体験の無い自分が、まるでそこにいたかのように、リアルに情景が浮かび、心の動きを手に取るように見せて頂き、大変有難く思いました。

慰霊祭では祖霊へ心からなる感謝の誠を捧げ、今在るを改めてかみしめられた時間でした。とりわけ長内先生の和歌朗詠は、自分の心が洗われるような感激にひたることができました。

「我らが道統と学問」においては占部賢志先生より、第一高等学校の沼波武夫先生の、貧しき中の人の親としての苦悩と志や使命感故の葛藤に身を病まれた由を拝聴しました。

伊勢の社頭での参拝祈願の後の玉砂利を踏みしめた足音の響きは、自分の心の錆を削ぎ落とす音でもあったと確信しています。

早朝に伊勢の参道を歩みて

聳えたる杉の大樹を見あぐれば雲ひとつなき空の広ごる

朝日射す伊勢の宮居の参道すがら行き交ふ同胞の顔映えてあり

合宿中に病床の朋友を想ひて

病に伏せたる朋友と和歌よみて心和ませ慰めてみむ

伊勢の地の心躍らす和歌よみを伏せにし朋友に伝へむと思ふ

第三十一班―女子社会人―

道統の淵源は大正期の思想の混迷に端を発するを再認識

（鹿児島県農協中央会　定栄安治）

慰霊祭は、今は亡き御霊を清めた庭にお招き申しあげ、目には見ることのできない方々に、今ここのおられる方々に尽すと同じように、ごちそうをお供しておもてなしすること。このことが合宿の全てに一貫していたと存じます。常に裏表なく誠実に尽すことを示して頂きました。五十年間も。

道統の淵源は、大正期の混乱に発することを再認識致しました。占部賢志先生の講義をはじめ諸先生の講義を今日から

再度たどってみたいと思います。基本は『根本の確立なり。即ち皇国千古一貫の生命たる日本精神の正しき把持是なり』『一片の心を以て、日本精神の本質、由来、三十年躍動の諸相を研究し、日本国民の生くべき道那辺にあるかを解説し…云々』と。

合宿最終日早朝、伊勢神宮（内宮正殿）に参詣して

木々の間ゆ朝日射しきて朝もやの薄くかかりて昇りゆく見ゆ

天照す大御神座します御社に八百万の神々集ふ心地す

我が国の伝統文化を謙虚に勉強してゆきたい

（㈱コーチャル　大澤あゆみ）

私はこの合宿に参加させて頂くことを楽しみにしておりました。伊勢神宮へ参拝させて頂き、太陽には御光が差し、鎮守の森や五十鈴川といった神さまに幾年も護られてきているのだということを感じ何か清々しい気持ちになりました。

一番印象に残りました講義は占部賢志先生のお話の中で、大正時代、自分の伝統や文化を破壊するということが行われ、明治維新以上に困難であった時代、国文研がどのようにして立ち上がったのかという背景を教えて頂いたことです。

このことを拝聴し、改めてこの国文研が素晴らしい会なのだと思いました。この破壊されてきた我が国の伝統的な、神代からつづく和歌をはじめてゆくことが大切と思い、長内俊平先生がご講義の中でおっしゃった「良い歌を声にだすこと」「本物だけをみていくこと」から始め謙虚にこれから勉強してゆこうと思います。

神代より歌に込められし言の葉の学びたきかな直き真心

日本人の源流が息づく伊勢神宮・短歌の心

（樋口繁子）

伊勢神宮と短歌のセットが気に入り、一般主婦ですが単なる旅行と違うこの企画に参加することに致しました。さて、三泊四日の「合宿生活」は私に集団生活における〝自己責任〟の大切さや〝日本の国柄〟を確認させていただきました。また、日本の源流の地に鎮まれる社から受ける敬虔な心根が生き生きと根付いていることを感じました。「式年遷宮」を輩出した先人の先見の賢さが日本人のＤＮＡの中にあると発見しました。この流れこそ、「万葉集」に始まり、「短歌」へと続く〝一筋の道〟にあり、歴代の天皇様が先頭に立って詠まれているのですね。参加させていただきありがとうございました。

属国の民のあはれかたゆたひて芯なる言霊霞むまほろば

日本人として、女性として自己修養を重ねていきたい

（㈱市印相澤食料百貨店　相澤加奈）

長内俊平先生はじめ、多くの講師の方々の熱意、そして謙

虚に修養を重ねてこられたであろうお人柄に触れ、恥じ入る思いが致しました。と同時に先生方に大変感動致しました。日本人、また女性として常に自己の修養を怠らないという基本に立ち返らせて戴きました。また、伊勢神宮を参拝させて戴き、天照大御神様が「国栄えよ（滅ぼしてはならない）」と願っておられるように感じ、奮い立つ思いが致しました。この思いを共にする先輩方、友人に出会わせていただき、大変有り難く思っております。早朝参拝の折、長谷川三千子先生が恭々しく詣でる姿をお見かけし、感動いたしましたが、八月十五日靖国神社でなされたご講演のような、日本人としての自覚、決意を呼び起こすものを期待していましたので、残念な気持ちが残ったのも正直な感想です。

身を正し大和心を磨きたし神の御教へいただきゆかん

社会の問題に対して一人の国民としてしっかりと考えていきたい

（㈱ビック・エー　永田裕子）

先生方の真心ある御講義、友との深き出会いにただただ感謝の思いで一杯です。先生の御講義にて「目に見えないものを信じる力」が大切であると教えて頂いた事がとても心に響いて参りました。また、同時に歴史を知る中で、物事に対して正眼で捉えていく事の大切さを教えていただきました。国を守る時に偉大なる信念や使命感を抱き、亡くなられた方々の築き上げた歴史が教えてくれた事を絶対に無駄にしてはならないと感じました。占部賢志先生の講義の中で、自分の生きている社会の問題に対して客観的に見るのではなく、一人立つの精神が大切であると教えてくださった事を心に置き、自らが社会の問題に常に自問自答しながら一人の国民として素晴らしい日本人となっていけるよう自らを高めていきます。

伊勢の地にて真心の教へ聞き入りて心洗はるる感謝の心

時代を引き受ける沼波瓊音氏の生き様を心に刻んで

（日本青年協議会　別府正智）

沼波瓊音氏の虎の門事件に対する書簡は強く心に迫るものだった。摂政宮に放たれたピストルは自らの怠慢を責めたる一発として、我が身ひとえに時代を引き受け担われる覚悟、そしてその心定めからの生き様に深く感銘した。時代と対峙する一人の生き様、その生の中から溢れ出る真心の発露としての行動が脈々と受け継がれてきたのが、国民文化研究会の道統であると思われた。宝辺正久先生は、真心がなければ一切は無い、と喝破されたが、改めてその言葉が沼波瓊音の生き様と共に心に刻まれた。

山口秀範運営委員長が「百回を、この参加者で作り上げよう！」と願い深き、また使命重き言葉を投げかけられた。その言葉を受け止める自分たるべく、また小田村寅二郎先生、小柳陽太郎先生の御恩と御志に応えるためにも、今日より精進を積み重ねていきたいと強く思われた。

第三十二班―女子社会人―

日本語の奥深さ等を感じた

（㈱東京白ゆり会　横井里江）

今回私は、初めてこの合宿教室に参加させていただきました。

一日目から先生方の御講義を伺いまして、いろいろ勉強させていただいたのですが、少し前に八月十五日の長谷川三千子先生の御講義を書面で読ませていただいたことを思い出しました。終戦記念日と言うことも有り、その時は主に日本や天皇陛下のお話だったのですが、私はそのお話にとても感動致しました。

今回の「てにをは」と題された御講義では、日本語の奥深さ、繊細さ、楽しさ等を感じ、とても勉強になりました。

白みたる山の向かうの大空に御清き伊勢の神々を感ず

日本の文化や歴史学ぶきっかけ

（㈱ビッグ・エー　古賀あやか）

素晴らしい先生方の講義を聞かせていただいて、改めて感じた事がありました。今まで学校で勉強した歴史は何だったのだろうと。自分自身、日本の歴史をあまりにも知らないということを痛感しましたし、現在の教育現場で正しい歴史が教えられていないということにぞっとしました。

日本の歴史を知らないことは前々から自覚していましたので、勉強しなければとは思っていましたが、具体的にどのように勉強したらよいのかわからずに居ました。このことを班内で話しましたら、班員の方々が、お薦めの本や映画を紹介してくださいました。早速、読みたいと思います。

今回の合宿が、改めて、日本の文化や歴史を学ぶきっかけとなりました。

朝日映ゆ川のせせらぎ聞きながら出来たばかりの赤福ほほばる

大和撫子になりたいと思った

（㈱コーチャル　小倉映子）

短歌創作だけではなく、伊勢神宮の早朝参拝にご講義と有意義な時間を過ごさせて頂き、ありがとうございました。

参加した学生の皆さんの言葉遣いや慰霊祭、伊勢神宮参拝時にそぐわない服装をしている方がおられたのは残念に思いました。同じ世代でこれから国を担っていく身として、受け継ぐべき品の良さを持ち合わせ、日本人としての自信と誇りを持っていけるといいなと思いました。

短歌を作るに当たっては、自分が何をどう思ったかということにしっかり向き合わなくては作れないことを教えて頂き、これからは万葉集、明治天皇の御製、短歌のすすめを何度も

読み、和歌作りに励み、いずれはきれいな和歌を詠める大和撫子になりたいと思いました。

宇治橋の先に広ごるいにしへゆ守られし杜のありがたきかな

日本語は美しい言葉

（㈱東京白ゆり会　笹川恵理子）

今回はじめて合宿に参加させて頂きました。五十回という歴史の中ではじめて伊勢神宮で行われ、早朝参拝、國旗掲揚も行われ、普段、体験することのできない事を多々体験させて頂き嬉しく思いました。

予定された講義の中では、私は長谷川三千子先生の講義を楽しみにしておりました。先生の講義を聞かせて頂き、私たちは生まれた時から日本語を話しており、本当に透明化されていると感じました。

私は、日本語は本当に美しい言葉で、崩して欲しくないと思っております。日本に生まれた事に感謝し、日々生活していきたいと思います。

明け方の月の残れる内宮に御友とともに詣づる喜び

今後の私の指針としたい

（所沢市立中央中学校　青柳京子）

長谷川三千子先生のお話を伺いたくて参加致しました。思いもかけず「日本語」のお話で、大変面白く、あっという間に終わってしまった感じで、もっとずっと聞かせていただきたいと思いました。また、間近に接し、そのお人柄に感動致しました。相手の話を全身でよく聞くお姿に、自分自身を省みて恥ずかしく、今後の私の指針と致したいと思います。

十五夜に生まれし子よと言ひし母の里の習ひに小皿並べぬ

後味のよい爽やかな合宿

（公務員　神谷正一）

伊勢での開催といふことで特別に清々しさを感じた合宿でした。若干眠かったものの、早朝参拝に続く朝の集ひにも爽やかな感慨がありました。

御講義も伊勢神宮にちなんだ内容で展開され、神道、言葉、思想等の連なりから日本の国柄についてしっかりと理解できるもので、非常に後味がよいといふか、すっきりとした印象です。

今回初めて社会人女子班に配置されましたが、いづれの班員諸氏も純朴で、真剣に合宿に取り組まれてをり、その姿に改めて考へさせられるものがありました。班長といふ立場でしたが、却って学ばされたやうに思ひます。皆さん、ありがたうございました。

全体感想自由発表を聴きて

せつせつと言葉選びて語りゆく若き友らの決意たふとし

第三十三班―女子社会人―

自分の思いを言葉に表現する難しさ

（㈱丸信　米倉春美）

今まで歌を自ら作成した事がない私にとって、和歌と聞いて多少なりと不安をかかえての合宿参加でした。同じ班の方々は良く勉強していらして私はこの場にいてよいのだろうかと感じたりもしました。実際に歌を作って思ったことですが、自分の知ってる言葉があまりにも少なく、自分の感じたことを言葉に表現するには無知であると同時に恥ずかしさも覚えました。自分の思いを相手により正確に伝えるには、言葉の勉強もしかり、まず自分自身が相手に伝えようという姿勢も大事ではないだろうかと感じました。お互いを知る事で人間と人間との関係は良い方向へと変わっていくでしょうし、自分自身を知り、見直し、相手の事を知ることの大切さを生かし、職場の空気をかえてゆき今回学んだ事を忘れず行動へと移していかなければと思いました。

悩めども気持ち表はす言葉でず無知とおろかさ身にしみにけり

日本精神を伝えていくこと

（㈶台東社会教育文化会館楽生塾　加藤三枝子）

・戦後の学校教育で意図的に教えられなくなりました「日本精神」が国民文化研究会発足の精神になっていらっしゃる事が素晴らしいと思いました。

・「聖徳太子」の輪読会もしておられると伺いました。今回の合宿講座の中に、戦後学校教育で何も学んで来ていない私達世代に今の若い方々は尚の事「この方のお蔭で今の日本がある」と感謝出来、その精神、志を初歩の者にも分かりやすくお教え頂けます「人物講座」がありましたら更に心に残る合宿になってゆく事と思います。

・国文研の伝統ある長い歴史を身をもって体現なさっているお年を召した素晴らしい男の方がたくさんいらっしゃいました。またその志、姿勢を受け継いでおられる中年の男性、またこれから学んでゆかれようと思っていらっしゃる青年もおられました。ただ「この人のようになりたい」と目標に学んでゆきたいと思えるご婦人にお目にかかれませんでした事が、とても残念に思いました。

占部賢志先生のご講演を拝聴して

最終日日本精神語らるる師のお話につかへ取れけり

問題は日本人が日本を売っていると言う事

（フジシールインターナショナル　宮本杏子）

この度は第五十回という記念すべき合宿教室に参加出来ました事を感謝致します。特に心に残りましたのは松浦光修先生の御講義でした。現在、我が国は様々な問題を抱えています。特に支那人による反日教育、靖国神社参拝妨害は目に余る物があります。しかし支那人が何を言おうとそれはあまり問題ではありません。問題は日本人が日本を売っていると言う事です。日本の不安定な状態は徒に中・韓・露の征服欲をあおるばかりか、歴代天皇陛下の祈りにあります八紘一宇の精神を妨げる物と思います。これは今迄日本の問題に目をつぶり、棚上げにして来たツケだと思いますが、世論の盛り上がりにより修正してゆけると学びました。

古より國民守り給ふ神の貴き宮のとこしへにあれ
常若の伊勢の宮居の輝きを千代に八千代に伝へん我等

様々な方々の御苦難の上に今の日本がある

（㈱コーチャル　大澤春奈）

長内俊平先生の短歌全体批評のお話の中で、親を想うこと、素直になることの大切さを学ばせて頂きました。また、班内では同じ志を分かち合える友人ができました。少しずつですが、こういう同志を増やしてゆくことによって日本を守ってゆける様な気が致します。

最後の講義で占部賢志先生のお話を聞かせて頂きました。大正時代のさまざまな混乱期の中で志を持たれ、そして国民文化研究会に至るという系譜の中で沼波瓊音先生が本当に国を憂い、守りたいと願われる強い御精神を感じました。また神武天皇様、聖徳太子、楠木正成、日露戦争など様々な方々の御苦難の上に今の日本があるということを何より肌身で感じておられたのではないかと思いました。この合宿はこの先生方の名にかけても永年続き、すばらしい日本人を養成する場であって頂きたいと心より思っております。

占部先生の御講義を聞いて
幾年を経てなほ残る精神を今絶やさじと心に思ふ

同志を生涯の友とする

（日本青年協議会　松藤慶子）

占部賢志先生が「国文研の歴史原点をたどってゆくとどんなドラマがあったのか」と話された御講義を伺っていくうちに、国文研が設立されるまでの間、沼波武夫先生、黒上正一郎先生方が闘い続ける中で、道統を引き継いでいらっしゃったことがわかり、昨日の慰霊祭の奥深さがしみじみと感じられました。八十年の間にたくさんのドラマがあったことを思いました。

又、長内俊平先生のお話を伺って、人に贈る短歌を詠むこ

とで、人への愛情を持ち続けることができると思いました。これからは両親や友へ短歌をおくる努力をしたいと思います。

今回素晴らしい友とめぐり会えることができました。共に国を良くしてゆきたいと願っている同志を生涯の友として、手紙を送り続けたいと思います。

早朝に宇治橋渡れば五十鈴川のせせらぎ聞こえすがしくなりけり

伊勢神宮での合宿教室

（若築建設㈱　池松伸典）

神聖な伊勢神宮の地での今回の合宿に各地から様々な縁によって集って来た参加者との不思議な交流を通して、先人の方々や神々との交流接触ができた様に思へて心が洗はれた。

毎日の早朝参拝の中で苔むした大きな樹木の中に御社が厳かに建ってゐる姿には、確かにそこに神様がいらっしゃるといふ様に思へたし、この合宿教室を皆と体験し充実した精神の中であったからこそさう思へてきたのではなからうか。そして私ごときがいかに考へようと古代よりこの地で営々と守られてきた神聖なる伊勢の地のびくともしない姿にただ拝むしかできないもののやうに思へた。

慰霊祭の準備

怠りの付けなるらむか御祭りの時迫れども準備進まず

友皆に心配かけつつわづかづつ御祭りの様見えて来にけり

神様をお迎へをする場所なれば友と語りつつ斎場（ゆには）つくれり

日本精神の正しき把握と普及

（小田原市青少年センター　岩越豊雄）

第五十回といふ記念すべき合宿教室を日本の心のふるさと伊勢の地で行なはれた意義は大きい。

五十周年といふ節目の時に禊ぎ清めて原点に帰って国文研の活動の新たな展開と強化に出来得る限り尽力せねばと反省した。

その原点とは「皇国千古一貫の生命たる日本精神の正しき把握と普及」であることを占部賢志氏の講義で確認できた。時機を得たお話であった。

外宮参拝

玉石の広き斎庭の御敷（みしき）地に光の満ちてあきあかね飛ぶ

神さびし杉の木立の木末よりさし来る光緑に染みたり

日の本のつもるまがごと払ふごと心合せて元寇歌ふ

第三十四班―女子社会人―

伊勢神宮での合宿に感謝して

（片桐久子）

初めて参加させていただきました。

五十年という長い期間続けていらした会長様始め多くの方々のお働きによって、今ここに伊勢神宮で合宿出来ましたこと、心より厚く御礼申し上げます。

この四日間は私にとってかけがえのない大へん充実した日々でした。諸先生方の熱意ある御講義に深く深く御礼申し上げます。

改めて日本の国を知り、歴代の天皇様の民を思うお心を短歌で知りました。又多くの方々に支えられて今私がいることを知り、地にひれ伏しておわびと御礼を申し上げたい気持ちでいっぱいでございます。

まことにありがとうございました。

いにしへの代々のみたまにひれ伏して今あるこの身喜びふるふ

参加できた喜びを子や孫に

（阿部サナエ）

この合宿に参加出きた動機になつたのは、産経新聞で長谷川三千子先生のお話を承はることが出きる機会を知らされた小さい囲み記事でした。学生青年合宿教室に七五才の私にも門を開いて下さつたことをよろこんで居ります。

参加してよかつたと思ふことは多々ありましたが、ことに

○神宮早朝参拝、国旗掲揚、国歌斉唱、ラジオ体操。殊に国歌は大きく確かに歌はれてゐました。

○長内俊平先生のお声とお顔、お姿、歌ひぶり、に化せられた思ひです。先生に少しでも近づいてゆきたいと思つて居ります。

○松浦光修先生の『やまと心のシンフォニー』を求めました。仙台へ帰つてていねいに読んでみたいと思つてゐます。

○今度は孫を伴つて参加させていただきたく存じます。

有がたうございました。

子よ孫に正しき史を受けてのちつたへんとして伊勢にはきたり

生きる喜びを呼び戻してくれた合宿教室

（尾関千枝子）

独り暮らしに一応馴染み、これから息子が遺した大量の本はじめ、主人の遺した雑多な物の整理をこつこつやらうと思ひついた矢先、再度の参加お誘ひを頂き参加した。

どうやら合宿の一員として、時日が過ぎゆくにつれ、遠い過去として楽しさを忘れかけてゐたのに楽しさを味はつて居る私。こんな嬉しい娯しさを長く忘れてゐた。而も班長のお手伝ひなんて到底考へすらしてゐなかつた。戸惑つた。班の方こそ戸惑つたらう。目だるくて。お許しあれである。正に三泊四日の勉強だつた。国文研といふ呼び名がどうも馴染めなかつた私であるが、これから一年もつと体に気を付けて、先輩の様に国文研会員としてふさはしい自分となる様自己研磨をして行きたい。

短歌全体批評と班別相互批評

慈悲深き師の御声聴きふたつ共緊張しつつ楽しかりけり

若き人起したくなくめざましの最低の音におどろく我は

気付いた事をいくつか書きます

（㈶台東社会教育文化会館楽生塾　岡部静子）

第五十回全国学生青年合宿教室に初参加させて頂きありがとうございました。この合宿を迎えるまでの準備、合宿中の夜を徹しての諸準備や進行にあたられました方々に心から感謝申し上げます。貴会の学びより日本精神を知り、日本を護れる若者が育ってゆきます様に心から願う者として、気付いた事をいくつか書かせて頂きます。

○合宿初日からビールを飲んでいる人がいました。

（編集者注記・他団体の人と思はれます。）

○服装の乱れは目に余ります。学ぶ者としての最低限の礼を尽す身支度は必要かと思います。言葉遣いも含め、わからない、気づかない方には恐れず伝えるべきと思います。

○神宮参拝・神楽の諸注意も参拝の仕方等も含めて具体的に事前にお知らせ頂けたらと思います。

○主催者の若者は誇りをもちお手本になるという気概をもって臨んで頂きたい。

○慰霊祭の後の夜の集いにお酒は必要ないと思います。お酒がなくとも楽しい集いは出来ますので。酔っている大人、何やらハイになりすぎて胸元が見えても気付かない女子等、学び以前の状態がございました。女子全体に心くばりしてゆける人が必要ではと思います。（年配の女性がよろしいと思います。）

将来を担う若者の教育にあたられます貴会の発展を心よりお祈りしております。

大君の祈り遍くいただきて心ひとつに国を護らむ

子供たちの事これからもよろしくお願いします

（中越範子）

初めて参加させて頂き、大勢の参加者の為に日夜ありがとうございました。ただその御努力も水泡に帰すのではないかという思いが致しました。今年で第五十回になるとのお事、五十年の間に少しズレが生じて来ているのではないでしょうか。

若人を心より育てようとしている方がお見うけ出来なかった事がとても残念に思いました。育てる。という事は時には厳しく叱ってこそ育ってゆくものと思います。躾が教育の一番大切な部分かと思います。

一、服装の乱れ。若い男性、女性、履物、頭髪、歩き方（姿勢）。品格もなく、見苦しい。又その事を注意も出来ない主催者の方々。真剣さに欠けているのではと思いました。品格は服装、行動に表われて参ります。日本人としてとて

も大切な事と思います。

二、実践してこそのお話が聞く者の胸をうつのではないでしょうか。理論だけでは空しさしか残らないように思います。

三、女子教育につきましては、女性の指導される方を一室一名つけられたらと思いました。若い女性ばかり同室になさるよりは、老若同室にされたらよいのではないでしょうか。

四、大切な日本の将来を背負う大切な子供達をお預りしておりますのに、夜毎アルコールを召上っておられたとももれ伺いまして、おどろいております。上に立つ方が姿勢を正しくされますと、自然と同質の方々が寄って来られると存じます。

五、三日目の夜の神事はとても有難く、心より御礼申上げます。ただその後の直会に続く集いは、ジュース、お茶だけでなさった方が良いかと思います。コントのような出し物も、下品で（アルコールの所為もあり）、観ておられませんでした。

六、神社へのご参拝の方法も正しくご指導なさるべきでは。せっかく表題にありますように「伊勢神宮で学ぼう」ご神職の方々も大勢居られますので、喜んでご指導に来て下さると思います。

沢山の才能を持った若い子供達の事、どうぞこれからもよろしくお願い申上げます。今この国は第四の国難ともいうべき時を迎えております。私ももっともっと学んで、若い方々に正しくお伝えして参ります。創始者の志を正しく受け継がれ、益々の御発展を心よりお祈り申上げております。ありがとうございました。『日本への回帰』いつも拝読させて頂いております。

緑濃き伊勢の杜より神々は世のたひらぎを護りて永遠に

待たれた合宿教室

（島村善子）

恥かしながらこの頃になってやっと我が国の国柄・歴史・皇室などのこと共に関心が高まり、改めて書物を繙くようになった。その自分の歩みの確認という意味合いも込めての今回の合宿参加であった。

結果、道筋は外れてはいないものの不十分さに多々気付かせられたこと故、さらに学び続けていきたいと念じている。

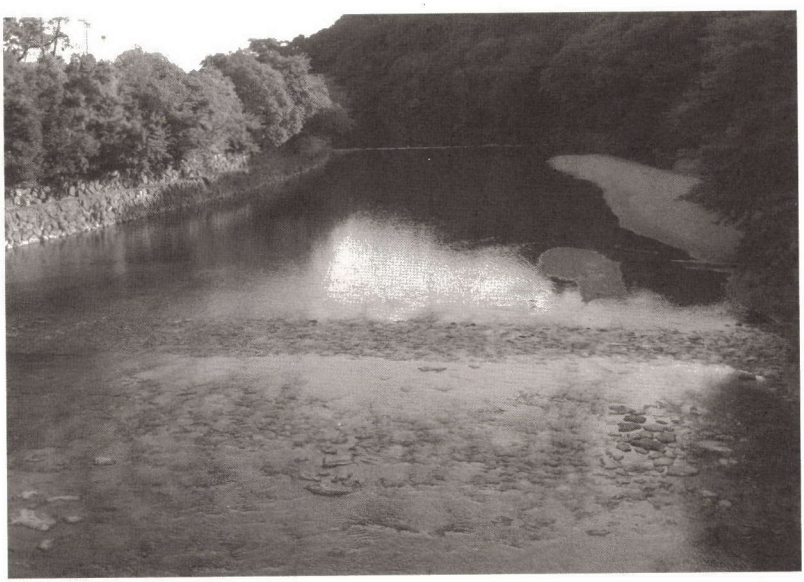
このたびは、いろいろお世話様になりまして、誠に有難うございました。

伊勢の杜いにしへの世より人々のまごころつたへいまに至りぬ

神やどる宮居の杜の静けさに眠れる心ふるひたたさる

合宿中に創作された「短歌詠草」

―しきしまのみち―



短歌創作について

この合宿教室では、例年、主催者を含めて参加者の全員が、短歌を作ることにしてをります。これは、この合宿教室の大きな研修課題の一つであり、今回も多くの短歌が創作されました。

短歌は、現代においては、人々の日常生活には馴染みの薄いものとなり、文学的趣味の一つとしてしか受け容れられなくなってしまってをります。従って、この合宿教室に初めて参加する学生青年諸君にとって、短歌創作は大きな戸惑ひであり、かなりの負担でさへあるかに見受けられるのですが、合宿日程を追ふにつれ、自らの心の動きを言葉にすることのむづかしさ、まごころの籠った言葉の奥深い味はひを多少なりとも体験して行く中で、次第に、その意味が把握されて行った様に思はれます。

そもそも日本人は、千数百年の昔から、「万葉集」に見られるやうに、あらゆる身分・職業の人々が、学問知識の深浅、老若男女の相違を越えて、五七五七七の定型の中に、折々の自己の思ひを素直にうたひ上げてきました。自己の内心を赤裸々に短歌の上に表現することは、同時に厳しい内省を伴ふものです。いはば短歌創作の過程で、厳しい心の鍛錬が行はれるのです。そこで私達の祖先は、短歌を詠むことを人生の修行の一つの手段と考へて「しきしまの道」と呼んできました。日本人は、短歌を詠み交はすことによって、人間にとって最も大切な心の働き、情意を厳しく鍛へ合ってきたのです。先祖の歌を学ぶことは、私達一人一人の心の中に先祖の姿を蘇らせる作業であり、自分が紛れもなく先祖とつながりをもった日本人であることの発見であり、また自覚なのではないでせうか。現代の教育では、知識の集積や論理の整合に重きが置かれ、人間にとって最も根源的な心の問題がなほざりにされてをります。本合宿では、かうした現代教育の束縛を自ら感知し、そこから一歩でも抜け出さうとする営みが、この短歌創作とその後の参加者同志の相互批評によって集中的になされてゆきます。心の奥底に眠ってゐるまごころを呼び覚まし、人のまごころに敏感に感じる、素朴にして溢れる人

間性を取り戻さうとする試みが、ささやかながらも実現されてゆくこの貴重な経験は、参加者全員にとって、忘れがたい印象として心の奥深く刻み込まれるに違ひありません。

合宿二日目の午後、小柳志乃夫氏（みずほコーポレート銀行）により短歌導入講義がなされ、短歌を作る上での基本的ルールが指導されました。その後夕刻までに各人が創作した第一回目の短歌が提出されました。慌ただしい日程の中で生み出された短歌ではありますが、作者の集中された内心の働きがはしばしに表現されてをり、作歌上の巧拙を越えて、強く惹かれるものが籠ってをります。提出された短歌は、同時に国民文化研究会会員による選歌・印刷のための清書作業を通じて、翌日には歌稿となって参加者全員に配布されました。この歌稿をもとに長内俊平氏（国民文化研究会副会長）によって、短歌全体批評がなされました。ユーモアを交へた御話の中にも一語一語に含まれる作者の心を全身をもって偲ばれ、直されてゆく姿に、参加者は短歌批評のあり方を自然に感得したのでした。

その後、各班ごとに班員全員による相互批評が行はれ短歌の表現を通じお互ひに友達の心に触れ合ふことが出来、合宿生活において、寝食を共にし、胸中を披瀝し合って来た友情の結び付きが、一段と確認されました。

短歌創作を通して展開された、まことに稀な精神生活の体験は、参加者ひとりひとりに、言ひ知れぬ喜びをもたらすことになりました。

ここに収録された歌の数々は、班員の心を集結して推敲・添削されたものです。その表現形式においては稚拙なところも見受けられますが、これらの短歌の中から瑞々しい貴重な魂の輝きをお読みとり下されば、と心から祈念する次第です。

短歌詠草（しきしまのみち）合宿第一回目の創作作品（参加学生の第二回目の作品は感想文の末尾に収録）

第一班

九州工業大学　情報工　二年　瀬木裕太郎

「久しぶり」と言ひしみ友の声聞けばなつかしき日々思ひ出さるる

ぞくぞくと新しき友らの来し姿見ゆれば我の意気あがりけり

思はずも眠りし我を起こしたる友の心に感謝するかな

松浦光修先生の講義を聴いて

日の本で伝へられ来し物語りを次の代までも伝へゆきたし

日教組を孤立しつつも戦ひし松浦先生に感服するかな

伊勢神宮を参拝して

新しき友らと共に早朝の伊勢神宮に参る喜び

東京理科大学　基礎工　二年　前田隆太郎

あまてらす大神おはす伊勢の宮は今も変はらず生きたまひけり

英国国立アストン大学　二年　山田裕介

合宿に初めて参加して

帰国して初めて気付きぬ日本語のその美しさその奥深さを

日本の心のふるさと伊勢に立ち我が国思ふ気持ち高ぶる

東北大学　教　博士三年　大岡一亘

松浦光修先生の式年遷宮についての御講義を聴きし折に

遷宮の知恵とはかくも凄きかと熱き言葉にしみじみ思ふ

明星大学　言語文化　四年　高橋佑太

今年も短歌創作導入講義を聴いて

感動をつぶさにみつめて歌詠まむと気持ち新たに湧き出でにけり

第二班

防衛大学校　理工　四年　森　浩典

神楽終りいざ立ち上らむと思へども足が痺れて動きとれずも

北海道大学　文　二年　小林雅典

大いなる深きみどりとセミの声今も昔も変はらぬと思ふ

京都大学　総合人間　四年　中原有輝

神の地を流るる五十鈴のせせらぎに己が心も洗はるるごと

福岡大学　法　四年　長友泰道

神木のおりなす陰にふと入れば暑さのやはらぎ心やすらぐ

九州工業大学　情報工　一年　片峯龍一

日教組のみにくき話を聞くにつれ教師を目ざす友を憂ふる

東京大学　法　四年　武田有朋

八月二十七日、内宮への早朝参拝の折にけざやかに晴れ渡りたる早朝に班員らとともに宿を発ちたり

青々としげる木立の只中の参り道を行く急ぎ足にて

遠くよりせせらぎの音の聞こえ来る森の空気はすがやかなりき

友どちと息をあはせてをろがみて今日も励まむと気をば引き締む

東京芸術大学　音楽　一年　武澤陽介

守りこしいにしへのまま伝はりし素朴な調べに在りし日を偲ぶ

第三班

防衛大学校　理工　四年　船山尚志

内宮の御垣のうちに詣づれば心のうちを洗はるる心地す

九州工業大学　情報工　修士二年　結川高志

かんじんなことは目に見えぬものだとの言の葉強く心にせまりぬ

物の見方大きく広がる心地して気付かぬうちに涙あふるる

東京大学　理二　一年　藤巻勇輝

雅楽の音瞳を閉ぢて聞きをれば神の御姿心に浮かぶ

広島大学　教　二年　井上智博

伊勢に来るまでのバスの車窓より病床にて何眺むらむと過ぎてゆく景色を見つつ友の上を思ふ

獨協大学　外国語　四年　藤崎洋平

合宿の講義聞きつつ神宮の尊き由縁改めて知る

佐賀大学　経　四年　川畑孝志

松浦光修先生のご講義を聴きて

皇室は歴史をつなぐ玉の緒とふ師の御言葉の心に残りぬ

鹿児島大学　水産　三年　前田隼平

早朝に神宮前に皆で集ひ体操をすれば心すがしき

第四班

亜細亜大学　国際関係　四年　本間隆宏

早朝参拝せし折に

朝日さす神宮の森を歩みゆけば高き声にて鳥は鳴きけり

朝日さす神宮の森に空高くそびゆる木々を仰ぎつつ歩きぬ

橋の上ゆ五十鈴川をし眺むれば流るる音のさやかに聞こゆ

五十鈴川に群れ飛ぶ秋津ながめをればなどか懐かしき心地するなり

古来より秋津島とぞ呼ばるるはこの景色にも偲ばるるかな

福岡大学　経　四年　井手良平

御神楽を奏でる音の美しく心の底に響き渡りぬ

福岡教育大学　教　四年　馬場　健

長谷川三千子先生とお話をせし折に

質問をしたしと想ひて食事をば取らるる先生(うし)へ話しかけゆく

我が問ひを手を止め顔を向けられて頷きながら聞かれたまふも

吾の問ひを正確に聴き応へたまふ先生(うし)の言葉で心晴れゆく

都立武蔵野北高校　一年　山中利郎

伊勢の地を歩きて思ふ熊蝉の声を再び聞けぬものかと

阿倍野にてかつて聞きける熊蝉の鳴き声我を再び迎へる

熊蝉の朝に騒ぐを聞きたれば西の国へと来たる心地す

一橋大学　社会　一年　坂田道志

早朝参拝の折に

参道を覆ひし木々の静けさに包まれ心落ちつきにけり

獨協大学　法　二年　鈴木正樹

参道に敷き詰められし玉じゃりは歩み易きかやわらかくして

第五班

早稲田大学　社会科学　修士一年　野村　亮

正宮の御前に立てば自づから心も身をも引きしまる思ひす

早稲田大学　法　五年　濱崎史嘉

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

「てにをは」に日本の精神感じとる豊かな感性育みたきかな

中村学園大学　人間発達　三年　松堂琢磨

神籠るといふ社の森の杉を見て詠める

神籠る御社の森の大杉ゆもれくる光優しくそそぐ

長崎大学　工　三年　山本真矢

神楽奉納の久米舞ひが朝鮮から伝はったものと聞きて

朝鮮ゆ伝はりて来しいにしへの舞ひは日本に今も残れり

日本大学　経　四年　梅原　洸

大病を患ひし時を思ひ出し

病む我を支へつづけし御親への感謝の思ひ言葉に尽くせず

拓殖大学　政経　二年　大河内恩人

先輩らと語り合ひつつ歩めども鳥居の前ごと心籠りぬ

第六班

福岡大学　経　四年　精松直哉

五十鈴川の近きによりて思ひ出す幼き頃の川遊びかな

下関市立大学　経　一年　横手健太郎

神宮の木々を見て

伊勢の木々巨大な幹に驚きて見上げはすれど先まで見えず

幾百年の時代の流れを見てきたる木々は今でも御社に立つ

今日もまた木陰の中を人々の行き交ふ様を見るかのごとく

太い幹時代の流れを見てきた樹今日も木陰を人が行き交ふ

九州工業大学　情報工　三年　林　祥人

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

「てにをは」でつらなる言葉の美しさを語らるる師に目を開かれぬ

長谷川三千子先生のご講義の後、相互批評の折に

和歌を詠み班員と共に考ふれば「てにをは」を学ぶ道となるらむ

東京大学　文　四年　石村善之亮

古の杉の巨木は苔むせど伸びる枝葉に雄々しさを見る

九州大学　工　二年　馬場章央

班員らと外宮参道を歩みて

青々と覆ひ茂るか大杉の伊勢の社を守るがごとく

大きなる杉の樹齢はいくらかと問へば班員は我に答ふる

幾百年と我が班員らが答ふれば長き歴史に我驚きぬ

第七班

亜細亜大学　法　四年　佐野宜志

早朝参拝にて

生ひ繁れる木々の間にみ社が朝日を浴びて輝きてをり

九州工業大学　情報工　二年　秋田崇文

英霊に感謝の言葉をささげます少女の手紙に涙あふれぬ

獨協大学　経　四年　菊間　翔

念願の和服会社に就職が決まり、伊勢神宮へ決意表明参拝の折

日の本の輝く文化和服をば後に続けと決意ひとたび

平成の和服維新を叶へむと大八洲人へ伝へ着せたし

早稲田大学　社会科学　三年　古川悠哉

内宮早朝参拝の折

千歳生きて苔のむしたる大木に触れて生命の

広がりを感ず

早稲田大学　法　五年　高木雅史

東京に所用ありて合宿を中座し、再度合宿地に向ひし折に

御友らに疾く会ひたしと乗り継ぎの駅の間をひたに走りぬ

大阪教育大学　教　三年　吉田明令

伊勢神宮内宮参拝

いにしへゆ祈りきたれる国民のことを想ひつつ吾も手を合はす

第八班

成蹊大学　法　一年　亀澤矢汐

野外研修の折に

誤りて砂利に投ぜし賽銭の右に箱ありてはっとするなり

日本大学　経　四年　横山知之

宇治山田駅に降り立ち我つひに伊勢に来たりと気の引きしまる

九州大学　工　二年　清水貫太郎

朝日受け静けき森に囲まれし宮の姿の厳かなりけり

獨協大学　経　四年　吉田和正

内宮を早朝参拝せし折に

御社にいのりし折に吹き寄せし清かなる風の気持ちよきかな

東京大学　法　四年　池田朝彦

講師らの思ひもよらざる考へは違和感あれど刺激受けけり

明治大学　理工　四年　小柳雄平

内宮を参拝せし折に

み友らとさやけき朝の参り路を歩みていけば気持ちよきかな

第十一班

福岡女子大学　文　四年　馬場智茶

伊勢神宮参拝にて

真っ直ぐと天に向かってそびえ立つ木々は御神を迎ふるごとし

早稲田大学　第一文　二年　原川　翠

千余年伊勢にたたずむ杉の木に触るればいのちのあるを感ぜり

崇城大学　芸術　一年　折田宇代

もともとは並びて立ちし杉なれど災ひありてか一本になりぬ

一本となりても立てる姿見て一人生きゆく強さを思ふ

佐賀大学　教　二年　梶山雅代

伊勢神宮を参拝して

拍手を打ちて祈ればおのづから心安らぐ神の御前で

㈱寺子屋モデル　黒岩礼子

神楽奉納の折

美しき雅楽の音色にみちびかれ神々つどふ心地するなり

第十二班

同志社大学　法　四年　太田和子

班付宝辺矢太郎先生のお話しを聴きて

魂ゆこぼれて出づる師の言葉に心打たれて筆止まりぬ

西南女学院大学　保健福祉　三年　櫻井愛弓

神楽殿にひびきわたりぬる笛の音は小川の流れのごとく聴こゆる

福岡教育大学　教　一年　岩見智世

臨海学校で課題を終へし折に

先輩のがんばったねの一言にやさしさ感じ涙あふるる

早稲田大学　第一文　四年　影島由佳

来む春に別れゆく友と誓ひ合ふ共におのが夢

を捨てず求めむと

長崎大学　教　三年　三荻　祥

天照らす神のおはします宮の屋根にさしのぼる日の照り輝けり

北海道大学　法　三年　安田陽子

昨日まで名前も知らぬみ友らと笑ひ合ひぬる今日ぞ嬉しき

第十三班

九州大学　医　二年　穴井裕子

感謝の思ひ

お父さん心配かけてごめんなさいと素直に言へぬこのもどかしさ

九州造形短期大学　デザイン　一年　諫山仁美

早朝参拝した折に

新緑の木々に朝日のさしこみてああ美しとながめつるかな

慶應義塾大学　文　一年　金谷智慧子

伊勢神宮を訪れて

伊勢の木々みんなひとつにとけあひぬ太く細くも曲がるも伸びるも

長崎大学　教　四年　平山恵理

早朝参拝

玉砂利を踏む音のみぞ聞こえくる朝の静かな宮に参れば

御正宮にて

朝の日に映ゆる宮居におはします天照大御神に力給はる

早稲田大学　社会科学　四年　川井　茜

初めて伊勢神宮を訪れて

高々と立ち並びたる大木は宮居をおほひ守りくるらし

第十四班

麗澤大学　外国語　四年　黒川英恵

小包の封を開くれば母上と故郷のにほひ溢れ出でけり

早稲田大学　教　四年　小林由香利

外宮の参拝の折に

内宮の御饌津神とぞ思ほえば親しさ覚ゆこのみやしろは

朝夕にお食事差し上ぐ御饌津殿も近くにありし豊受の大神

どことなく木の香土の香ただよひて外宮のみやしろいやに親しも

皆への想ひを詠みたくて

こんなにも合宿楽しと思へるは皆のおかげぞありがたきかな

慶應義塾大学　文　二年　西村亜貴子

神域の冷たき風は身にしみて我胸内を清めるがごとし

御講義や御友の話を聴きながらおのが来し方かへりみるなり

九州女子大学　文　四年　城　朋子

はるばると訪ね来たれる伊勢の地で良き友垣と出遭へて嬉しき

古ゆ変わらぬ歴史を偲ばする伊勢での出会ひ有難きかな

福岡教育大学　教　三年　山口瑛美

長谷川三千子先生の御講義を受けて

日の本の心変はらず「てにをは」とともに伝はり来しと語らる

日の本の心は永遠に「てにをは」と伝はりゆくと信じゆきたし

第十五班

立命館大学　経　四年　前田多恵子

早朝参拝にて

参道を玉砂利ふみしめ歩を進む流るる汗も清

しく思ひて

東京純心女子大学　現代英語　三年
青砥順子

御神楽の奉納にて
笛の音に己が心の寄り添ひてただ祈りぬる
戦なき世を

お茶の水女子大学　生活科学　一年
青木理江

神代より神に命をたまはりてここに立ちたる
神宮の杉

福岡教育大学　教　二年　平賀初枝

伊勢神宮にお参りして
御親らの詣で来られし御社にやうやく我も今
参るかな

大阪大学　法　三年　金澤仁子

様々な人の思想で定まらぬ心かかへて伊勢に
来たれり
君が代を歌ひてみれば幼少のあどけなき我ふ
いにあらはる
日本を愛してやまぬ幼少のありありとして涙
こぼるる

牧　美和子

みやしろにつづくこの道先人の踏まれし道を
我も歩まん

第二十一班

ハローワーク福岡南　古川広治

木の間より朝日を受けて金色に輝くお宮の
神々しく見ゆ

㈱ステイタス　竹入雄二

神楽舞ふ神の出でます場所なれど正座する足
最早限界

日本植生㈱　日笠　健

大木の幹に触りて悠久の歴史の深み肌に感じ
ぬ

㈳福岡県中小企業経営者協会　浦脇慶祐

合宿の日々を重ねて少しづつ先人の思ひ伝は
りてきぬ

㈱ワイドレジャー　押川　真

伊勢の地に不安抱へて来たれども朝日眺めて
心晴れゆく

㈻中村学園　岡本健人

神楽殿に響く太鼓と笛の音にあはせて踊る巫
女美しき

㈳福岡県中小企業経営者協会　古屋憲一

淡き日の中にたたずむ神楽殿屋根の丸さにや
さしさを見ゆ

第二十二班

防衛庁　鎹　信弘

神楽殿の屋根の上の空明るきに数多の秋津飛
び交ふが見ゆ
神楽舞ひ待ちて集へるみ友らの語らふ姿楽し
げに見ゆ
赤き飾差す冠の巫女二人榊手に持ち静々と舞
ふ
太刀を佩く若き武士輪榊を振る身のこなし颯
爽にして
異国ゆ伝はる舞ひか緑の面つけたる人の舞ふ
様妖し

（二回目の作品）

み友らと心尽くしてもろともに学びの集ひ作
り上げゆく
吾もまた合宿支ふる歯車の一つとなりて働く
嬉しさ

㈳福岡県中小企業経営者協会　廣末好信

参り路を元気に駆ける子らを見れば早く会ひ
たし愛しき吾子に

公務員　村山健司

班別研修にて
真剣に国を憂ふる友どちの言葉に我もやらね
ばと想ふ

兵庫医科大学病院　末永浩一

学ばむと合宿に向かふ道すがら胸高なるも不安は増し行く

北九州市立飛幡中学校　森山秀孝

三十年の願ひ叶ひてやうやくに参加果たしぬ青年合宿

㈱ビッグ・エー　菊地隆昭

いや太き杉やひのきのそびえたつ森は祖先の守りこしけむ

㈱振興産業　山内健司

木漏れ日の差す参路を黙し行けば遠き神代に入る心地せり

第二十三班

伊佐ホームズ㈱　米屋方貴

早朝参拝に参加して

早朝のせせらぎ清き五十鈴川心洗はれすがすがしけり

同朋天神保育園　武重大輔

早朝参拝にて

正宮の方より昇る朝の日の光やさしき大神のごと

㈱ビッグ・エー　篠本和哉

早朝の伊勢の宮居にふり注ぐ清かなる日に心安らぐ

㈳福岡県中小企業経営者協会　渕上勇輝

内宮での早朝散策にて

千余年神のみそばで立つ杉の雄々しき姿我が身揺さぶる

㈱ワイドレジャー　阿比留治郎

早朝参拝にて

大きなる杉の根に生ゆこのこけも神の宿せる命なるかも

㈳福岡県中小企業経営者協会　吉田　博

三年ぶりに伊勢に参拝して

今は亡き恩師の顔の浮びけり共に詣でし時を想ひて

㈱日本教文社　坂本芳明

神宮に参拝して

いくとせの時を経つるか大杉の宮居の庭に雄々しくぞ立つ

雄々しくも生ひ立つ杉は日の本のいのちあふるるしるしとぞ見ゆ

第二十四班

ウェブテクノロジー㈱　松江正幸

神楽を拝見した後神主様のお話をお聞きして

我が眉間に熱走るなり神宮を守り育くむ御心聞けば

㈳福岡県中小企業経営者協会　行弘賢治

大神を守りてたてる杉の木を心強しと思ひて仰ぐ

㈱ビッグ・エー　及川　洋

勤務地を遠く離れて神宮の参り路行けば心落ち着く

㈱ワイドレジャー　石丸友和

木漏れ日を避けて歩めど汗かきて参り路を行く神楽殿へと

筑紫野光が丘郵便局　森田邦義

かしこみて神宮神楽を聞きにけり神国日本に伝はる調べと

元新潟工科大学教授　大岡　弘

太刀を帯び白き装束人長の研ぎし動きに感じ入るなり

輪榊を右手に持ちて伸びやかに舞ひを捧ぐる神楽舞人

第二十五班

福岡県警　川下継範

はじめての神楽の舞に感じるは太古の人の手振りなるかな

㈳福岡県中小企業経営者協会　横野一郎

豊受大神宮にて

真昼間の外宮参道歩み来て暑き日差しに汗のにじみぬ

古ゆ受け継がれこしお神楽を友らと見むと殿に入りぬ

殿内のつめたき風は神代より流れしごとく厳かなりけり

㈳福岡県中小企業経営者協会　二宮裕一郎

魅せられて伊勢神宮に詣できて感ずることは己の未熟さ

日本植生㈱　清板大輔

神宮の空をも隠す大木の苔むす様に永遠を感じぬ

三共㈱　武井紀英

豊受大神宮神楽殿にて

神楽見て何故か感じる懐かしさここ伊勢に来たのも不思議な縁か

元日産自動車㈱　古川　修

皇大神宮早朝参拝

夜は明けて友らとゆけば宇治橋の鳥居の見えて宮の近づく

朝空にかがやく鳥居を見上ぐれば宮居の森の眼にはしるけし

清らかな五十鈴の流れはうつくしく蝉鳴きしきる御手洗場辺りに

幾星霜経に来し杉の大木は我らに迫りて霊気はなちぬ

正宮の前に並びて友どちと共に祈りぬ心をこめて

第二十六班

㈳福岡県中小企業経営者協会　篠原寛治

神宮を覆ひ繁れる木立より湧き立つごとく蝉の音響く

日本植生㈱　川田大輔

一筋に家族を想ひ田畑を守り続ける祖父を慕はむ

㈱東京白ゆり会　堤　祐一郎

御社を守り続ける我国に生まれし縁を誉れに思ふ

公務員　村上秀喜

御社の蝉の声すら神宿る伊勢のこの地に我は学ばむ

㈱ビジネスコンサルタント　北島治樹

御正宮を後方より拝す

御社の上を覆へる木々の葉はわきたつ雲のごとく繁りぬ

中島法律事務所　中島繁樹

垣内の正宮殿の金色の鰹木千木の朝日に光る

晴れ上がる空の高みにそびえ立つ樟のこずえに若葉がそよぐ

第二十七班

ＮＰＯ法人観照会　河上　明

あたらしく優しき友らをここに得て天の恵みと心楽しき

様々の行事に学びし経験を心に刻み務めむと思ふ

マスターマネジメントコンサルタント　稲田健二

遷宮を重ね年経る御社は太古の姿のままに新し

元㈱日立製作所　日髙廣人

五十鈴川清き流れに身をきよめすめらみおやををろがみまつる

ＮＰＯ法人兵庫県断酒会　諏訪田陽山

玉砂利をふみしめつつも悲しけれ御国の行方いかならむかと

㈲バントレーディング　森重忠正

神さびし橋と鳥居をかこみたる木々の緑は朝の日に映ゆ

公務員　小川揚司

朝日射す御垣の内に威儀を正す白き制服の若者清し

第二十八班

湯亭こんや　青砥誠一

早朝伊勢神宮に参拝をして

朝日照る森の鎮守の玉砂利を踏みしめながら歩みてゆきけり

本殿の前にかしこみ頭垂れ祈りを捧ぐ伊勢の大神

㈱柴田　柴田悌輔

五十鈴川川面にうつる雲消えていさす朝日のきらめきてあり

きらめけるみもすその淀に松のみどり日ざしを受けて鮮やかに見ゆ

中越友三郎

神坐ます浄らかな宮にぬかづきてそのうれしさを童らに伝へん

日揮㈱　江口研治

母と家族でお参りした事を懐しみ

伊勢詣で早や二十年を経ぬるかな共に写せる写真の思はれて

薬丸保樹

故郷の神社で長年巫女として仕へし姪を偲びて

故郷のやしろにつかへる愛でし姪を神楽の舞に重ねつ想ふ

産経新聞社　大内保治

早朝長谷川三千子先生と神宮を参拝して玉砂利を踏みにしゆけば朝日さすいせのみやしろ鎮りてあり

八月十五日靖国神社に昇殿参拝して詠める

蝉が鳴く夏の靖国ひんやりといまだこぬなりくちさきおとこ

九月三日の「日露戦争百周年を祝ふ青年の集ひ」を目前に控へて

君や君馳せ参ぜよや赤坂へわが日本の勝利を祝し

総選挙の告示を控へ西村眞悟、東祥三両先生に捧ぐ

山は裂け海は荒れなむ世なりとも大兄はたつなり皇国のために

小泉首相に

いかにせんいかにせんとよのなかをくるつたまんまでくるひつづける

第三十一班

江戸川区立第五葛西小学校　村田奈央子

松浦光修先生の御講義

信仰を生活の業に為すことを言の葉強く師は警めぬ

日本青年協議会　別府正智

早朝参拝にて

玉砂利の音のみ聞こゆる参道をつれだちてゆく班員らとともに

㈱ビッグ・エー　永田裕子

師や友の御言葉聞くにも縁あり集ひしことをありがたく思ふ

㈱市印相澤食料百貨店　相澤加奈

伊勢神宮を参拝して

永遠に國栄へよと祈らるる祖の神の御心拝す

㈱コーチャル　大澤あゆみ

ゆたかなる森に小鳥のさへづりて清き流れの五十鈴せせらぐ

樋口繁子

式年遷宮の為大正年間より檜を育てる話を聞きて

百本の立派な檜を育てんと伊勢の杜人ら力合はする

第三十二班

㈱コーチャル　小倉映子

内宮の庭から日の丸を見て
青空にはゆる日の丸仰ぎ見て守りゆかむと奮ひ立つなり

㈱ビッグ・エー　古賀あやか

宇治橋を渡りてゆけばほのかなる檜のにほひ心地よきかな

所沢市立中央中学校　青柳京子

豊受大神宮で初めて神楽の奉納を見て
合宿に集ひし友らと御神楽をかくも間近に見るぞ嬉しき

㈱東京白ゆり会　横井里江

古ゆ奏でられたる御神楽は響き続きて國を守らむ

㈱東京白ゆり会　笹川恵理子

玉砂利を踏みしめ行けば神園に御神のおはすがごとく感じぬ

公務員　神谷正一

外宮参拝
ほの暗く続く木蔭に入りたれば涼風吹きて心地よきかも
玉砂利を踏みしめゆきて正宮を心静かに拝みまつる

第三十三班

㈱丸信　米倉春美

楽の音としきり鳴く蝉の声聞けば時の流れのとまる思ひす

㈶台東社会教育文化会館楽生塾　加藤三枝子

清らかな朝の宮居の玉砂利を踏みしめゆけば心すがしき

㈱コーチャル　大澤春奈

朝日さす内宮参る友どちと共に祈らむ御國の隆盛（さかへ）
流れゆく川のせせらぎ見守りし鎮守の森の八百代の神

長内俊平先生の全体批評を聞いて

師の若き頃の想ひを聞きしより身を修めんと涙流るる

フジシールインターナショナル　宮本杏子

君の為凶事払ふ時ぞ今大刀佩（は）き弓持て清き心に
雨あがり澄み渡りたる大空を仰げば神の坐すを感ずる

日本青年協議会　松藤慶子

なめらかな琴の音流れて神々の天降りくる心地するかな

若築建設㈱　池松伸典

石段を昇りてゆけば薄衣に透かして御正宮の姿見えくる
五十鈴川の清き流れをかはせみの色あざやかに飛び過ぎにけり

第三十四班

片桐久子

病む我を友は寄り添ひいたはりて優しきまなざし心安らぐ

阿部サナエ

合宿に向ふ朝の車窓より
台風の過ぎたるあとの山々はつねより優しく青くひろごる

中越範子

この國と天皇の弥栄をあはせ祷らむ神の御前に

尾関千枝子

峰かかる真白き雲に包まれて台風のあとの富士神々し
美味しき実を来年こそは生らさむと老いたる柿に話し掛けたり

島村善子

ざくざくと宮居詣での友どちの足音高くひび

きわたりぬ

㈶台東社会教育文化会館楽生塾　岡部静子

清らかな川面に映る伊勢の杜神栖(す)む杜は永遠に変らじ

湯亭こんや　青砥潤子

宮の杜大樹の幹に風わたり神を感じて心安らぐ

国民文化研究会

㈳国民文化研究会理事長　上村和男

台風の近づくさまを聞きてより心ははやりて合宿地思ふ

出発を早めんと思ひ旅立ちの装ひする手はかどらぬかも

朝参り

朝づく日玉砂利ふみしめ大神に友らつどひて拝みまつる

（二回目の作品）

五十鈴川渡りてゆけばふるさとに来たる心地し玉砂利なつかし

玉砂利をふみしめゆけばさくさくと音のみ強く心にひびきく

人もなき参り道には打水の心くばりの身にしみにけり

若き時教へを乞ひし師の君もいまはいまさず淋しさ身にしむ

元拓殖大学総長　小田村四郎

内宮早朝参拝

さはやかに澄みきる朝の気を吸ひて心すがしく宇治橋わたる

透きとほる五十鈴の川の清流に手を差入れて心清めつ

杉木立そびゆる中の木漏れ日を受けつつ玉砂利を踏みしめ歩む

玉垣の奥深く鎮まる大宮を畏みをろがむ友らとともに

八年の後に迫れる次の遷宮のつつがなかれと祈りてやまず

（二回目の作品）

緑こき神のみそのの鳥居より静かに宮居ををろがみまつる

朝といへど強き日射しに照り映えて樹々の緑のあざやかに見ゆ

宇治橋のたもとに集ふ朝礼も今日が最後となりにけるかな

共に学び共に語りし想ひ出を胸に刻みて別れ行かなむ

元電源開発環境立地本部本部長代理

長内俊平

八月二十六日内宮様み垣内参拝

島路山に朝日の昇る光(かげ)さして渡る五十鈴の瀬音すがしも

五十鈴川永久(とこは)に濁(にご)らぬ清き瀬の水を手に汲(く)み頂きまつる

終(つい)のお参りとなるやも知れぬお参りを大み前ま近く拝すかしこさ

みあらかの千木(かつを)鰹木に朝日さし耀(かがや)ふみれば大み光かと思ふ

大み光に名もなき臣も照らされて大み懐(ふところ)に抱かるるがごとし

参り終へ仰ぐ神路のみ山かけてうろこ雲白くひろがりてあり

（二回目の作品）

占部賢志君のお蔭で沼波瓊音先生のみ歌を拝して

みうたよむにたちまちなつかしき師に会ひて語る思ひにせられぬるかな

み子おもふこのまごころゆ国を思ふ篤き思も生れましけむ

黒上先生が慕ひましつる師のみうたよみまつりつゝ魂ぬるるかも

われらゆく道の枝折をいまさらに心にふかく

思はしめらる

㈱宝辺商店取締役会長　寶邉正久

内宮参拝

五十鈴川に手を浸しつつ心深き亡き人のこと
友と語りき
森かげの参り路友と共にゆけば筑紫の友の偲
ばるるかな
大杉も大楠の木も正宮のみ前のみちに高々と
立つ
み垣前に立ちてぞ拝むアマテラスオホミカミ
のみ名唱へまつりて
年古れる宮のみ屋根の金色の鰹木光る上る朝
日に
宇治橋の橋板に立ち川の音聞くがすがしき朝
詣りかも

（二回目の作品）

神風の伊勢の朝の空澄みて森かげ高く国旗ひ
るがへる
けさを別るる若きら面をかがやかせ語りつゝ
ゆく朝の道を

日鐵プラント設計㈱　今林賢郁

五十年の歩み重ねてこの年は伊勢の宮居に集
ひけるかな
とこしへのみ国のいのち祈りつつ努めきたり
し月日なりけり
まがごとは絶ゆることなく起りきて憂ひは深
しみ国思へば

（二回目の作品）

神路山てふみ名こそ良けれみやしろを守るが
ごとき深き緑よ
晴れわたるみ空の中を昇りゆく国旗仰げば心
すがしも

音羽建物㈱顧問　磯貝保博

木々の間ゆさしこむ朝日かがやきて光のかげ
のあざやかに見ゆ
御正宮近づくにつれ玉砂利を踏む音高くひび
きて聞こゆ

（二回目の作品）

和歌うたふ国民なれば我もまた作りつづけむ
つたなかりしも

拓殖大学客員教授　山内健生

今林賢郁兄、五十周年記念出版『名歌で
たどる日本の心』を紹介す
よき本とみ手にかかげて語りゆく君がみ声を
聞くはうれしも
「日本の心」を記せし書なると語るみ声に力
こもれり
ふたとせのいたづき稔りていまここに形とな
るがわれもうれしき
とりどりの執筆メンバー十四人統べ率ゐるは
君がみ力
わが書きし「時代の概観」見事にも師のみ筆
にて生まれ変れり
装丁も品よく仕上る記念出版われらの思ひは
形となりぬ
まづはまづ小田村（寅二郎）先生！と思ひ立
ち師の御霊前にささげまつりぬ（八月二十日）

（二回目の作品）

第一日目、班別研修で班室に出向く
廊下まで高き笑ひのもれ聞こゆドアの前にて
思はずたぢろぐ
ノックしてドアを開くればいや高く声のせま
りて我を包めり
それぞれに明るきみ声の乙女らの部屋内にあ
りて我を迎ふる

㈱寺子屋モデル　山口秀範

二日目朝の集ひにて

「神宮」で合宿せむと定まりて一年は経りけ
ふを迎へつ
それぞれのなりはひ割きてこの夏もみ友ら集
ひぬ南ゆ北ゆ
神路山望む広場の大ポールに日の丸掲げむと
の念ひはかなふ
台風の過ぎしすがしき朝空に目にも著けき国
旗翻る

いまの世に我らが誘ひに応へたる一人一人を
尊しと見つ
三泊はつかの間なれど一生の友求ぎ給へ若き
君らよ

㈳国民文化研究会事務局長　稲津利比古

小柳陽太郎先生の意識不明となられしと
聞きて

師の君ゆ電話のありて三日前意識不明になら
れしと聞く
時あたかも医者なる子息の帰り来て診療せり
とふ幸ひなるかな
今はただその折りのこと淡々と笑ひを交へて
語り給ひぬ

小田原青少年相談センター　岩越豊雄

かしこしや伊勢の宮居の千木の上に鏡のごと
き朝日懸かれり
すがすがし神路の山に向ひ立ち青きみ空に日
の丸あふぐ

福岡県立直方高校　小野吉宣

大御神しづもり給ふみやしろにぬかづき祈る
今朝ありがたき

小柳陽太郎先生を思ひて

師の君の教へ導き有難く五十年経たり合宿教
室
吾が学兄の差配のもとに五十年の記念の集ひ
今開かるる
ひたむきな学兄の思ひに吾も又せめて応へむ
と会社を出でぬ

㈱石村萬盛堂　石村僊悟

伊佐ホームズ㈱　伊佐　裕

神苑のみどり豊かに広がりし白玉の参道歩む
清しさ

福岡県立太宰府高等学校　占部賢志

岸本　弘大兄の古事記朗読

おのが大刀慕ひつついのち果てませる倭建命
のみ歌つつしみて聴く
古事の文読む先輩のなつかしきみ声迫り来波
打つごとく

住電エレクトロニクス㈱　布瀬雅義

朝まだき静かな御園にみ友らと玉砂利を踏む
音のひびきぬ
緑濃き御園の木の間に差しこめる朝日の帯の
金色に見ゆ

㈱みずほコーポレート銀行　小柳志乃夫

長谷川三千子先生のご講義を聞きて

にこやかにゆつくりとかみくだき語りますお
話に次第にひきこまれゆく
〝てにをは〟の不思議の働きに日本人の思想
の源を求めたまひき
無意識に語る言葉のそが中に日本文化の底力
ありと
言の葉の豊けき海にいだかれて生きる我らの
幸を思はむ

日章工業㈱　藤新成信

事前合宿にて御垣内参拝をせし折り

神さぶる宮居の庭にゐならびてこの合宿の無
事を祈りぬ
五十回重ね継ぎ来し先輩らのいたつきを偲び
手をば合はすも
来年もまた重ねなむ新らしき命育むご遷宮の
ごと

（二回目の作品）

九工大林君の閉会の挨拶を聞きて

三年間共に学びし友どちは今壇上に登らんと
する
四日間を振り返り述ぶる感想は我らの心を統
べゆくごとし
瀬木君らと力を合はせ全国のリーダーたれと
祈りやまずも

新明電材㈱　飯島隆史

夏空の輝く下を友どちと玉石ふみてゆけばす
がしも
晴れわたる夏のみ空に日の丸は歌声の中高く
のぼりぬ

君が代を大き声もて唄ひけり朝の宮居にみ旗仰ぎつ

千代田漢方クリニック　桑木崇秀

さはやかな伊勢の宮居の朝参り日の本に生まれし仕合はせ思ふ

幾千年経りにし杉かすくすくと伸びると見れば古へ偲ばゆ

古へゆ傳へ来しいのち若きらがしかと護りて傳へよかしと祈る

元高校教諭　末次祐司

伊勢参宮

年ふりし杉の木立を仰ぎつつ玉砂利をふむみ友らと共に

日の本の民の心のふるさとと伝へこし宮伊勢の宮居は

畏くも神のえにしに結ばれて今日の佳き日に神詣でたり

（二回目の作品）

五十鈴川に手を洗ひ、口をすゝぎて

いつまでも目に止めなむ五十鈴川清き流れのその面影を

汚れたる身も心をも洗はなむ五十鈴の川の清き流れに

高村光紀

お神楽の舞を見て

繰り返す動作は簡単に見ゆれども心やはらぐ風情覚ゆる

（二回目の作品）

合宿で旧友と再会して

久々にまみえし友は笑みをうかべ時間のへだたり覚ゆるもなく

お互ひの歳は六十路過ぎたるも語るは若き日の続きの如くに

幾年もまみえぬ期間の空白はあつと云ふ間にも消え去る思ひす

元キューピー㈱　山本伸治

神苑の玉砂利踏みて静まりし千古の神苑いま歩みをり

品質環境ＩＳＯ審査員　山本博資

早朝内宮参拝

朝まだきやしろの庭はしづまりて踏む玉砂利の音の清しさ

（二回目の作品）

伊勢の地に集ひの庭にて常若の学ぶ力を得たるは尊し

㈶全日本交通安全協会　亀井孝之

ほのぐらき参り路行けば木々の間ゆ朝日さしきてひかりまばゆし

（二回目の作品）

宇治橋に立ちてながむる水の面に写れる木々のみどりゆたけき

富山県立富山工業高校　岸本　弘

出会ひ得て一夜を経たる乙女らとそぞろに歩む朝の参り路

静かなる語らひの声玉砂利を踏む足音の宮居にひびく

この朝け友らとならび柏手を打つ清けさに心洗はるる

参拝を終へし宮居に朝日影今静かにもさし出づるかな

防衛大学校　太田文雄

ひさかたの日差しさし込む木々の間にせみの音繁く響きわたれり

鹿児島県農協中央会　定栄安治

油山慰霊祭（六十回）に出席して

責任背負ひ命投げ出し旅立ちぬ君が遺せし文を見るかな

戦ひに敗れし責任は己が身の足らざる故と君遺しをり

声に出し文読みゆけば文かすみ声ふるへきてすすむこと難し

山口県立下松高校　宝辺矢太郎

外宮参拝の折りに

みともらと玉砂利ふみて正宮へすすみ歩めば
こころしづまりぬ
そびえ立つ大き神杉はるかなる年ふりたるらむ神さびて見ゆ

大牟田市立勝立中学校　西原正博

内宮参拝の折

木の間より朝日さし出でまぶしくも天照大神
出ましごとく

（二回目の作品）

全体感想自由発表の折

来年も又来ますと語りたる友の眼差し輝きてをり

北九州市立医療センター　森田仁士

豊受のみ神に捧ぐるみ神楽をあまたの友と身を正し見る
新しき木の香ただよふ神楽殿に雅びの調べ聴くは楽しも

（二回目の作品）

思はざる病ひを負ひし友どちを守り下されと神に祈りぬ

東京防衛施設局　山根　清

合宿開始を東京より思ひて

台風の過ぎし夏空仰ぎつつ伊勢に集へる友らと
師や友に一目会ひ得てくさぐさのことを語りたしとの思ひつのるも

合宿二日目小柳兄の短歌導入講義を聴きて

壇上の君の話はおちつきて言葉耳に残る思ひす
作らむとの意志さへあれば歌へると君は語れり力強くも

（二回目の作品）

岸本　弘先輩の体験発表をききて

朗々と古事記をよみませる先輩の御声の忘れがたしも
国偲ぶ命の御歌を自らの肉声のごと先輩はよまれき

大阪府立南寝屋川高校　絹田洋一

合宿地への案内状をいただきて

緑深き木々にこもれるみ社の写真も添へられし文美しき
合宿に集ふ友らを心こめて迎へむとふ思ひの伝はりて来ぬ
いかばかり心くだきてこの文を作りますらむ有難きかな

㈱フラワーコーポレーション　吉村浩之

朝の集ひの折り

透きとほる清水流るる五十鈴川木立の間より輝きて見つ

（二回目の作品）

折田宇代さん（崇城大学一年）を班室に訪ねて

「折田さん」ドアを開きて呼びかけば君の出来て我が前に立つ
かんばせをしばし眺めば記憶せし幼き頃のおもかげを見る
十年前動物園に皆で集ひ遊びしことの思ひ出さるる
動物園の芝生の丘を兄と二人はしゃぎ回りし頃のなつかし

㈱アルバック　北浜　道

外宮にて

いにしへをさながら今に伝ふとふ社の姿を臨み見るかも
しづもれるみやしろ囲む緑濃き木立に日差し蝉鳴きしきる

神奈川県立氷取沢高校　大日方　学

長谷川三千子先生が御講義後の班別研修に来られし折りに

小さかることにてあれど分からずば質問せよ

と優しくのたまふ
学生のとつとつと発する質問をうなづきながら聞き給ひたり
ささやかな質問にても懇切にお答へ給ふ御姿尊し

熊本県立菊池高等学校　久保田　真

朝靄の晴れて広ごる青空に旗めく日の丸見るはすがしき

（二回目の作品）

指揮班長をする庭本秀一郎君の姿を見て「初めてのことで不安」と言ひをるも落ち着きはらひて皆に指示する
決然と「時間厳守」と伝へをりし君の姿のたのもしきかな

平山直樹税理士事務所　北村公一

指揮班長庭本秀一郎兄
いつもより声上ずりて早口に連絡事項を君は伝ふる
その口調きつぱりとした響きありて会場の雰囲気引き締まりたり

五十鈴川御手洗場

稚き日に友らと共にこの川の水の流れに手を浸せしも
榊葉の動きに思ひ返さるるサイパンの御霊に捧げし舞を

㈱寺子屋モデル　三林浩行

合宿に勧誘せし精松直哉君
待ちこがるる友が初日の夜遅く伊勢に着きしと電話くれたり
一時はどうなることと気をもむが合宿の地に遂に着きけり

㈳国民文化研究会事務局　茅野輝章

北島治樹君と再会して「合宿に参加します」とのはずみたる君の言葉の力強しも
なつかしや夜の更くるまで語りたる正大寮の昔の思ひ出されて
にこやかに声かけくれしなつかしき君のかんばせたくましく見ゆ

東洋紡績㈱　庭本秀一郎

アルバイト生の短歌作り
懇ろに語り合ひつつ指を折る君ら見守りて心楽しも

（二回目の作品）

たくさんの人に支へられ指揮班の仕事無事終へ心すがしも

日本青年協議会　外村聖典

伊勢神宮神楽殿で巫女の舞を見て
ゆるやかに手に持つ榊ひるがへし神の御前におごそかに舞ふ

早朝参拝

㈱寺子屋モデル　横畑雄基

参道を歩み進めば玉砂利の音も体の奥に響けり
生ひ茂る木々の木洩れ日浴びながら友と参道を歩みゆくなり

㈱ラック　髙橋俊太郎

五十鈴川参拝ついでに立ち寄ればあまりに冷たく暑さ忘るる

（二回目の作品）

合宿の最後の朝を迎へての五十鈴の宮のさはやかさかも

横浜市なしの木学園　徳田浩介

外宮にて納むる神楽の怪しさはなどて神々呼ばずものかな

（二回目の作品）

二百余名心に胸に抱きたる決意はやがて世を照らすべし

飯塚市立鎮西中学校　大津健志

岸本　弘先生の講義のをりに
思ひこめ静かに響く歌聞きて倭建命の姿が浮かぶ

松尾神社　大和哲司

神宮の間近に行ふ慰霊祭大神の眼に背筋伸びたる

この國を思ふ心を忘れなばこの日の本の末は安けれ

テレビ西日本　穴井宏明

久々に友の姿を目にすれば自づと顔のほころびにけり

吾と出会ひ驚きながら喜べる友の面に嬉しさ込みあぐ

青木啓昌

久々に会ひし友らと語らんと胸高鳴らせ伊勢に到着す

大阪国際大学　奥村文男

五十鈴川渡る風さへ神さびて宮居の木立心鎮まり

庭本和香子

指揮班長依頼の電話を夫が頂戴して「どうしよう」口ではさうは言ひつつもはずむ心を押さへきれぬ顔

常の日は「なんでもええで」と言ふ夫は一度欲せば必ずなすなり

指揮班員アルバイト生の素直さにおのづと頭(かうべ)の下る思ひす

目黒高等学校　山根誠一

五十鈴川近くによればすずしさに汗ひきたりて心地よきかな

東海中学校　浅野佑弥

友達とそれぞれの故郷の方言を教へ合ふのは楽しかりけり

伊丹西中学校　富山智史

伊勢の朝のおいしい空気を吸ひ込んでラジオ体操心地よかった

東海中学校　福野貴仁

今までに聞いたことのない神楽舞ひのきれいな音楽心に残った

合宿地に寄せられたお歌

小柳陽太郎

合宿教室を偲ぶ

台風一過すみわたるみ空仰ぎつつ友集ふらむ遠き伊勢路に

長き月日伊勢の集ひを夢に描き今日を迎へけむ友らしぞ思ふ

玉砂利をふみゆく友らの足どりを遠偲びつつ胸迫りくる

ふり仰ぐ杉の木立を流れゆく雲すがやかに目にしみにけむ

今日もまた五十鈴の川の川水の流れゆくらむ神代ながらに

久々の友なつかしく語りあふ伊勢路はるかに偲びやまずも

なき友のみ霊よはろに天下り守りたまへよけふのつどひを

合宿閉会後間もなく、ロンドン留学中の伊藤俊介さんから、六班班付横畑雄基さんにEメールにて

つとめ終へ友と語らふ君の姿遠き國より思ひ浮かべぬ

横畑の返歌

はるばると遠き國より友を思ふ和歌(たより)届くは嬉しかりけり

あとがき

秋冷の候、皆さんにはその後如何お過ごしでせうか。伊勢「神宮会館」で共に学び、語り合つた「合宿教室」から早や二ヶ月が過ぎようとしてをります。このたびやうやくこの「感想文集」を皆さんのお手許にお届け出来る運びとなりました。この「感想文集」は、「合宿教室」の最後に走り書きしていただいた感想文と短歌を編集したものです。

編集作業は、まづ、それぞれの班の班長又は班付の方々（国民文化研究会会員）に、感想文と第二回の創作短歌を添削・編集していただくことから始めました。

皆さんお一人お一人の心のこもつた文章・短歌を丹念に読み返し、編集してゆくことは、神経を使ひ、時間のかかる作業ではありますが、皆さんの生々しい言葉にお一人お一人の感動を偲ぶことのできる心楽しい一時でした。

それぞれの方々に編集していただいた編集方針は以下の通りです。

㈠「感想文」について

原文をできるだけそのまま掲載することを基本方針としました。ただし、ページ数の関係で、執筆者のお心のうちが最も強く表現されてゐると思はれるところを摘録しました。文意の不明瞭なところは、執筆者のお気持ちを辿りながら、原文のニュアンスが損なはれないやう慎重に加筆しました。なほ、「かなづかひ」については、原文を尊重し、漢字及び文法上の誤りについては訂正してをります。

㈡「短歌」について

合宿では二回にわたつて短歌を作りましたが、第一回目のものは、全参加者それぞれ一首以上を洩れなく巻末の「短歌詠草」のところに収めました。また、感想文の執筆の折につくつていただいた第二回の短歌は、それぞれの感想文の末尾に入れました。感想文と同じく、文法上の誤り等は訂正いたしました。

この「感想文集」作成のためには、班長および班付の方々以外にも多くの方々の御協力を得ました。お忙しいお仕事、学業の中で、休日や終業後の時間をさいて御協力いただきました磯貝保博、髙橋俊太郎、茅野輝章、坂本芳明、大日方学、池松伸典、鎹信弘、小柳志乃夫、山根清、濱崎史嘉、本間隆宏、武田有朋の各氏に心から御礼申し上げます。

最後に、この「感想文集」の「あらまし」作成および第一回目の短歌の編集にご尽力いただいた国民文化研究会会員の諸氏に厚く御礼申し上げます。またカメラ・レポートの写真は國武利貴弥さんにお世話になりました。

いろいろな方々のご努力によつて出来上つた「感想文集」を、ご精読下さいますやう切願します。

読み進むにつれて、「合宿教室」の三泊四日間の様々な感動が鮮明に甦つてくる事と思ひます。二ヶ月前に得た感動を単なる「思ひ出」に終はらせることなく、起居を共にした真に語りうる友との交流に、また新たな求道への出発点とされるやう切に願つてをります。なほ、ご精読後には、是非とも班長、班付の方々、班友に一筆便りを差し上げていただきたく、併せてお願ひ申し上げます。

（北浜　道　記）

〔資料〕
第五十回〝合宿教室（伊勢）〟感想文集
非売品
平成十七年十月三十一日発行
編集兼発行者
社団法人　国民文化研究会
理事長　上村和男
編集長　北浜道
東京都渋谷区東一―十三―一―四〇二号
〒一五〇―〇〇一一
電話　〇三―五四六八―六二三〇
FAX　〇三―五四六八―一四七〇